

川柳塔



No. 890

七月号

予 告

橘高薫風叙勲記念川柳大会

と き 九月二十四日（月・振替休日）

と ころ リーガロイヤルホテル

（大阪市北区中之島五―三―六八）

◎詳細は八月号に発表

路郎賞・川柳塔賞の応募は

八月号の刷込み用紙で――

①川柳欄・水煙抄欄に六か月以上、出句した
人に応募資格を認める。

②平成12年9月号から平成13年8月号までの
入選句（自分の句を出句する）

③8句を楷書で書く。8月15日必着のこと

麻生路郎・葭乃句碑建立記念川柳大会

除 幕 式

と き 7月7日（土）午前11時から

と ころ 尾道市志賀直哉旧居前文学公園

川柳大会

と き 同日午後1時開会

と ころ 尾道市役所前公会堂別館

課題と選者（各題2句・欠席投句拝辞）

「踊る」 河内天笑選

「晚酌」 西出楓楽選

「似る」 木下草風選

「道」 小林由多香選

「海」 八島白龍選

「情熱」 石原伯峯選

事前投句は締切りました。

当日投句締切 十二時半

会 費 二〇〇〇円（記念品・軽食・発表誌呈）

◎詳細は六月号裏表紙をご覧下さい

お問い合わせは本社事務所へ

尾道市・川柳塔社共催

夜市川柳誕生裏話

河内 天 笑

ふるさとは大仙陵のあるところ 摩天郎

昭和四十八年十二月、堺市大仙町の広大な仁徳御陵の正面左に、八木摩天郎先生の立派な句碑が建立されました。

公害を吐けとは仁徳のたまわず 摩天郎

の句が、その約一年前に朝日新聞で大きくとり上げられましたので、当初はこの句が句碑に予定されておりましたが、市側との話し合いで「ふるさととは」の句に落ちついたのです。

このような立派な場所に句碑が建てられたことは我々の誇りでもありますが、八木家はご先祖からの大地主で、私有地を市に寄贈されたり、区画整理に大変協力された。

功労者だからと聞いています。

その後金婚式などおめでたが続きましたが、昭和五十五年四月二日一夜にして心不全で鬼籍の人とられました。

さあ大変です。それまで毎月十三日に摩天郎居で開かれた堺の句会もたちまち会場に困り果てました。会の運営は私がしゃしゃり出ることになり、当座は無我夢中で会を続行させてゆきました。

会報もこれまでの「堺若芽川柳会会報」を、「川柳堺」に改め当時の堺市長、我堂氏にお願ひして「堺」の題字を書いていたいただきました。

二つ折りB5四頁の会報は三頁までは句会吟で埋まりますが、四頁目を如何にユニークなスペースにするかが課題でした。

そして故中尾濂介先生に私の考えをお伝えしたところ、心よくお引受け下さり四頁目は「川柳立見席」という見出しで、「座五」の研究をすすめて下さる事になりました。

二年間ご指導を受けたのち昭和五十七年

春、かねてより「大萬川柳」の大ファンだった私は、大萬川柳の形式を継承して選者だけは毎月かわるといふ、一年間の川柳マラソンを構想しました。

昭和五十七年三月の川柳塔社常任理事会において前年から主幹に就任された西尾菜氏が「大萬川柳をまた再復活させよと思いますが、清記とかいろいろ大変な仕事なので、何かええ考えありまへんか」と、腹案を述べられました。

「何という偶然か」と一瞬「ドキッ」としましたが、手を上げて川柳堺での私の構想を申し上げましたところ、快く「そーでつかそーでつか、それなら堺であんたやっとなはれ」と、二つ返事で私の趣旨に賛成して下さいました。

ちょうどこの年の夏から、往年の堺大魚夜市が大浜球場で復活するというニュースを知り、一も二も無く「夜市川柳」と名付けた次第です。その夜市川柳もことしの六月末締切分より二十年目に突入致しました。



座右の句

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑

私の句

花嫁は雪降る朝に生れた娘

(薰風)

宮野 みつ江

川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 夜市川柳誕生裏話……………	河内 天笑 …… (1)
麻生路郎・葎乃両先生との出会い……………	黒川 紫香 …… (2)
川柳塔(同人吟)……………	河内 天笑選 …… (4)
風薫る日……………	橘高 薫風 …… (53)
自選集……………	
水煙抄……………	板尾 岳人選 …… (59)
愛染帖……………	波多野 五葉庵選 …… (85)
川柳の群像 金井文秋……………	東野 大八 …… (88)
誹風柳多留二四篇研究 31……………	
茴香の花……………	西出 楓楽選 …… (92)

麻生路郎・葎乃両先生との出会い

黒川 紫香

私が小六の頃、小学生新聞という旬刊新聞があり、その文芸欄へまだ俳句と川柳の区別が判らぬまま投句したところ、川柳で特選に入選。この時に選考者で指導者だったのが、麻生路郎先生であった。

子供らは蛙の腹を嬉しがり 紫香
という句である。麻生路郎先生がどんなお方か知らぬまま賞品を貰えたことが嬉しかった。社会人となったある日、国鉄の大阪管理局に勤めていた僚友の正本水客君から誘われ、「大鉄川柳クラブ畔柳社」へ行ってみた。

梅田大鉄局の一室で川柳会が開かれ、集まる者二十人ばかり。真ん中に瘦せ型でチョビ髭を蓄え、細い指で煙草をつまみ、つきつき火をつけるヘビースモーカーが先生だった。司会者から新人として私が紹介された時、よほど小学生新聞の事を話そうと思ったが、威厳に圧倒されて言い出せなかった。句会が始まり水谷鮎美さん選の「三人」という題で三人で歩駒を探す涼み台 紫香
という句が天に抜けた時、呼び寄せられてお褒めの言葉を受けた。それ以来、先生のお側で水客、潮花共々三人教えを受け本社句会へ

秀句鑑賞「同人吟」

水煙抄

尼れいじ……………(94)

「薄い」……………

太田扶美代……………(100)

一路集「トラブル」……………

後藤早智選……………(96)

「倒れる」……………

矢内寿恵子選……………(96)

初歩教室「ノ」……………

田辺鹿太選……………(97)

全日本川柳誌上大会・二〇〇一年新潟大会……………

吐田公一……………(98)

六日本社句会……………

……………(101)

各地柳壇（佳句地十選／池田寿美子）……………

……………(102)

柳界展望……………

……………(106)

七月各地句会案内……………

……………(159)

■編集後記……………

楓葉・希久子……………(160)

……………(163)

座右の句

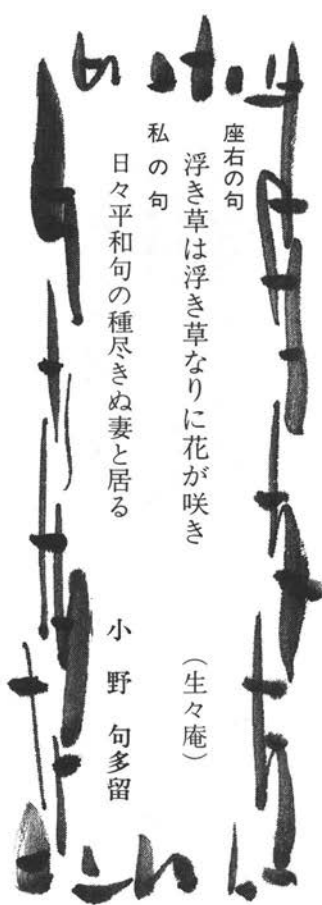
浮き草は浮き草なりに花が咲き

(生々庵)

私の句

日々平和句の種尽きぬ妻と居る

小野 句多留



出るようになった。物怖じせずチヨコマカと動く潮花、頼まれると嫌と言えない私、そして物に動かない水客の三人、どが先生のお気に召したのか、当時大丸近くで開かれていた本社句会の後で三人揃って残され「この際任すから本社句会の運営を三人でやってくれ」とうまく持ち上げられ、前句会部長の永田里十九さんに教えられながら、戦前戦中戦後まで句会のお世話をする事になった。

里十九さんは大丸近くで食堂を経営され、「親分、親分」と皆から慕われていました。

まだ戦争の始まる前の事でしたが、句会がすむといける口が親分の所へ集まり、先生を囲んで飲むのがしきたりであり、誘われても飲めぬ三人でしたからある日、先生から「君達甘党は話にならん」と叱られた。それを聞かれた葎乃先生が気の毒に思われたのか「紫香さん皆と飲むのでなしに食べに行きましょ」と誘って下さり、私の会社がよく利用する小料理屋へ行った。飲めぬのは私と水客だけで潮花はある程度飲めるし踊りの師匠。「食えや、話せや」のはすが「飲めや、唄えや、踊れや」になってしまい、潮花の振り付けで葎乃先生まで踊り出す賑やかさになった。

後で路郎先生が聞かれたらしく、そっと私に「君、面白かったらしいね。次は僕も誘ってくれよ」残念ながらそれ以来、世の中は戦時一色になり、そうした機会は無くなった。



河内天笑選

八尾市 村上ミツ子

鬼遊師の指名に急ぎあの世まで

散る花を追いかけひとり浄土まで

空いてしまった右手をどうしたらいいの

自閉の娘ひとりで背負うには重い

代筆という仕事から外される

ほんとうの味方が少し見えてくる

鳥取県 新家完司

プロペラが止まらないよう酒を飲む

ストーカーの気持も分かる片想い

としよりの恋を笑えぬ歳になる

おまわりさんに呼び止められてつんのめる

まだ元気まだ神様にすがらない

寒そうな小犬の真似をして眠る

豊中市 田中正坊

生きるとは胸いっぱい吸う大気

生きるとはしつかり食べる朝御飯

生きるとは待ちかねて読む新刊書

生きるとは名画にこころ洗う午後

生きるとは次なるツアー探す地図

生きるとはグラスに満たす琥珀色

弘前市 高橋岳水

本当の生を授かる癌告知

戦列を抜けると見えてくる表裏

余白なら抒情のペンがよく似合う

思いきり落花を誘う風の思慕

年輪に哀しみがある老母の背な

マジシャンの謎は詮索せぬように

富山市 舟渡杏花

濁世を生きる時々読むマンガ

ひよつとこの実力知っているおかめ

残照のページ埋めたい人ばかり

刺客かも知れぬ真つ赤なバラの束

逢うたびに視野を拓いてくれた人

サーカスに売ると言われたのは昔

倉敷市 小野 克枝

花を敷きつめて歩こうあと少し
みえみえの嘘に合わせている平和
しきたりが老いた木馬を眠らせず
急に止まれと言われて困る砂時計
冠と婚おなじ時間にやってくる
次の世も一緒と言うてくれぬ妻

米子市 林 瑞枝

海遠く富田城あとで見る下界
尼子の墓に好きな薊が乱れ咲く
ノスタルジーな視線うれしい船溜まり
生きの良い男料理に箸を割り
湧き水の冷たさ夏の掌がしびれ
背に翼つけて何時しか鳥になる

熊本市 永田 俊子

言えば傷つけるから苺をつぶす
お喋りがしたくて木々の芽が伸びる
会話ふととぎれお互い読んでいる
欲捨ててから知った白湯の味
煩惱を強く振り切る傘雫
千枚漬に漬ける千枚のことば

海南省 三宅 保州

お大師の浅き夢見し遍路笠
人類は居るのだろうか万年後

買い替える方がお得という故障

私ならとても払えぬ保釈金

なぜ値段言わないのですコマージュナル

胃袋に目盛りがほしい腹八分

宝塚市 嵯峨根 保子

新じゃがは肉の由来になりはせぬ

この風に五月闇とは生き下手な

箸紙のメモが渡った恋らしい

ピロイドのような声には油断する

率直に言えば簡単かぜ薫る

本当の批評を他人から貰う

鳥取市 植田 一京

風みどり走り出さずにいられない

踏み切った後でしまったなと思ひ

花柄の服を着ようか今日の鬱

まだ続きありそう元氣湧いてくる

野性的魅力が失せた男たち

働いてロボット一つ手に入れる

鳥取県 林 露杖

新緑の微風貪る肺の臓

万緑の山に向かいて声を張る

夕陽もう暑し五月の散歩道

学童の脚伸びやかに五月晴れ

お目当ての店閉じられて五月雨

付き添いの手持ち無沙汰をよしとせむ

弘前市 高瀬霜石

天職と信じいつぱん道を行く

ロッキングチェアはナツメロが好きだ

書斎兼懺悔室なる我が寝床

信号の真下に棲んでいる魔物

親切が過ぎるとつむじ風に遭う

孤児の瞳の闇を覗いているカメラ

青森県 西谷大吾

フルムーン過去がゆつくりよみがえる

野仏も蛍の宿もダムの底

ぶつぶつと婆が佇む休耕田

凶作の歴史を秘めた岩木川

岩木嶺を間近に仰ぐ千枚田

はらはらと闇に散りゆく城桜

富山市 酒井輝

ケアホーム行かずに終えて羨まれ

しくじつてからの本音は信じられ

ロボットへ夜警一人が起きている

貸してやる積りへ嘘とわかる嘘

木の癖を読んで出てくる鮑屑

男性が鳥に似てくる赤い服

横浜市 菊地政勝

口裏を合わせた人に忘れられ

愚痴悩み一緒に聞いている介護

銀鱗を躍らし鮎の里帰り

ねずみなど知らない猫が爪を研ぎ

船員がストレス置いてゆく港

号外が用意されてるめでたい日

横浜市 保田絹子

いつまでも武者人形が居候

母の日にフルーツパイを所望され

片言で孫の奴隷になっている

アイティーに新老人は臆さない

好物に唆される検査前

脱線もせずによく来た五十年

横浜市 清水潮華

お互いにきつかけ探す仲直り

ストライクゾーンで話受け止める

背伸びした目線出費をふくらます

ありがたくデフレにはした金が生き

応分の負担医療費恐くなる

差し向かい孫と嗜好の合わぬ膳

川崎市 和泉あかり

花束の花にも蜂は寄ってくる

親は親子は子で虹の描き方

ポリウムを落とすはなしに耳が立つ

苛だちが増えて人間臭くなる

挨拶をすると昨日と違う風

聞き流す耳の掃除を怠らず

静岡県 藪田 猿 杏

修業場羅漢誘う坂の道

春雷の一喝男泣きに似て

芝草に母子大小尻の跡

花冷えの寝込みばなる一ゆすり

大泣きをした児にっこり鳩を追

風采のあがらぬ奴が金を貯め

愛知県 早川 盛夫

定年になつても妻がいてくれる

定年で歩幅が合つたスニーカー

貯めるのはもう止めようよゼロ金利

影法師いやだ嫌だと従いてくる

一本のバナナふたりは仲が良い

食欲が落ちても減らぬ酒の量

京都市 高島 啓子

メモに似た便りが息子から届く

醤油をひかえてあとはメモ通り

律義者 部屋に四角く物を置く

思いやり元気な人になくて夏

小泉の人氣にやきもち焼く男

オランダの国籍ほしい安楽死

香芝市 大内 朝子

誇らしくとても嬉しい師の叙勲

新緑のシャワーを浴びる登山靴

ともだちと心引き合うタイムィング

こちらから踏み出す一歩から和む
気遣うてしゃべり失言くり返す
生きていることが嬉しい五月晴れ

熊本県 高野 宵草

不便さに耐えて地球にやさしいぞ

五年日記 辞世書きこむかも知れぬ

免許証見ればウソだら僕年の齢

寄りつかず避けているのもセクハラか

アンパンマンの手下になつて日が暮れる

居眠りへテレビしきりに語りかけ

松山市 宮尾 みのり

葱きざむ好きも嫌いもない暮し

それからは本音を隠す癖がつき

そういえば家に灰皿見あたらず

選択肢いっぱいあつて都市砂漠

潤いの髪だ恋している髪だ

自信過剰煮ても焼いても食えませぬ

香川県 池内 かおり

黒酢だの緑茶が効くと熟女達

勝鬨をあげ大根の花が咲く

恋してる友の素肌に艶がある

清掃に汗を流した五月晴れ

浦島で鯛や平目のバイキング

外人さんにせめてにっこり忘帰洞

香川県 神保坊太郎

終戦を見た日の丸を買いかえる
オーイハイ名前なくして黄昏る

美辞麗句ならば家来にでもらう
まあまあと隠した爪が退化する

おくびにも出せぬ過去ある再生紙
幸せの顔をせて押す車椅子

高知市 北川竹萌

五月晴れ故郷で茶摘み早立ちで
椎の花仁淀川沿い五十キロ

家挙げて一日茶摘みの競い合い
茶摘み技の一芯二葉ひたすらに

正午鳴る其処らに昼餉見つつ
日は西に新茶葉摘み葉三十キロ

出雲市 園山多賀子

逃げ道を教えてくれる亡夫の声
虚しさに心に襷絞め直す

年甲斐もなく年寄りになりきれず
荷物にはならないように竹を踏む

卒寿今プラス志向の風に乗る
種蒔いて梅雨の恵みを期待する

出雲市 石倉美佐子

夏祭り私は笛を吹いている
いそいそと肩を並べて夏まつり

笛の音に浮かれて踊ろうヤンハトナー

城山のなんじゃもんじゃは白い花
雨の日は透けるコートを着て行こう
紫の花を愛した雨女

出雲市 城多喜

迷走しては子供に叱られる
友達は主人の自慢ばかりする

晴れた日は楽しそうに走るバス
決心がついてゆつくり傘たたむ

新しい掃除機とてもリズミカル
瘦せたのは恋わずらいと言っておく

出雲市 竹治ちかし

路郎師は知らぬがぼくに緑之助
メイドイン満州ですと言う誇り

飲めぬ日は心配させぬほどに飲み
珍しい人が大事にされている

芽吹くの程良い頃を知る新芽
病人を病人らしくするベッド

出雲市 富田蘭水

医師の言うひとこと神も追い付かぬ
嘘ついた日から御飯が残り出す

人助けどれほどしたか破れ傘
善意背負い忘れた眼鏡かえりくる

大事なのは今が一番夢よりも
境界論宇宙の星が笑いこけ

島根県 森 茂 美

穂の芽を他人にとられて悔しがり
筍を茹でる老妻守備範囲

花の下チャンチキおけさの人が逝く

花鋏の音にもこもる思いやり

ほうたんの散る花びらに春がゆく

空の鯉阜月の空を一気飲み

宇部市 平 田 実 男

喉元で余計に熱くなる煮え湯

誰か来るらしい掃除をしてる妻

抜擢で友一人減り二人減り

違います立派な人と偉い人

不景気と思えぬ生ゴミ粗大ゴミ

妻と一緒に喜んでる万歩計

広島県 藤 解 静 風

大腸がばんざいをする検査シロ

感性の鋭い角は折れやすい

ゴミ処理場やがてはここもゴミになる

米百俵総理に期待したくなる

何年ぶりかしら政治がおもしろい

亡夫かも知れぬ蹄の音がする

竹原市 三 宅 不 朽

天を突く炎よこれしきの灰か

化野のかぜ平凡な人ばかり

寝転ぶと女体を競う流れ雲

蛍濃く闇夜の澄んでくる闇夜

昔むかし絆のしかと重箱に

勝ち負けは野球で足りる今日も暮れ

竹原市 小 島 蘭 幸

ファーストレディーがいない総理の支持率よ

あの頃のハングリーには戻れない

眼科も歯科も一度来いと言っていた

喧嘩ばかりしている記念日の夫婦

結婚記念日娘が花束をくれました

鳩が増え続ける白い白い巨塔

倉敷市 井 上 富 子

疑いが晴れる優しい瞳が戻る

リバウンドしても懲りないダイエツト

川の字に寝た子が親に手を上げる

自分らしい花を咲かせる趣味の道

頑張れば大きな花の咲くカバン

セールスに負けてはいない火の車

岡山県 大石あすなろ

スランブを逆手に充電しています

磨きすぎても何か人生味気ない

押すだけで写るカメラと旅をする

後編も二人三脚して暮す

セロリ噛むほろ苦きかな来し方も

エンジンのかかりだんだん遅くなる

岡山県 富坂志重

大風呂敷に春を包んで里の母
転んだらも一度起きて見るつもり

スイッチは無いがうちの母さん全自動

ふる里を話せば言葉厚化粧

無防備にすった甘酒やけどする

風邪二日考える時間をくれましたた

鳥取市 徳田ひろこ

多国籍の八宝菜をまろやかに

恋なのか都忘れも紅いろに

待つだけの恋にコケシの瞳がうるむ

成就せぬ恋でもいいの天の川

万策が尽きて撫で仏に縋り

サラダ菜に抱かせて笑うプチトマト

鳥取市 上田宣子

好奇心ざわざわざわと川をゆく

杉の木の高さを地図に載せてやり

木を植えて春夏秋の絵そらごと

ポリシーのところどころに無彩色

悪役を貫く足袋の白さまで

ときめきよ季節はずれの花なりに

鳥取市 倉益一瑤

虫眼鏡で探すわたしの青い鳥

春うららとほけ女が持つぬくみ

花道で着たはピエロの服だった

有難い涙わさびのせいにする
土砂降りのあとにはきつと虹が出る
うどの大木ばかりになるか日本よ

鳥取県 石谷美恵子

丁重な姿勢いちばん悪だった

紙の皿だつて盛りたい夢がある

愛を描く一途な彩が美しい

苦労した人だ豊かな答くれ

筈も部分で違う調理法

短気だがたまに優しいので添える

鳥取県 原みさを

梅雨ざむの霧は海から這い上る

くねくねとカルテに書いてあるいのち

誰でも死ねる心配しなさんな

誰も見ぬところへ移す一揆の碑

雲雀の巢しらんふりして刈残す

口ずさむ古賀政男なら少しなら

鳥取県 乾喜与志

朝夕に喉の掃除を怠りぬ

巳の年も半ばどこまで行けるやら

ご先祖はさぞお待ちかね経を誦む

半眼のみ仏なみだ溜めてるな

太陽も月も仰いで手を合わす

ミニデイに婆さん連れて歌が出る

鳥取県 羽津川 公 乃

月一度阿倍野区と書く趣味ひとつ
葉桜に何故か楠公像だぶる
台所キッチンと呼び椅子にする
ストレスを溜めぬ程度に家事手抜き
夢捨てた日から白髪が増えて来た
一筋の道模索して喜寿の坂

鳥取県 西原 艶 子

風薫るさやえんどうの花の白
上着脱ぐ季節が好きな若さだね
イメージチェンジ髪形変えて服変えて
ほんとうに空気となつてしまふ過去
どれほどの痛みか癌を抱く命
病室の沈黙静止画のように

鳥取県 土 橋 はるお

木の棒を持つとチャンバラしたくなる
びた一文も貸さぬ借れない主義でいる
スーパ―に木刀持つて歩く男
駅のホームで鞆が点呼受けている
本棚にカラカラ笑う本がある
外米の寿司がワサビでしゃんとする

鳥取県 谷 口 次 男

人間の知恵を笑ってカラス飛び
不景気も目線を変えて日々のん気
カラスから生活の知恵もらう日々

童心は肩に力が入らない
初対面斜に構えて口固し
目と鼻の先にあります生と死は

鳥取県 さえき や え

ありがたい日々わらびぜんまいふきごみ
久しぶりごんたがはがきくれました
聞く耳はあるがグチ聞く耳はない
仏を持たぬ人がやたらと花芽つむ
目線を下げてくらす世間に鬼は居ぬ
野草展心はずませ逢いにゆく

鳥取県 土 橋 睦 子

藤棚で道に迷つたスニーカー
芳香を放つ雑種の百合咲かせ
紋白蝶わたしの肩を飛び立ちぬ
裏山で静かに咲いた君子蘭
畦道に棲みついて咲く花菖蒲
告白を打ち消すように雨が降る

鳥取県 岩 崎 みさ江

自尊心捨てる友が寄つて来る
ストレスの深さに刻む縦の皺
父の日にエプロンと言うプレゼント
向かい風チャンス捉えて帆を上げる
諍いの種播くほどの遺産なし
おぼろ月うさが棲むと思いたい

倉吉市 牧野芳光

道いっばい話広げるランドセル
忠告を聞いて私の彩失くす
青春という名が駅にたむろする
一年に一度きつちり咲ける花
もう少し話していけよ盆の風
花火師の盆古里に遠く居る

倉吉市 松本よしえ

遺伝子が徒花だとは知らなんだ
徒花が精一ぱいに咲き誇る
三日目の筍竹の顔をする
嫌われぬようにとほけた振りもする
美しいナース新婚さんだった
花の鉢こけて入院まだ続く

倉吉市 最上和枝

窯出しの陶工の手に火が匂う
人の目を盗み我が田に水を引く
少年が突然森の樹を倒す
木を植える軍手に春の詩がある
母の味繋げて作る木の芽和え
戦国の荒野にもみの木が残る

筍の皮に包んだ母の愛
面食いが特に化粧へこうるさい
仏壇の妻に時々愚痴をいう

倉吉市 米田幸子

身の丈にあつたルールで恙ない
リハビリときけば逆立ちでもやるか
満々と水を湛えた父の湖

米子市 光井玲子

風薫るメニユーを少しかえてみる
人の子も育てる牛よありがとう
あと一歩のところでもいつも足踏みだ
表向きは父にリードをさされている
夢を描くゆとり出来たが老い進む
絶妙のコンビと思う紫蘇と梅

米子市 木村富美子

風などに負けていられぬ荷を背負う
思いきり春を唄おう風車
仔牛産む牛の泪が忘れぬ
父と牛言葉通じていたらしい
午後でもいいゆつくりとついて行く
虹色の夢見つづけて八十路

米子市 政岡日枝子

欠点を互い知ってて仲がよい
少しづつ休める道も作っておく
裏道を通るカラコ口風がなる
原点に夢を残して悔いばかり
めまぐるしく変わる私の本音
満身創痍たたかってきた地図だらう

島根県 榎原秀子

六道湖の朝を絵にするしじみ舟

新緑の色と香りに酔う山辺

菖蒲湯をたてずじまいの旅にいる

旅帰りの畠の草に負けました

軟らかい筍ですとおすそわけ

結局は元のひとりの母の日よ

和歌山市 牛尾緑良

運不運言わず桜は散り果てる

道化師も桜も今を生きている

隊列を少し離れる定年後

時代遅れの男が過去を切り捨てた

罌のある方と知ってる足の向き

朝顔の咲く音を待つ失意の日

和歌山市 古久保和子

よく喋る妻のスイッチ切っておく

呑み込みが早い直ぐに転ぶ癖

アンダーライン引いて覚えたことにする

パン食の朝から崩れだす父権

生温い手でした落選した握手

ラーメン一杯わざわざ車走らせて

和歌山市 楠見章子

みどりのシャワーシャンパン飲んでる気分

つけ爪がおどるすし屋のカウンター

きき酒の馳走にはしゃぐフルムーン

ITにどっぷり主婦のひきこもり

ビートルズもやがてクラシックに入る

鼻を洗っていっぱい空気吸いにいこ

和歌山市 西山幸

鯉織泳ぐと空が広くなる

残高を見て反省をくりかえす

さくらんぼ淡い期待が揺れている

一つ二つと生きのびてきた数え唄

紫陽花の心変わりがおもしろい

世渡りは遺影の父母にまだ勝てぬ

和歌山市 青枝鉄治

許す気になつて言葉のカードがとれ

ストレスを家に持ち込むイエスマン

建前と本音ある世に住み馴れる

ロボットに技を教えて使われる

道草を覚え出て来た人間味

ウインドーに腰の曲がりを裁かれる

和歌山市 吉村さち子

こころして地元の野菜ばかり買う

拭いて磨いて明日の見える窓にする

いろいろの顔して我が家纏めてる

気にしてた義理を果たした歩の軽さ

五分五分になると弱気になる私

疲れ切った私を鏡見抜いてる

和歌山県 川上大輪

隣の花がきれいに見える負けている
混ぜたら危険私はいつも一人ぼち

真っ先に駆けつけて来たのは他人

衣食住足りて心に風が吹く

鉢植えにまだ亡妻がいる笑っている

思い切り笑えば雨が止みそうで

和歌山県 中後清史

三枚に下ろして見たい腹の中

ちと呆けてほしいね妻の記憶力

それで気が済むなら聞こう妻の愚痴

支払いになっても一度値切る妻

着飾った孫をとんびに攫われる

一日が無事に終つてホッとする

川西市 西内朋月

一言を倍で返され黙り込む

確率を知つたら買えぬ宝くじ

五回目の命日独り暮らし馴れ

ぜんまいがこれほど増えるとは知らず

わたくしの出番とばかり八重桜

キュービッド間違つて射たターゲット

三田市 久保田千代

父誉める人あり心満ち足りる

横道に逸れた手毬がよく弾む

気心が知れて正座の膝くずす

もう一步押しが足りない私です
いやな事聴かされ帰路は遠かった
そよ風に羅漢気儘なポーズ取る

西宮市 門谷たず子

試行錯誤ばかり進めぬ蝸牛

ふっ切つて前だけ見よと風やさし

思い直せば方程式も解けてくる

ゆるやかに絆結べば足軽し

入院近しカルテの伏字追いながら

思い出を一パイ作る旅に出る

西宮市 西口いわゑ

大夕陽なぜか泣きたくなくなつてくる

反故にしたい約束のある手帳

野仏もキラキラ花に囲まれる

またの世があると思えば楽しかり

豊かさが人を希薄にしてしまふ

酒とろり野暮な約束忘れられ

西宮市 菊池トミエ

砂浜にキラキラ夏が駆けてくる

潮干狩キラキラ光る子供連れ

雁帰る群れとぶ空に呼び合つて

取敢えず頭を下げて風避ける

ネギ坊主世は不可解な事ばかり

ほどほどの暮しに春の陽はやさし

西宮市 山本義子

あの時に勇氣あればと夕日見る
雑草の姿どうあれしたたかだ
天邪鬼とお人好しとを使いわけ
いい人と言われほんましんどおす
年寄りが元氣すぎてアハハ駄目
手抜き料理わかつているが止められぬ

尼崎市 奥山美智子

母の日はカーネーションに囲まれる
肝臓を病んでやられたなと思ふ
楽しんで飲んだお酒が憎めない
やせた身へやせる薬を飲まされる
寝て食べてなんにも出来ぬのが恐い
がんばってみんなが同じ事を言う

尼崎市 春城年代

卒寿までごゆるりなされ紅つけて
身の丈の余白に虹の絵を描こう
あんぱんの美味しい店を見つけたよ
五月人形飾る夫の背が青い
いまの今をとどめようない砂の城
三日ほどしたら疲れが出るだろう

尼崎市 春城 武庫坊

懇親宴楽しい時間早く過ぎ
花びらを散らし気楽になる桜
塩脂駄目さて老人は何を食う

バス揺れてはつきりわかる膝の老い

待合室で病の自慢する男

耳をすまして韓中国の声聞こう

大阪府 米澤俣子

舶来の風邪も土産に旅帰り
ひとりごと少し聞いても欲しい時
冷静にもどれば何のことはない
買い被られた私の役が重すぎる
初どりの縁しあわせ豆ごはん
まあいいかあしたに賭けて早寝する

大阪府 澤田和重

願ってもない話だが裏がある
金かけた小唄にしては味が無い
いい知らせ記念切手が貼つてある
白黒を問う性格で疎まれる
ここで短気だせば相手の思う壺
妻が起きたらしい空気が動き出す

大阪市 西出楓楽

前向きの方がまわりに居て疲れ
雨しとど敵と味方の数を読む
できちゃった婚に息子はあこがれる
ふくみ笑いばかりしている春キャベツ
疑問符を解いて淋しくなるばかり
補助席の座り心地に慣れてくる

大阪市 神夏磯 典子

それからの私よく食べよく喋る
憧れたトップで凄いい風に逢う

閻魔さん裁ききれない世相なり
ゲーム機と遊ぶ静かな子供部屋
一皮を剥けばあちこちサロンパス
大切な余生 喧嘩はしてられぬ

大阪市 津守 柳伸

行き帰り土産の試食させるバス
桜桃 富士もくつきり感謝感謝
入浴は後からにするバイキング
旅プラン追うて居職の波静か
ガーデンング グルメを添えて研修会
息止めてバランス取っている背伸び

大阪市 小糸 昭子

新鮮なトマトに伸びる太い腕
新鮮な水吐き蜆湖守る
桜折るホモサビエンス許せない
自惚れてうっかり話の腰を折る
山盛りのいかなご春を連れて来る
遠出して展望台から目で食べる

大阪市 安達 はじめ

七夕の笹は願いで重すぎる
時計みな止って欲しい楽しい日
金と暇出来た頃には杖がある

末席の意見も生きるいい職場
叱られた子が口笛をそつと吹く
紅生姜姑より嫁へつづく色

大阪市 板東 倫子

相殺にしようこじれた愛と憎
ちよつと良い話がうれしい地方版
ウーロン茶で酔うてクダ巻く名演技
辻斬りのように若者の狂気の刃
母の母へそのまた母へもカーネーション
おばあちゃんが冠婚葬祭の生き字引

大阪市 奥村 五月

米寿でも先に聞いている非常口
風邪さえもすぐに取り込む貧乏症
気にかかる妻が答えぬなぞの夜
新入りと老人会に古希の人
手術して駄目でも回る請求書
地図なしで迷いはせぬが仏さん

大阪市 中澤 伽羅

片仮名の新種の花がいろいろと
やつとこさ一つ覚えて倍忘れ
用件がすみそれからの長電話
ムニエルより塩焼きがいい夫です
三つ目はこっそり食べて御座候
お楽にと言えば正座が楽と言う

堺市 齋藤 さくら

気のあかんとところが親に似てしまい
ちよつと間を置いたら腹が立って来た
頑張った九より一のミス問われ

座ってる顔ぶれ見たら気後れし
泣いてたらつかんだ福も逃げて行く

羅漢百態何れこの身も仲間入り

枚方市 海老池 洋

IT時代来ても矢つ張り通り抜け
人臭い夢でも見るかOTTOO五枚

陽の匂い欲しい洗濯乾燥機

人の都合でミニ化された花の鬱
ガーデニングわが家漢字の花ばかり

道で喋り門で喋って上がり込み

枚方市 森本 節子

七曲がり下の千本花は散り(言野山にて 4句)
のど越しのよい葛切りは中千本

上千本名残りの花に脚及ばず
お土産は葛に山栗柿の葉すし

山栗で季節はずれの栗ごはん
通販のシルクの帽子大き過ぎ

寝屋川市 江口 度

ジャガイモ咲いたかジョギングをはじめよう
梅と枇杷どちらが先に色づくか

松の新芽を口ウソク代り見て法事

馬のりになつても札束逃げていく
名優が座ると鏡かしこまる
縄とびをしたいと思う象の鼻

十時とは違うお客がくる三時

ケイタイの後ろ姿にご用心
寝屋川市 籠島 恵子

わたくしをダシに土産を買う夫

急いでるわたしに用事いう夫

長生きをしそうな弁当をつくる

生きていだけで波紋が出来ている

いきいきと感ずるお人米寿とか

叱ること忘れて国が荒れ狂う
寝屋川市 酒井 勇太郎

隣人の挨拶携帯聞きながら

愚痴一つ言わない妻がいとおしい

君二人いてくれこの世とあの世とに

丁寧な妻の口調に身が震え

寝屋川市 太田 とし子

口あけて狸寝してる鯛ひらめ

腰曲げて主張はまげぬ車えび

目を閉じて貝は因果を砂で吐く

味自慢飯面被っているアンコ

虫けらとなまこいじめに遭っている

火あぶりの刑を背負っているカツオ

八尾市 神原 まさと

散りざまは桜に負けぬチューリップ

好きな人嫌な男に惚れている

お婆ちゃんに席ゆずられて気落ちする

死ぬ方がましだと思ふ齒の痛み

淋しいねえ剛治の声の無い句会 (剛治さん急逝)

やったぞと聞こえた死後の入選句

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

目を伏せた事がわたしの意思表示

覚えてる唯それだけの片想い

匂わないおんなになつて落着けり

口伝の噂の本に有り付けず

デコボンと言う名でこのあるみかん

くすぐったように笑わされてしまふ

藤井寺市 中島 志洋

揉めている話風鈴和らげる

仕事より遊び上手な三代目

八起き目にやつと光が見えてくる

枯れた芸かなり遊んだ人らしい

惜敗の汗と涙に明日がある

初恋は花火のように燃えて消え

羽曳野市 三好 専平

こぼこの道にころんではかりいる

定年になつて毎日髭を剃り

ほどほどにだまされ生きてきた

如意棒のようなカードを持つている
重大な捜査自殺で打ち切られ
名水の流れる川に放つ鮎

羽曳野市 西村 りつえ

ハングリーにだんだん遠く食べ残し

切り札を次次見せるにくい指

にこにこの裏にうごめく不発弾

切れそうな細い絆にする添え木

暇あればやがてやがてと爪を研ぎ

カード嫌いウインドーの夏愛でている

羽曳野市 徳山 みつこ

簡略字解いて上海街めぐり

朝霧のゆつくり動く水墨画 (桂林)

江南のビルの足場は竹の束

何事もなかつたように天安門

中華満腹アヒルラクダも口にいれ

寝るだけで惜しいうらめし五ツ星

羽曳野市 吉川 寿美

写経百巻悟りに遠い筆運ぶ

口裏をあわすはなしをして別れ

もう一度翔ぶ気のネジを巻き直す

良妻の演技少々くたびれる

母と妻終えて開いたコンパクト

落ち込めば風も他人の顔で吹く

羽曳野市 酒井一壺

信心の効きめはすぐに出てこない
信心へ見えないものが見えてくる
まごころでつなぎ通したなさぬ仲
メモにない物まで買って叱られる
見られては困るメモ帳置き忘れ
重い物ばかりをメモに買わせる

富田林市 藤田泰子

一汁一菜金が無くても生きられる
成仏をしたのか夢にも出て来ない
胸元がさびしい時は猫を抱く
自己紹介君に近づく第一歩
人の目を気にしていたら躓いた
Eメール秘かに恋が進んでる

箕面市 出口セツ子

思い出をふりかけにして食べている
熱演の今日の仮面を眠らせる
人生はほんのちよつとの差が続く
一言の重み寡黙になる日傘
陽の匂いする子が居ない塾通い
愛憎も悲哀も肥料にした笑顔

豊中市 安藤寿美子

師の叙勲弟子一同も鼻高し
老鷲も先生たたえ歌うなり
近松と相性がいい成駒屋

観客も「小春」気分が出る劇場

胃カメラのモニター腹は黒くなし
一汁一菜 胃袋きげんようしてる

茨木市 島元ふみ

娘との仲先生で親友で
親越して行く子にエール贈る父
繰り言は封じて外に出てみよう
新緑のベンチでたこやき絶品だ
闊歩するくりくり腰の脚線美
年寄りのお節介だと口づくむ

吹田市 山本希久子

昔のことこれからのこと大花火
夏の夢なかつたことにしよう恋
やさしさと残酷さ持つ歳月だ
主客転倒 影武者が前を行く
水辺には命はぐくむ音がある
時々テレビの位置を変えてみる

滋賀県 中宗明

なつかしい火の用心の夜回りだ
木刀の素振りて鍛う老剣士
霜柱立つ故郷の土を踏む
安いもの買い溜めしすぎもて余す
病床に春忍び来て窓開く
呼び出しの声高らかに新世紀

京都府 都 倉 求 芽
クローン術誰も拍手などしない

葛の葉の狐に虐待の世を恥じる
やれ落葉濡れてなくても手がかかる
ちよぼちよぼの女ばかりで仲がよい
休刊日折角巨人負けたのに

亀岡市 井 上 森 生

孫の名は爺が星座と風水で
新緑の亀岡祭りは明智さま
篠山の地酒に何と黒大豆

納得のゆかぬ一步はやり直す
よい風を呼ぶかベーターペンの髪

京都府 丹後屋 肇

両方の言い分を聞くほろにがさ
疲れ果て眠る子抱いて寝るベンチ
ライトアツプ春宵千金花の城
留学の子が乗る機影消え果てる
プライドを捨てたら運が向いて来た

京都府 稲 葉 冬 葉

ほちほちきたかいなと思う日々チヨンボ
今さら詫びてすむことでない四月馬鹿
冬眠の亀 春雷へ目を覚ます

わたしが洗って嫁が洗ってありがとう
校則が神経刺激して困る

大阪市 川 端 一 歩

実習の名札が声を張り上げる
豪快な妻 僕はやさしい字の違い
一日一善その反対もしてらる
そんなにも整理整頓してどこに
交通の仕事で最後車いす

大阪市 鈴 木 トヨ子

スリッパの胸が今にも零れそう
袴足のきれいな内に花咲かす
シルバーが三人寄ると福祉論
旅みやげやりとり嬉しお裾分け
野の花に生きるパワーをもろてくる

大阪市 榎 本 日 出

燃えるものまだ少しあり惚けられず
宇宙から招待状が来るまでは
カタカナ語 脳につめ込み出てこない
塩分に油断していると付けがくる
カレンダーに追っかけられて元氣出す

大阪市 前 たもつ

匂わない花屋の百合の気にかかり
潔白が晴れても元に戻れない
六十回忌 母の匂いはまだ恋し
ホームレス カバン大事に持ち歩き
一日ずつ鏡に老いた顔を見せ

孝行と耳を貸してゐる老母の愚痴
お誘いにマナーモードをオフにする
空席に美人を期待する隣
ケイタイを老母に持たせて看視する
剃り残し七人の敵 油断させ

大阪市 鶴田 遠野

ミコシギヤル 天神祭盛上げる
この人と思つた人に裏切られ
父座る座布団猫が昼寝する
素顔では気絶しそうな女将にて
内閣が替り九条ゆれ動く

大阪市 清水 利武

宮中に薫風かおる師の叙勲
あれこれと身体によいと食べすぎる
新しい靴さつそうといかぬもの
似ていても似ていなくても私の子
七回忌 盛大すぎて恐縮し

大阪市 古今堂 蕉子

枝張つた木にかばわれて夏を越そ
小泉国会生きる希望をくれそうだ
宇宙は楽し第一号の社長さん
日本の技お見せする大リーグ
躰けば媚びずゆつくり起き上がる

大阪市 渡部 さと美

お上りさんになつて道訊くのも楽し
妻銀座ボク駒形のどじょう鍋
お多福と招き猫いる隅で飲む
欲得を捨ててにんげん務まるか
しがらみを引きずり回し生きている

大阪市 杉澤 汀

パツパと捨てぬうちの小さなゴミ袋
あちこち痛い怠ける体もて余し
停電に手も足も出ぬ文化都市
発展途上の頃の日本今恋し
助けてえ傘寿過ぎてもお母ちゃん

大阪市 本間 満津子

手の内をうっかり明かすいいお酒
冗談へ気兼ねはいらぬいい仲間
車座になると気心通じあう
空咳に気付き話題を変えていく
正直な鏡時にはうとましい

大阪市 小林 周信

新鮮なねぎ椎茸も輸入品
百円で新鮮鯛の買える国
今年もまた桜トンネルぐる幸
結局はプラスマイナス ゼロの世よ
贈る母くれる娘も亡きカーネーション

大阪市 中田 あい子

大阪市 津村 志華子

紫外線すてきな女のサングラス
ふるりの葉ぶき好きな軒すずめ
バブル期の羽振りが消えた薄い背な
休みたいと思う日もあるおさんどん
銀行で他人の札東みて帰り

大阪市 川原 章久

罪もない馬に重役の金の欲
決められた方へ流れぬ水もある
何かある人の噂の若造り
覗いたらおたまじゃくしが春の川
七色のシルクが出来る繭が出来

大阪市 寺井 東雲

抱いた子にマイク向けると泣き出した
迂り込み足に高額保険掛け
浜風も平気で飛ばすホームラン
あだ名にはけっこう多い豚や馬
黄砂は日本何の用かはわからない

大阪市 井上 白峰

謙遜の陰で自信の血が燃える
善人の仮面がずれる酒の席
技巧派の女が投げる誘い球
輪の中で温められた多数決
カラオケになると主役が入れ代わる

大阪市 玉置 英子

やきいもに代わり売り声わらび餅
毎日の体操にヨガ少し足し
見送ってシマッタ今のは福の神
願いごと忘れてました流れ星
極楽と知らずに通り抜けてきた

大阪市 清水 絹子

あんたいく私も行くと同窓会
急ぐのに待ったをかける落し物
高いけど葡萄の走り仏様
三猿の掟も乱れ主婦仲間
母の忌よ重ねる老いになお恋し

大阪市 川久保 睦子

ライバルが居るから炎える句が書ける
出る杭を見守る余裕の風温い
あの頃はたしかにあった宝島
約束を忘れる小指に罪の数
汚染化が進む子等には空がない

大阪市 松尾 柳右子

好きな事していると歯痛治つてる
お見舞いに行つて幸せ噛みしめる
病人に気をつけてねと励まされ
つけ終えて孫に口紅ほめられる
安売りの目薬二つ買って来る

大阪市 町田 達子

まだ足に自信 荒神さんの坂上る(清荒神)

五月の空 悠悠自適の鯉たちよ

紫陽花が出番待つてる宇治の寺

毎年を世界平和の鐘を撞き

森羅万象 風に仏の声を聞く

大阪市 辻川 慶子

陽も風も星も輝く早や立夏

スタートへフラッシュ浴びる美しさ

花選ぶ蝶にも花の好き嫌い

土の道歩くと足が軽くなる

初恋を問われて思うなつかしさ

大阪市 榎本 舞夢

ご馳走がいろいろあつて迷ひ箸

歳取ると場所を選ばず座り込む

情報があり過ぎ困る御買物

叩かれる度に女は強くなる

人の倍食べてスリムを保つてる

池田市 藤井 計光

止まり木でシャンがひっそり誰を待つ

騙し舟知らずに乗って流される

低金利 壺の出番が忙しい

定位置にあきらめムード虎ファン

上沼の法螺がストレス消してくれ

池田市 栗田 久子

わが願い七夕さまに問いかける

コンコンチキ天神様の夏になる

文化だと思ふ貴船の床料理

夕立が置きみやげしていった虹

大阪に根づきはじめてハリウッド

池田市 岡本 吉太郎

人生を少し判つてもう終点

人生を数字に替えて味気なし

無神論者老いて手合わせ祈つてる

狙つてたとおりに運びふと笑みが

八十路来てストレス溜めず日々楽し

和泉市 西岡 洛醉

心地よい初夏大空へはばたこう

漢薬に頼る余生の遅々進む

五月雨に老いの轍が痛み出す

小春日に一歩前進運を賭け

素うどんに大阪の味よく喋る

和泉市 中川 楓

また会おうサザンクロスに別れ告げ

Qちゃんの走つた街よアポリジニ

短足のままで外国人になり

コアラ抱きくすぐられてる母性愛

ヌーティストの浜 産声あげた姿なり

和泉市 岡井 やすお

どの国も身内可愛いのは同じ
黒い土気いま斬つておかねば禍根

政権はどんな政策よりも数
人見れば強盗と思えの時代
四番打者八人並ぶジャイアンツ

泉佐野市 山本 蛙城

新世紀 女外輪に街を行く

弾みすぎ官僚そつぽ向きそんな
プランター俺も花だと葱坊主
原稿を見ない分だけ支持高く
二歩三歩遅れて敵をやりすこす

茨木市 堀 良江

自転車に軽々彼女乗せて
世話好きは何でもすぐに引き受ける
マンションの並ぶ田舎の様がわり
この前はあの友がいた二度の旅
ナンバーワン子の世界にもある順位

茨木市 藤井 正雄

机つくえ椅子いすだけの夏休み
事故ゼロの裏に内緒が隠れてる
盆栽と朝な夕なに祖父会話
反省会敗因棚に飲むばかり
共稼ぎ連絡メモでする喧嘩

河内長野市 井上 喜醉

情報がネットを走ると恐ろしい

うっかりと吹いたラッパで怪我をする

病魔とは戦い慣れて手なずける

金出せば裏もあります楽な道

お寺さん寄付してくれた老人会

河内長野市 植村 喜代

ヨーグルトの蓋ぐらいにも力入り

孫二歳明日があるさと唄い出す

面倒なことやめて気楽に生きないか

連休が何日あつても他所のこと

ハードルを越えたらイライラしなくなる

河内長野市 加島 由一

子を庇うかたちで泳ぐ鯉のほり

数字には出ないあなたのいいところ

父さんのギャグにパンチが効いてない

メモどおり胡瓜もみありビールあり

とりあえず子供つくれと言う祝辞

岸和田市 高須賀 金太

退院を指折り数え待つベッド

酒を飲む習慣止めるのはつらい

六十五歳 酒も煙草も止めました

名人の眼はやさしさを待っている

いきなりの暑さへ着る服に惑う

岸和田市 井伊東吉

岸和田市 池田寿美子

政界に新緑かすか芽吹き出す
さながらに託児所だったGW

筍を貰い佃煮瓶増える

耐乏の麦飯今や健康食

食博の試食巡って昼済ます

岸和田市 原 さよ子

あいまいな自分自身を叱ってる

ばあちゃんのノートに見つけた古い恋

大正生れパンのみみまで大事に食べ

カルチャーで仕入れた知恵でよく喋る

口添えの重みを知った面接日

岸和田市 宮野みつ江

ITに私の世間広くなる

淋しがり大勢いますEメール

独り身と知ってか誘いEメール

お浄土のメールアドレス知りたくて

外出を察した猫のよそよそし

岸和田市 藪野けい子

父さんの不機嫌に酒添えるふみ

手入れるする菖蒲の花出番待つ

常連が粉と水聞くお好み焼

病状をそれとなく聞くガン病棟

立ち話途切れたところ急ぎ帰る

雨の日も何故か楽しいアンブレラ

大声で話す顔には正直者

サクラエビ富士をバックに干し上がる

ゆっくりと言いたい聞かせては日を送る

お別れ会 真つ赤なバラを咲かせたい

賽銭はかしわ手だけの神頼み

酒飲んで税金払う国のため

今年から川柳もある通り抜け

うしろから付かず離れずハイヒール

箸使い下手な娘で未だ独り

交野市 山川日出子

二千一年初宇宙旅大富豪

孫連休 竹の子掘りと母狩り

青春のひととき戻るクラス会

ストールで二の腕かくす六十路旅

南極の鯨大きなバレリーナ

堺市 神原文

恋したかプライベートを聞きたがる

コーヒーを零してからのお近付き

隠しごとあるのか声のテンポ上げ

手のうちを先に明かして油断させ

何にしよう迷った揚句焼酎に

堺市村上玄也

正論を吐いて感じる孤独感

正論を曲げて陥る自己嫌悪

退いたネット裏から指示が飛び

花も実も落ちて身軽な定年後

丁寧な言葉に伏せてあつた刺

堺市志田千代

餃子パクパク ドラキュラはもう大丈夫

線香の匂うお菓子でお茶にする

オベをする月光仮面のオジサン

病院のにおいのしみたお年寄り

別嬪と魅力あるひととは違う

堺市桑原道夫

父として真剣に吹くシャボン玉

坂のある町で子供がよく走る

水たまり深沈と見て跨ぎ越す

鯉が水打ったそろそろ帰ろかな

忘れ物してきたような旅終る

堺市宮本かりん

犬同士の交流もある散歩道

ごろごろ道石の主張に耳を貸す

先人の苦勞した道闊歩する

茶髪の子にどうぞと席をゆずられる

おいしいなまだまだ生きる証かな

堺市黒田真砂

老いてなお明日へ紡ぐ絹の糸

連休も外出かなわぬ花衣

絵を画いている時無心花しようぶ

闘病に新たな意欲薔薇匂う

闘病にふと挫折感 牡丹散る

堺市山本半銭

れんげ原つがいの蝶の白昼夢

母の日のTシャツ毎年派手になる

伎芸天へお願いしてるカラオケ熱

寝ておれとたこ焼買うて来てくれた

占いに耳かしている気の弱り

堺市和田つづや

哀しみは癒えたと思うカレーの香

有難いことに時間で腹が減る

僕なりの味で生涯太郎冠者

平凡に慣れて平和に気付かない

一病息災と笑うほど楽でない

堺市柿花紀美女

巢立ちした子ら激流の中にいる

家族の和 精いっぱい生きている

健康を武器に耐えてる不況風

切り札の白旗 妻は隠し持つ

万国旗皆仲よく風に揺れ

四条畷市 吉岡 修

時々是小言を食つて生きている
看板を変えてもピンチ変わらない
ラーメンをすすする手順はきめている
病院へ持てる体力もつて行く
猫防ぐ万策つきて猫の勝ち

吹田市 石原 靖巳

美化された話を聞くと寒くなる
コピーした文字に涙の跡がない
自分史が続く表紙はまだ無題
口裏を合わせてからの胃の痛み
一步引くことを覚えてから気楽

吹田市 穴吹 尚士

こっそりと母は子の名で貯金する
前借りの棒引き妻に願ひ出る
責任が軽くて安い二度の職
人間味あふれた口に騙される
車座にやっぱり序列ありました

吹田市 大谷 篤子

意地をはり階段一つ踏みはずす
感激は人の倍ほどする私
勘違いしてたと言えばすむことを
ラッピングはずして風邪をひきました
未来図はいらぬただただ生きるだけ

吹田市 瀬戸 まさよ

宇宙旅行大願成就大富豪
CDも自作夫婦のデュエットで
つい着物買わされ何処へ着て行こう
板前の包丁捌きこれも芸
北摂の山脈こころ癒される

大東市 児玉 蛙

死んでもいい毒でも美味い煙草吸う
独り居の部屋の広さに落ちつかず
無駄足もいつか役立つ回り道
夫婦でも喜怒哀楽の芝居して
携帯で愛してるとかけまくり

高石市 浅野 房子

シャボン玉消えた両親逝ってから
可愛いが所詮はよその犬である
本当はジョークでなくて野次だった
頼りには出来ぬあなたは風来坊
お喋りの相手に疲れ群を出る

高槻市 傍島 克治

百点に道草せずに見が戻る
亀石と言われて見ればそれらしく
留守電に言訳いれて済ましとく
土産屋の俄かガイドに裏が見え
九連休どころか俺は毎日日曜日

高槻市 江原秀夫

つかの間の紅をいのちのさつき咲く

今日もまた無口で酒を冷や奴

ゆきずりの思いは遥か梅雨しとど

赤い糸どんどん太くなる余生

仕来たりにとつぷり浸り生き延びる

高槻市 井上照子

食べ物を分け合いトンボ追いかけた

竹馬の友語らん顔を花に埋め

若葉マーク乗つてと孫の笑顔来る

母の日にかあさん小さな声で呼ぶ

国会の舌噛む質疑 四字熟語

豊中市 湯浅馬洗

人間に笑い増やそう新世紀

遠来の燕に聞く切障子

菜園で虫と分け食う夏野菜

学校と家庭娯が宙に浮く

ヘルパー来て妻のストレスみんな捨て

豊中市 江見見清

流行つてる訳を訊いてもわからない

衣替え律儀に守る大会社

ちよつとだけ心配もある良い知らせ

夏が来たパンツひとつの我が天下

坂道は今日の元気の測定器

豊中市 吉田あずき

説法も冴えて多彩な花の寺

チューリップ愛をこぼさぬように咲く

筍に貰うやさしい体温を

国会の華やぎ何か生まれそう

USJで見つけた工場のレール跡

富田林市 片岡智恵子

妥協するばかり自分を見失う

昨日今日たがい枯れてきた夫婦

幾年月 水俣の海裁かれる

出直しの座禪に髪は束ねられ

白い歯を見せ若もののプロポーズ

富田林市 中井アキ

時々泣き顔になるコンバクト

情熱のリズム忘れたローヒール

ポケットにニトロコを入れて逢いにゆく

ままチャリで輝いていたPTA

新庄の汗を応援するコップ

富田林市 大橋鐘造

もう一度風に逢いたい樹を揺する

人形になつて四角い家に住む

千羽目の鶴が願いを聞いてくれ

あの日から止つたままの花時計

影武者に疲れた 鎧干してある

人間の力及ばぬ運不運

寝屋川市 坂上高栄

試歩一步春風心浮き立たす

端座して読めぬ掛軸にらめつけ

父母の顔だぶらせる羅漢さま

喜怒哀楽 辿り着いたは寝て一晝

寝屋川市 平松かすみ

折角のご好意だから美人の湯

六十路来て小指の思い出などが消え

お座布団敷いているのは広辞苑

しっかりと聞いてしっかりと物忘れ

兄上がよろこぶだろう株動く

寝屋川市 柴田英壬子

お風呂場にうれしい要支援受ける

固定カラーはずすと家事がつらくなる

すっかりよくなりましたとはなかなか

電話の声は明るくて元気とか

大好きな季節 豌豆まめごはん

寝屋川市 堀江光子

風薫る昼の会食豆ごはん

歓声も運ぶ園児のレジャーバス

病床へ倍の好意を返される

子育てに母という名の逞しさ

佇めば薫風渡る大伽藍

思慮分別なくした事件多すぎる

叱責に反抗部屋に引きこもり

目の位置を下げてゆっくり聞く話

身を粉にしての働き死語となる

山笑う古里に母まだ元気

寝屋川市 妻谷重三

別に干す夫が借りた女傘

縁あつてまつりの金魚わが書齋

約束にルーズな人の遺言書

連休明けゴミの出る家出ない家

苦勞ばなし昨日と一つ違うとこ

寝屋川市 高田博泉

つついても踊ってこない片想い

ホームレス避けて公園掃除する

十五夜に口マンに耽る母が居る

渋滞へ貧乏ゆすりしが止まらない

初免許 高速すいすいとは行かず

寝屋川市 北岡波留吉

ほのぼのした人情が待つ都落ち

名山を借景にして家を建て

喝采して息子の彼女迎えよう

山頂が一際映える御来光

思ったほど仕事出来ない天下り

寝屋川市 岸 野 あやめ

地下街が増え少年の荒れやまぬ

霞草なりに上手に年齢をとり

隅っこに座り忍者の真似をする

趣味の会 服は良すぎずわるすぎず

両の手を合わせおむつをして貰い

寝屋川市 森 茜

算数をおぼつかなくも教えられ

端正な顔に似合わぬ字が楽し

友だちを裏切り川蟹と遊ぶ

余計なこと言つてしまった喉腫れる

ハムスターに旬の葉つ葉を千切つてやる

羽曳野市 川 口 信 子

ゼロよりも始末が悪い低金利

老人にカタカナ文字が多すぎる

肥つてもやせてもだめと無理なこと

お金では買えないものを得る仲間

みぞおちに初恋深く沈ませる

野放図に生きれば消えた肩の凝り

不発弾抱えて妻の無口なり

ひとりごと言うて淋しさ尚つる

飢えた日の記憶はびこる芋のつる

母キトク信号無視で走りたい

羽曳野市 安芸田 泰 子

東大阪市 指 宿 千枝子

春よ春 列島花のシンフォニー

大根よ土に育つてその白さ

元気かね母の日に老母から電話

目を閉じて青葉吹く風たしかめる

風薫る日にも事件は起きている

東大阪市 谷 口 義

倦き性は宗教にまで及んでる

事務的にしていただいた骨拾い

平均寿命何の参考にもならず

反省会一人で開く午後十時

丁度良い具合の呆け方もあった

東大阪市 安 永 春

河内音頭すぐに手もでる足も出る

ひと時を抒情歌楽しコンサート

デュエットに振りまで付けて楽しそう

決めること出来ない寿命持ち合わせ

最終日大声出して宝くじ

玄関に匂う主人のお人柄

子守り歌まだ聞きにゆく墓参り

孫と読む童話大人が面白い

野暮天と言われつつけて六十五

同郷の友と出会うとなまりだす

枚方市 安 達 忠 央

枚方市 宮川 珠 笑

ひと駅を乗って歩こう会に行く

ありがとう胃に飛び込んでいく食事

墓石まで都会へ移る過疎地帯

呼び捨てに返事が弾む妻がいる

快食快便それでも胃薬放さない

枚方市 鈴木 政子

厳冬に耐えた三色芝クラ

お客様は神様の歌手が仏様

真紀子さん英語堪能に期待する

ビルで見えず 屋根より高い鯉のぼり

ホキヨキヨがホーホケキヨになる二時間(初鳴き)

枚方市 寺川 弘一

死にたくないと言うわがままが通らない

天才の努力を聞いて納得す

誉められぬ話はみんな聞きたがる

コーヒーで聞く人生の一大事

魚から見れば釣り人悪い奴

藤井寺市 太田 扶美代

情熱を込める最後の一步まで

拾たらアカン一度は捨てた恋やから

宝石にまさる絆を持っている

立ち直るために会わねばならぬ人

ネズミより小さいわたしの肝ツ玉

藤井寺市 楠 昭子

負けの中にも明日の材料きつとある

強がり口先の父憎めない

人間らしい道踏みしめて踏みしめて

どこまでも私の欲が追いかける

青空を掃く竹林が伸びに伸び

藤井寺市 高田 美代子

緊張をしたのも混じるゲスト席

会ったことない人に折る千羽鶴

鼻ぐすり効いたか妙に愛想よし

言い訳は嫌いベンチャラなお嫌い

阿呆やなあとつくづく思う時がある

箕面市 椎江 清芳

エプロンは母の涙も汗も拭き

赤信号大人が渡る子供の日

税務署で普段の舌が回らない

立ち読みをして当面の知恵を借り

休肝日忘れて潜る縄のれん

松原市 小池 しげお

ダイエットして居なかつたかしわ餅

叱られた通りのことをやっている

首切りの話は五時を越えてから

無視されて切れなくなっているナイフ

きっかけが欲しくて歩道橋渡る

守口市 結城君子

何ごとも変わる四月メーデーも
口蹄疫の話になってフォーク置く
スーパの早蕨やつぱり買うておこ
変色の海苔を見ている胸のいたみ
早や立夏 春は素通りしていった

八尾市 宮西弥生

ポーズなどどうでも光と風の中
作業衣の汗 極楽の木に眠る
ピンボケの写真忘れる頃届く
花の香の中でぜいたくものおもい
ときどきは銭湯出合いの二つ三つ

八尾市 内海幸生

葉忌や温顔偲ぶ顔ばかり
呑むほどにカロリー表は露と消え
平成の武士のモラルを問う地雷
五人は五百人は百ある主張
よう食べて呑んでギックリ腰でんねん

八尾市 井尻民

小走りで待ってる鉢に水をやる
手放した株価見ているあほらしさ
宿の湯はいつもゆったり客を待ち
寝たきりの父は少ない遺産わび
婆様に座ったままで指図され

八尾市 高杉千歩

後十年住ませて欲しい家補強
身ひとつの置き場にものが多すぎる
勿体ない惜しいで窮屈に暮らし
夫にはまだ近づけぬ欲をもち
一喜一憂 生きてる証とも思い

八尾市 高橋夕花

ベン執れば居眠りばかり春の闇
腕時計替えて五月の陽にさらす
毒すこし抱いて女は生きやすし
正座すると袱紗さばきをしたくなる
慕情ひとすじ女の夢は美しい

八尾市 吉村一風

ほめてから妻うまいこと文句言う
大人の日どうして無いの孫がさく
妻のへそくり知ってるけれど触らない
父に似た反骨ときに邪魔をする
猫を相手にひとり酒くむ春の雨

八尾市 生嶋ますみ

都会派の烏にたまる皮下脂肪
長生きもくたびれるよと母の声
あやまれず黙って妻の布団敷く
通いあう親指族のEメール
帰ってもだあれも居ないワンルーム

八尾市 宮崎 シマ子

神戸市 池田 善守

甘口の酒なら女も輪に入る
嫌な世だだ蛤輪そろそろ動き出す

一步でも早く襷を渡すまで

問えばまた忘れたと言う夫の嘘

安請けあいしたが妻から金が出ぬ

八尾市 長谷川 春蘭

五子八孫 祖父の卒寿をどう思う

功労賞たんとあげたい母の皺

長生きの濁世またよし母の日も

遮断機の上がるを待つも春の顔

旬の味 筍本性みんな出し

大阪府 靱山 隆盛

路郎先生へなみなみと注ぐ菊の杯(名譽主幹の叙勳)

菜園の汗が落とした血糖値

黒い金蓋をかぶせて幕にする

会費にはベットポトルのお茶がつく

助手席に眠気覚ましを座らせる

神戸市 山口 美穂

お世辞なのになぜかにんやりしてしまう

糠漬けをかきまわした手のお裾分け

やさしい嘘がわたしの涙誘い出す

腰痛症 老母のせいにはしたくない

満ち足りて疲れて美術館へ出る

倅せの端でも感謝ただ感謝

いつ来ても本日限りと出てる店

あああれが倅せだったと気付く冬

寄席に行き笑わぬ妻に気を遣う

妻のストレス持ち込む先はみな私

芦屋市 黒田 能子

心配を聞いてもらって軽くなる

花ことば知らぬが父はバラが好き

来し方思う互いの白髪つくづく

ダイオキシンの臭いもない恐さ

たこ焼の匂い隣の座席から

相生市 中塚 礎石

特攻の命大事に喜寿迎え

野仏と指切りをする散歩道

老い二人手垢がにじむ文庫本

プランコで夕焼け小焼け子に返る

一つずつ余生の荷物途中下車

尼崎市 長浜 澄子

今頃はもうしてるのかタマゴツチ

謙遜も過ぎると強い意思表示

接点のない日のんびりノーマイク

福耳の功罪気ながに待っている

一日の吐息を流すカブチーノ

尼崎市 田 辺 鹿 太

拗ねる日もあるから山が好きなのだ
時々呆けてみるのも処世術
鉄塔の頑固が風を唸らせる
身を焦がす蛍の恋は本物だ
あの世にもカレライスは有るやろか

尼崎市 松 下 比 志

いつものように頭整え家を出る
片道切符だから大事な人生だ
切られると解っていないが爪は伸び
雑草が気儘に萌えて土手青し
花束のように幸せそつと抱く

尼崎市 的 場 十 四 郎

一言の甘さで燃えた日の若さ
鍵穴の向こうを知ってから狂い
無理矢理にひらいて見たい福袋
春の嘘ずばり見抜いた妻の勘
花散ってさつきひろがる天の青

尼崎市 内 田 美 也 子

六十路入り蝶よ花よとよく遊び
返り咲く友情寄せて遍路旅
旧友の笑顔に旅が盛りあがり
亡夫七年未だ夢みる夫婦旅
姑らしいことせず貰うカーネーション

伊丹市 小 熊 江 美

あの人があぐれた火種が燃えてくる
憂き事も明日があると気を晴らす
野良猫が好きな物だけ食べてゆく
亡母の服びつたり似合う歳になり
寒暖の差にうっかりと風邪を引く

伊丹市 樫 谷 郁 子

門前で今日の匂いを消している
初孫の一步に温い目を集め
自画像に幾度も直し入れて居る
老いらくの恋の残像昼の月
そつと抱く昭和の恋は秘めたまま

伊丹市 山 崎 君 子

小さい駅覚えていたかつばめ来る
明日開くボタンのつばみ傘さして
コアジサイ踊って雨は降りつづく
ウグイスと山鳩啼いて今日立夏
新茶祭友のお点前ほればれと

川西市 松 本 た だ し

正論がすぐ横道へ逸れていく
ちから水与えてもろた恩がある
カネ貯める楽しみよりも生かす知恵
古い事話せば孫は散ってゆく
表には出ないが生きる塩加減

川西市 米原雪子

悲しみも日にち葉という効果
偶然に興味が同じで弾む席
移り住む冒険もして友が出来
深呼吸心の扉開けたくて
雑踏で道順問える人を選び

西宮市 亀岡哲子

寒暖のやがて帳尻合うて初夏
チンチン電車母校の娘らと揺られゆく
無菌の箱で育つひ弱なボクの芽だ
平均寿命幼く逝った姉思う
渋滞の高速茜見てあきず

西宮市 牧 渕 富喜子

出て来ない名前一日つきまとい
チューリップ マスクの人は花粉症
土作りする間に花は先をゆく
店さきの母がみんなこちら向く
水切れの花待っている旅づかれ

西宮市 井上松煙

新緑の生気あふれる庭仕事
蝶になり訪ねてみたい花の芯
釘煮たきあちこち借りを返す妻
サロンパス臭い気にせぬ老人会
上席に座ると似合う顔になり

西宮市 奥田みつ子

病窓に地の果て思ふ風の音
病人食 祈る瞳と拒む口
寄りそうた命に部屋は白すぎる
信じればこそその命よ愛もまた
足さずする共に歩いてきた足だ

姫路市 古川奮水

永平寺観光回向も幸せか
生垣の新芽蛹も選って食う
子を出す日 母の言葉は氣つけてな
馬の目も輝いている天皇賞
LPの音柔らかい夕食後

三田市 北野哲男

ゆったりと泳いでいるが生簀です
急流に生きているから前を向く
手を振って角を曲がってから涙
いけそうな顔してはると注ぎに来る
一億もたまって番犬だけと住み

兵庫県 大谷幸次郎

もめごとと言つても花の下の事
統合と言つて学校消えてゆく
雲一つ探しあぐねる初夏の空
生かされた日々が昔になってゆく
うかうかと六日の菖蒲臍をかむ

奈良市 天正千梢

波紋がほしくて一石を投じ
消えてゆくものの美学を追いまわし
わびすけの咲きそろいたるにじり口
つわぶきにむかえられしよお茶の席
藪椿 水琴窟に耳すまし

奈良市 米田恭昌

ユニークな顔名刺代りにする男
単身赴任いつか夫婦により戻る
ジベタリアン十七歳の無表情
輝いた日もあつたらう父の靴
川沼の散歩タバコが旨すぎる

橿原市 居谷真理子

大人の恋ほどよいとこで帰される
足腰が弱り命が重くなる
化粧してまずは自分を騙す笑み
ステテコの嗚呼恋人のなれの果て
電話機は逢いたいと言うためにある

大和郡山市 坊農柳弘

復興の灯 嬉しい風見鶏
七夕の空が恋しい天の川
下馬評は当確だったと泣くだるま
踏み出せぬ一步に自我の四面楚歌
テッペンに立つと奢りが顔を出す

和歌山市 桜井千秀

善女でもないが悪女じゃないつもり
薄皮で覆った傷がまだ疼く
品種改良先ず手始めに自分から
さわやかな目覚めに梅雨も心地よい
夕焼けが真つ赤ためらい吹っ切ろう

和歌山市 福本英子

自分史に効かせすぎます調味料
楽しみの幅が狭まるサロンパス
余命表と照らす入れ歯の自己負担
眼球は自由自在に歯科の椅子
静けさが戻る我が家と花の園

和歌山市 福井桂香

新鮮なことばに出合う新刊書
花びらで占つてみる夕明り
追い風に吹かれ戦の爪かくす
スイッチオン今日も誰かが殺される
雑草のみどりでもよしビル谷間

和歌山市 松原寿子

日々の役割はたす女の重い坂
見詰め合い心の声を確かめる
減量をして鮮やかな蝶になる
抑え切れず胸から溢れ出る想い
きっぱりと過去きり捨てて蓋をする

和歌山市 山口 三千子
忍耐に疲れて阿修羅しのび寄る
一枚のハガキに心乱される

未来図もいつしか彩が褪せている
踏み外す段差潮時かもしれぬ
母の掌に巢立つた子らの愛がある

和歌山市 玉置 当代

しぶちんの美学貴くことにあり
バージンロード娘と歩調合いかねる
腕を組む父の鼓動が乱れてる
女系家族ときどき夫権試される
憶測で生まれた話 宙を飛ぶ

海南市 谷口 義男

軽やかに老いの日課は朝歩き
負の遺産 宝に変えた良識派
代弁を買って出て居る投書欄
頑固な顔ずらり揃った同期会
自慢話聞かして貰うタダの酒

鳥取市 富山 檳榔樹

すばらしい生き甲斐の華 今日も咲く
箱庭の中から夢をふくらます
紫陽花は梅雨に叩かれ懺悔する
座禅して貪欲の皮無と変える
睡蓮は黄泉路の休む良い御座所

鳥取市 山本 益子
生きるため散らす火花は前向きに
老境のひと味優るアドバイス
わたくしのあだ名花から頂いた
日本の文化遺産は木の魅力
目立つ人リコール風は避けられぬ

鳥取市 杉本 孝男

生まれても必ず死ぬというルー
満願へ今日も途切れぬ遍路笠
百歳までも生きる地酒を酌むほこり
移り気の暮しに足も地に着かぬ
金持つと他人行儀がうまくなる

鳥取市 美田 旋風

度忘れを思い出してはまた忘れ
幸せの色も節目にまた変わる
春に聞くどんな音にも気が弾む
独りだけ残る日妻と語り合う
アルバムは生きた証の玉手箱

鳥取市 田賀 八千代

満開の春に道草したくなる
温かい城で草木もよく太る
春に酔いハート誤作動して困る
すつきりと仮面を脱げば跳べそうだ
悪女にはなりきれなくて草を抜く

鳥取市 福田登美

生きてゐるその裏側は見せられぬ

やわらかい言葉で隠す嫉妬心

赤信号 善人ばかりの群れに見え

乗り捨てた自転車心壊れてる

淋しい夜お月さまさえ通り過ぎ

鳥取市 西村黙光

ペン先へ夢を託して喜寿燃える

夢の中独り芝居の主役する

いたずらな夢へ血圧乱高下

夢買いに時々通う縄ノレン

夢だとしてハート燃えたりしほんだり

鳥取市 武田帆雀

火の消えたタバコくわえて菊を挿す

絵手紙の桃が食み出しておいしそう

乗馬服はかせてみたい脚線美

釣り糸を垂れて戦火を交えない

鼻紙をポイツと投げてストライク

鳥取市 岸本孝子

連休で痩せた財布の修理する

欲しかった庭が重荷になってきた

耐えたのは五分五分だった共白髪

義理で飲む酒は薬の味がする

悲しいな人の不幸で幸を知る

鳥取市 岸本宏章

先生に気付いてほしいじめの芽

言い訳が苦手な人と手をつなぐ

平和な世だから歌える海征かば

紫外線もたっぷりくれる五月晴れ

ゆとりある授業へ塾が混んでくる

鳥取市 夏目健一

温もりのある家探し燕くる

ほどほどに吠える引き際知っている

変人の方がどうやら持てそうだと

惜しみなく聞くこころに負けを知る

時々はかくれんぼうをして癒す

鳥取市 岩原喬水

勘定になるととぼける癖がある

俺の脳叩くと智恵が湧いてくる

電話線切ってやりたい長電話

ホテルまでたしかめているスパイの眼

老骨が春の名残を追っている

倉吉市 野口節子

山路行く二度の桜を愛でながら

人情をたっぷり盛った里の宿

カレンダーめくる早さが加速され

ウインドーの影が若さを否定する

靡くかに見せてどっこい肩すかし

倉吉市 淡路 ゆり子

目業を朝昼晩と生ませじめに

老人の話つつぬけ日向ぼこ

手作りの服に凝ってるリサイクル

仏壇へわたしの作る四季の花

時どきはテレビの音が気に障る

倉吉市 山本 玲子

鶯は朗々として谷渡り

五月晴れ放浪癖が歓喜する

緑蔭に寝そべって読む週刊誌

どう見てもややこしいのは蚯蚓の頭

空腹を満たしてくれた試食品

倉吉市 山中 康子

無邪気さと挨拶うまい小学生

ごみ袋大きなかおで出している

体調がころころ浮気しています

ふところにあどけなかつた子の笑顔

干渉と嫉がこんがらがっている

倉吉市 猪川 由美子

古いジワリ中味で勝負しかないな

格好の川柳ネタを総理くれ

生きたいから死にたいなどと口走る

子煩悩が浮気するのは腑に落ちぬ

褒めおだてヤル気だんだん目覚めさす

米子市 田中 亜弥

今日の一步は心に刻む事ばかり

怪談の好きな柳が町にある

リーダーの顔でないから辞退する

一歩ずつ進んで病から離れ

泣き上手笑い上手で生きている

米子市 中村 金祥

嫁ぐ娘へかしわ手を打ち幸祈る

ポイ捨ての川へ自慢がひとつ減り

老夫婦 時に残り火つついてる

骨抜きにされて仮面が外せない

青谷上寺地 過去をすっかり塗りかえる

米子市 門脇 晶子

さまざまな風をうけつつ坂の上

雷親父の破れ太鼓がきこえない

昔から人を恋うのか雷神よ

牛の胃が良薬になる私の胃

頭の中のドアを開けばぬける風

米子市 白根 ふみ

だんだんと視線しびれてくるぼたん

こうなればいずれが女王でもよろし

大人同士が誘うぼたんを見てわかれ

石投げる わたしいますよ水中花

とりあえず磔を投げて風を見る

地図にない橋を渡った仏達

悪玉のコントロールが難しい

ハミングの蛇口の水も四季の彩

葉をはさみ夢のつづきは棚の上

行きすぎた風から受けた平手打ち

米子市 鷺見 正子

悪党の匂いを付けてからもてる

風を食み強くなつてく鯉のほり

りんごの歌あるのに梨の歌がない

本当の夫を子らはまだ知らぬ

妻に似た孫には弱いお父ちゃん

米子市 本吉 宗光

人生譜そろそろ残り十ページ

四世代生きた男のカラオケ譜

一息の足りぬ私も唄仲間

千曲余揃えレッスンしています

消費税作った男支持下がる

米子市 青戸 田鶴

長すぎる連休肩がこつてくる

気候不順 五月のさつき寒そうな

顔の皺手の皺 過去をみな語り

不確かな時代足元鍛えよう

またあしたの友とはいいつも逢えそうで

雷鳴に話たたんで走り出す

お隣へ竹はちゃっかり遠慮せぬ

静か過ぎお風呂にそつと声を掛け

生きてゆく峠いくつも越えながら

ロボットの視線も避ける人不信

米子市 神庭 詩郎

紫陽花の反抗 梅雨に色変えず

簡単に許して悔いは残らぬか

雑草の自由を知らぬ水中花

天下りしたのが上に割つて入り

今日も無事一行だけの日記書く

鳥取県 国森 武子

おくやみ欄 知つてる人がまた逝つた

逝つた人の思い出たぐる春の午後

父母に感謝しながら死にたいな

小学の同窓会だ是非ゆこう

記憶力とんとうすれて老いを知り

鳥取県 黒田 くに子

合掌で募金しているお坊さん

遠い日の街道母が待つて居た

真つすぐに生きてく汗は惜しまない

軋む日もあつたと母の座りだこ

片思いうしろ姿を見てるだけ

米子市 澤田 千春

米子市 木村 春江

鳥取県 石尾 かつ乃
追いつくはすまい身に合う野良仕事
快復の兆し食事が口に合い

温泉へ行こうか指を折りながら
生きる幸ナースの笑顔から貰う
あらまあと見上げる孫と久しぶり

鳥取県 近藤 春恵

自己主張してハラハラと桜散る
医療ミスこわく入院など出来ぬ
四季巡り山は自然の七変化
そばにいるだけでほのほの心満ち
変化球今なら軽く受けてやる

鳥取県 吉田 孔美子

魚釣り蕨採り力いっぱい
連れてつて蕨の声だ此処よここ
灰汁抜きが下手で蕨に嗤われる
配り切れない蕨を競りに出荷する
うど蕨竹の子ワカメ青春だ

鳥取県 奥谷 彩子

同窓会女の鎧着けて行く
山菜をお膳に盛って春を食う
いい話袋に下げて病む老母に
ワルツやポルカ庭一杯に花の精
曼陀羅絵ほとけに貰う小宇宙

鳥取県 津村 八重子
先生の白衣に一寸きんちようし
私を守ってくれた子のベッド
死ぬまでやさしい心抱いていよ
仲よしのトンビよ今日でさようなら
退院を祝うメロンの味のよさ

鳥取県 田村 きみ子

支え合う友達のように豆の蔓
いまここで許せば負けになる頑固
美しい人に傾くボクの癖
ジャズ聞けばあの青春がそのままに
その先は言うまい母を泣かすから

鳥取県 橋本 多哥由

気取らないところが好きで人が寄り
白鳥も懸命日本あとにする
秀吉が死んで家康うれしがる
終章を考えながら遊んでる
指切りをとほけて見せる愛もある

鳥取県 埜 寛子

連休のパパ足枷に引きずられ
語り部にされるお歳になりました
老い二人耐えているのはどちらです
盛り過ぎ素ツ首並ぶチューリップ
孫二歳 大人の小型見る恐さ

鳥取県 西川 和子

虫も小鳥も私もキャベツ大好きで
生産者の見える野菜を食べている
お昼寝も晩酌もかかさな羅漢
年齢を越えて一步を踏む勇氣
金婚へ恋も空気になっている

鳥取県 上田 俊路

これもゲーム止めずにおこう痴話喧嘩
別れのワルツ踊りさらさら悔いはない
陽の映えるガラスさらさら鬱を消す
はらはらとさくらが誘う潔さ
また明日も風に押されて生きる喜寿

鳥取県 太田 幸枝

泥沼の中で羅漢の顔になる
宿膳に野菜も花も盛ってある
ひとときの友と昔の艶ばなし
ごめんなさいあなた好きよと言えないで
先が見えた禁煙解いてふかして

出雲市 小白金 房子

からし菜の明るさ戻る土手の風
露天風呂ほのかな湯気に身を包む
ふる里の小川も消えるブルの音
天職と思う竿うり初夏を行く
親しさが本音となって渦をまく

出雲市 岡 あきら

戻り寒暄の消えるまで耐える
風みどり計算ぬきの苗植える
筈をもらって硬いやわらかい
春うららグラウンドゴルフ球弾む
いい返事 郵便受けが待ち侘びる

出雲市 小玉 満江

パソコンに挑む八十歳の心意気
申告をすませば春が笑い出す
お風呂から上がれば眉が消えていた
無防備に笑いころげて悔い残す
親戚の識者は春にうとく居る

出雲市 佐藤 治代

貧乏な頃は団結していた絆
起き上がりこぼしのように起きられぬ
大声で叫んでみても夢の中
息してる証拠に欲が欲を生む
腹が立つ夫へ尻を向けて寝る

出雲市 吉岡 きみえ

友と言う大事な宝もっている
輝きがちがうあの星あなたでしょ
テーブルのどこに座ってもひとりぼち
わたくしに懺悔の道は果てしない
三界に家なし仰ぐ空遙か

出雲市 岸 桂子

ノックする答ひとつを用意して
打首の十字架背負うチューリップ
からっぽになれるわたしに部屋がある
靴下の穴の喜劇を見た正座
雑草のように育つて良く笑う

出雲市 青山 久子

うた歌うカナリヤ胸で飼っている
流れ雲あの日のはみんな嘘
野の花の微笑で治る軽いうつ
花柄のスカート巻いて風にのる
ゆうらりとまたうとうとと春の床

松江市 小川 注湖

成人式やはり修身必要だ
桜餅美人の肌の心地する
三代の女系に鯉が空祝う
玉のれんくぐれば馴染み顔ばかり
厚底靴 優越感の乏しさよ

松江市 銭山 昌枝

白無垢を迷彩色に染めて古希
緩やかな川の流れに油断する
横文字に囲まれ右脳黙り込む
確かめたい事が仲々切り出せぬ
一休みしては翔んでる姥桜

松江市 津川 紫光

胃袋に溜まったままの愚痴ひとつ
笑い声聞いて金魚の尾が揺れる
風速が計れぬままの不況風
ひとつずつ笑える話皿に盛る
遮断機があがれば美人居なくなり

松江市 川本 畔

おつかない友がかばってくれました
筍も皮を脱ぎぬぎ考える
豊かさの中で私はハングリィ
哀しみの地図を広げて喪が明ける
ひたすらに歩けば燃える足の裏

松江市 佐野木 みえ

五十年つけた日記の染みのあと
十年日記つける勇気を逡巡す
憎しみが胸から消えていく写経
踊り子号みかん畑を真つ二つに
裏道を通れば見える人の情

鳥根県 伊藤 寿美

望郷の視線が鳥になりたがる
イカナゴの釘煮を貰う春の風
この霧が晴れたらほんとの事を言う
言葉尻拾わぬ気づかぬ振りをして
知らぬ振りする気遣いに傷つく日

戦盲は戦盲なりの幸に生き

卒寿また分らぬことが増えてきた

妻や子に継り卒寿の白い杖

励ましのハツパややさしい妻の声

白杖の歩幅氣にする妻いとし

島根県 堀江正朗

心眼に優るものなし卒寿です

いとおしい花嫁これが孫かいな

自己批判すこうし甘くしておこう

初桃の香り神棚から届く

戦盲の耳に鶯よく届き

島根県 堀江芳子

カタカナ語溢れ老いには疎外感

まさかそのまさか警察教師医者

苦しまず死にたいなどと急に言う

遠い日の異邦の山河懐かしむ

戦友会老人会と間違われ

岡山市 井上柳五郎

鉛筆とメモ帳余生の道づれに

あじさいのプロセス亡母の絵まんだら

くちなしの匂いをのせて片便り

大正のロマンも遠くなりました

我が家にも与党野党の自己主張

岡山県 矢内寿恵子

ひからびた乳房に何をきかせよう

逃げ道でもう人間は信じない

単調な時計に朝を起されて

旅先の軽い浮氣を知るカバン

胃カメラは心の傷にふれたがり

岡山県 山本玉恵

過疎守る老いの祈りが深くなる

降る星を見上げ煩惱捨てている

採算は合わぬが畑に種をまく

羅漢にも鬼にもなれず女道

今日の無事祈つて送る朝の靴

岡山県 福原悦子

年輪の所為でか言いにくい言葉

一銭五厘の出会いばたばた急ぎ足

椿ぼとり一度は通る道なんだ

木の芽梅雨 眼鏡がくもる嘘はない

震災へ餓鬼の机が役に立つ

岡山県 小林妻子

新世紀の主役たちいま卒業す

花見バス造幣局を取り囲む

栄転にお寿司の味も春のいろ

都会でも田舎でもない浜の旅

挨拶もそこそこ庭の花をほめ

広島県 森田文

竹原市 岩本笑子

美祿市 安平次 弘道

わたくしのための土産を選っている
合掌造りの村で夫の宿浴衣

雪の壁また思い出が一つでき

汗と英知の黒四ダムは晴れわたり

星空に近いホテルで飲んでいる

竹原市 森井菁居

ネジ一つ狂うとみんな狂いだす

すぐ死にはせんとドクター言うてくれ

自覚症状無いから怖い腎不全

気力充実ハードルが低く見え

暇があり過ぎて湧いてくる邪念

竹原市 時広一路

料亭のメニューには無い我が家の膳

毎日が休みそれでも日曜日

博識の辞書にも寄せてくる新語

マイペース守った花は路地に咲く

ご馳走の基本にあった好き嫌い

竹原市 古谷節夫

夕焼けに溶かしてみたい僕の赤

霊が宇宙と対話する読経

故郷へ帰る切符がまだ買えぬ

許すこと覚え気力が萎えてくる

長考は気性に合わぬ香車突く

許す気はないが許せるのも女

ストレスをためているのは上司です

妥協などする気はないさ雲流れ

ギブアップするから夢が育たない

死ぬ時は一人矢印などいらぬ

香川県 瀧井勝

失敗の多い人ゆえ気にかかる

鈍くさいナースに一番世話になり

生い立ちの話が好きなら山

大木が減って山路が浅くなる

余生にも波乱はないと言い切れず

香川県 川崎ひかり

時として知らない幸せだつてある

価値観の違う時計をもつ家族

大切にすれば決して裏切らぬ

忍耐の拳の中で咲いた花

真実と事実の狭間でゆれる罪

香川県 清川玲子

日本列島悦び走るご懐妊

地上六階しゃがむしかない震度四

矢印の先をたどつて行く喪服

ファックスもケイタイもない身の軽さ

クレオパトラが着ると一番似合う絹

松山市 丹下 美津子

さわやかに一刀両断 真紀子節

内助の功もほめてやってよ博士号

笑わないであなたも通る老い之道

水平線とけ込みそうに日が沈む

寝入りばな壁突き抜いて来たダンブ

愛媛県 中居 善信

霧が晴れたら白骨林の中に居た

母の目の優しさ背筋叩かれる

邪で深目の帽子かぶってる

無党派とはそれ大衆の事だろう

深酒に親父の影を踏んでいる

高知県 赤川 菊野

桜吹雪あれは私の逝く姿

桜散る身辺整理急がねば

神前で喜劇の幕がおろされる

シナリオがないから人間生きられる

モンローに負けぬ乳房が私にも

北九州市 梅田 宣司

ためらえばたった一度が遠ざかる

一コマでずばり政治を切るマンガ

口を出さねばその真実が流される

梅雨晴れの光にいのち背伸びする

万札が無いと不安になる男

唐津市 久保 正剣

ノンバンク今も昔も不人情

年一度 戸車重くする黄砂

福耳の功德ないまま黄昏る

超不況ラブラブホテル売りに出る

中東の飢餓を知らないグルメ皿

唐津市 仁部 四郎

永田町裏の四則で事を決め

一度ぐらい総理公選してみよう

日に一度嘘をつくべきことがあり

説明が長いと困る思いやり

説明書読むと保険がこわくなる

唐津市 山口 高明

婦人誌の告白みんな炎えた女

我が家にもモヒカン刈りの異邦人

ストレスが溜まる国連査察隊

生き仏さまが見栄張るお葬式

二三人殺して医者は熟練し

唐津市 山門 幸夫

七回忌よう来やはった師の笑顔

甲高い髭の披講をもう一度

窓開けてホケキョの聴ける幸せよ

鶯の声に読経を休む老女

夏隣 熱燗もよしビールよし

唐津市 山門タミ

熊本県 岩切泰子

晴れだして花カタクリにやつと逢い

お元気な白寿へ赤い花贈る

楽しさが合つて皆声高くなり

筍の裾分けメニユー一つ増え

転倒へ起き方考え立つ持病

砂川市 大橋政良

分け前のことから結び目がゆるむ

洪皮がむけても同じ顔でした

手のひらに漫画になつた僕がいる

僕という雑魚が見境なく跳ねる

綿みたいな雲だ黙つて寝てみたい

弘前市 相馬銀波

手みじかに願う電話に長い愚痴

呑みなれた猪口の軽い日重たい日

母の日も父の日もない核家族

欲しい雨三日続いて嫌われる

母の掌に泪を絞るつぼがある

弘前市 今愁女

尼になる言うていたのは四月馬鹿

菜の花畑蝶はこの世を満喫す

都市砂漠ウターンした娘の自立

新聞の時局マンガで目を肥やし
近頃はやさしゅうなつた局の窓

もどり寒夜来の雨に重ね着る

連結で六十年のボンコツ車

うぐいすに目覚ましよりも先に起き

ぐじゃぐじゃと後では読めぬ日記書き

山鳩の求愛所作に見とれてる

唐津市 井上勝視

馴れた頃を窺っている消費税

単純を何故ややこしく物を言う

ヨイトマケの唄に今でも泣いている

気が合うと気を許したは私だけ

半眼に見下す弥陀の恐ろしさ

唐津市 市丸晴翠

目印の銀行合併劇で消え

腕白の寝相にやる気貰うババ

夕焼けを飲み有明よ甦れ

肩書に二次会会費背負わせる

古希の子が背負い切れない長寿国

唐津市 樋口輝夫

人生の相棒 痛いことも言う

目の遣り場に困るふりしてチラと見る

ツーショット何とも粋な蛇の目傘

送別会 課長十八番のセミヌード
青年団みんな実年過疎の村

弘前市 須郷井蛙

大根も主役となつたおでん鍋
銭湯が高くついでる缶ビール
校正の苦勞を知つて誤字言わず
人間の欲を嘲つてゐる阿弥陀
屋台店あなたと守る二輪草

弘前市 岡本花匠

尽きぬ夢追いかけて惑う明けの月
移り氣の男を癒す精進揚げ
体裁を忘れ食いつく心太
躓いた自負心嘔う昼の月
惜命の貌くもらせてニトロ錠

弘前市 小寺花峯

決断の時を知らせる紫煙の輪
日めくり新しい目が語りかけ
ガム一枚くれる女でスキがない
自販機に落ちてくる酒ひとり酒
思ひ出の話が重い通夜の席

弘前市 一戸ツネ

味噌汁の味を知らないお嫁さん
生き延びて無口になつた紙オムツ
黄昏て月を待ちます野の仏
花筏 今日命の橋になる
頬杖の羅漢まだまだ未熟もの

弘前市 櫻庭順風

ふるさとのさくらに城と下乗橋
ぱつと咲く花にやさしい風の私語
花のトンネル蝶るんると凭れあい
授業中さつと呼び込むじんたの音
観桜会来ぬと食まれぬ蝦蛄と蟹

弘前市 福士慕情

トランポリン子供は虹へ手を伸ばす
金髪の根っこ日本の黒い髪
臭いものやっぱり蓋をしてしまふ
病人の顔で治療を受ける犬
カメ虫の怒る姿が見当たらぬ

弘前市 宮崎ヒサ子

五月雨に今日も閉じ込められたまま
トタン打つ雨が優しく聞こえる日
忘れたい事は心で風化さす
乱切り輪切り俎承知してくれる
目に見えて花々彩を増してくる

十和田市 阿部進

別人に見事になつた初化粧
おしどりと云われた夫婦何故離婚
下心見たくて乗つた口車
不況とはおもえぬようなゴミの山
寝たさりの口が達者でいやがられ

黒石市 相馬 一花

油断して軒をかけた通夜の席
男性が混じると派手になる化粧
安売りの牛丼二杯平らげる
酒飲みが顔をしかめる桜餅
色即是空 美女に見惚れるナムアマミダ

可児市 板山 まみ子

当人は何がなにやら初節句
ご先祖に叱られそうな遺産わけ
喉もとのマグメ鎮める缶ビール
一本のビールで二人宙に舞い
後悔できし始めた脳のシワ

さいたま市 八田 敏

くも膜下 姉生き抜いて電話口
母の日にカーネーションを病妻に買う
墓造り次は遺言急かされる
老いふたりを忘れ大鍋買って悔い
実を結ぶ樹だけ肥料をうんとやり

東京都 後藤 早智

あちこちに不義理しているカレンダー
移動日の夫に合わすウイークリー
母の日のケーキの味の飛びっ切り
記念日に桜一生付いてくる
平成の汚染に耐える仏達

東京都 播本 充子

還暦を過ぎてても上り坂が好き
会社より遠い二階の子供部屋
健康によい物ばかり食べる欲
私も抱いておりますわよ殺意
強かにならねば敵は群れている

横浜市 田中 笑子

帰省して母にねだった熱いカツ
元気を前面に出し若さ売る
花粉症終わって肌に春がくる
年寄りが掃き清めてる路地の隅
呆け封じ必死に祈る母の背な

横浜市 菱田 満秋

長生きで多くの人に借りが出来
髭を剃る頬撫で瘦せたのに気付く
良い日和 春はますます眠くなる
地球から僕は宇宙を覗いています
洗わないでは気が済まぬ洗米

横浜市 小野 句多留

上げ膳据膳 宿は女の幸を盛り
干渉はしない土俵の家族独楽
お土産は買うなど妻に念おされ (借金ツアール)
定年後歩幅を変えた妻の策
シャルウイダンス好きな女に何故言えぬ

横浜市 山下省子

女です御機嫌な日のワンピース

定年の夫に右へ習いたい

スケジュール詰つていと安堵する

芝居観る生の焰を燃やすため

J Rラッシュに座れしあわせよ

富山市 島 ひかる

立山の黒ユリが待ついい便り

年輪の数だけ耐えてきた根っこ

むらさきの花が目につくおぼろ月

体力に誘われ山にまた登る

竹の子を食べてるだけで射殺され

富山県 増田 紗弓

アイスノン今日は休めと当てられる

やわらかい武器かもしれないぬ鼻濁音

よく笑う妻がくすりになつて

知らんふりするのも妻の役どころ

友達の助言振り切り渡る橋

富土宮市 渥美 弧 秀

諍いを見て見ぬふりの昼の月

花祭り鬼籍となつた友偲ぶ

塩断ちの病を押して独り酌む

通院が老夫婦の余生ともいえる

カタカナの海へなじめぬ老夫婦

和歌山市 山根 めぐみ

気のぬけた花の命を捨て切れず

買控えみな出不精なテレビ守り

あきらめていたが美顔マッサージ

雑学をいっばいづめる古袋

和歌山市 田中 みね

目に青葉花もいけど緑良し

パワー全開朝から御飯てんこ盛り

おばあちゃんと呼ばれ新聞換えました

浅学を見下す君の目が寒い

西宮市 秋元 てる

こそばいが褒めほめ教に宗旨変え

お迎えを待つてるなどと葉漬け

見舞い固辞その孤独さに胸つまり

張り残した障子の事も友は病む

西宮市 刈田 泰司

旅好きへ真つ先にくる五月

落選のマイク疲れが倍残る

春を倍たのしくB型の人と

花は枯れても動いてます花時計

吹田市 野下 之男

ロボットが句作りをする怖い夢

薫風におらが天下の若燕

新緑の海に溺れる吉野山

ペンギンに見詰められては目を外らし

豊中市 井上直次

どきどきとケイタイ胸に街に出る
嘘ひとつ上手につけず逝つた彼

おつ元氣かと戦友に会う通り抜け
甲種合格そんな男が介護され

豊中市 岸田知香子

娘が贈る神戸の夜景山の宿
薫風を受けて行く人帰る人

車椅子家族の絆花の丘
樹々の中ソラート抜けて展望台

守口市 井上桂作

新内閣顔ぶれだけは希望持ち
変革を求める民意こそ大事

スイミング歩くしかないお年寄り
銀行は夢を追いすぎ店しまう

枚方市 二宮山久

初孫の話へ妻の長電話
生前の父を語るか長き列

お隣の売家息子とする対話
景品を百円ショップで買いあさる

岸和田市 木村正剛

信仰もほどほどにして養生を
酒たばこ誘惑に負け悔いはない

頑固さがとれて情熱失せてゆく
薄情になります年金暮らしです

大和高田市 岸本豊平次

痛む膝三里に灸を気休めに
買物を兼ねて歩いて荷が重い

家具調炬燵布団を取って夏の部屋
振り向けば亡母の眼惣ぶ回り角

奈良県 渡辺富子

月並みな団らん弾む豆ごはん
ワンルーム一氣に夏にする金魚

化粧水うす紫の夏になる
立ち直りのきっかけ母のぬくい飯

岡山県 荻野鮫虎狼

鍵穴を覗き世間の悪を見る
腹割って笑えぬ日々がまだ続き

使い捨て時計と妙に馬が合い
叙勲の日ネクタイ一本買うて去に

鳥取市 近藤佳子

先輩のはげまし温くやまい癒え
母いとし最後はどうか自然死で

黒リボン叔父の葬儀に雪が舞う
草に寝て空いっぱいをでかい夢

鳥取市 前田一枝

改めて指折り数え差しむかい
大変だ別れた妻が来ると言う

じんじんと近づいて来る向こう岸
お世辞でもほめられまんざら悪くない

鳥取市 春木 圭一郎

責任の重さ人格まで変える
責任を押しつけ今も悔い残る
責任者出て来い来られても困る
責任を果たし晩酌ああうまい

米子市 永井 三津子

疲れきる本音隠して母介護
子の胸へ倫理育てる親が消え
損しても人道歩み逝きたいな
母看取り母の一生考える

米子市 野坂 なみ

交代で緑は森を深くする
賢こぶる阿呆始末におえません
好きだから一寸悪さをしてやろう
牛肉はよろしい鯨駄目と言う

鳥取県 権代 康女

ピンク色やさしい心にしてくれる
運命の出会い人生変りゆく
落度ないように女が気を遣う
助け舟夫婦の固い絆かな

鳥取県 山本 正光

仕合せは温い家族にある絆
ねじ巻けばまだまだ動く七十五
笛吹けば従う民の遠い過去
爺やんと言われた飲み屋もう行かん

出雲市 板垣 夢酔

面白くない話には塩を撒く
納得はせぬがじわりと老いはくる
鬼よりも飯を炊かない恐い妻
各家の犬が吠えだす住宅地

出雲市 久谷 まこと

学歴が幅を利かして先を行く
さしかけた傘が出会いはじまりで
恋心いだくルージユが派手になる
五月晴れどうして過ごすす財布

松江市 安食 友子

非人間がうじゃうじゃして困る園
人身攻撃に仏陀も首を捻つてる
粘着のような執拗見せる跡
独りぼっち心の中に花咲かす

高知県 小澤 幸泉

あまりにも緑目にしむ遍路みち
母の肩だいても昔戻らない
チャップリンのように生きたい今の世に
銀婚の祝い万札五枚だけ

唐津市 宗水 笑

ガイドさん頼りに老いの旅ごころ
味噌汁がうまいこの世は捨てられぬ
いい人と言われる歳に近づけり
暗い記事ばかり眼鏡を替えてみる

風薫る日

木杯一組台付を賜与されて

橋 高 薫 風

東京在住の次女幸がリザーブしてくれたのは、翌日の叙勲授与式の会場、国立劇場に近い赤坂プリンスホテルなので、前夜はゆるりとくつろいで過ごす。

夕食は地階の寿司店「橋」で気ままに注文して摂る。ビール小カップ、突出しに数の子、鯛のお造り、煮付けは若竹、御飯つけ物というメニュー。とに角、天皇陛下にお会い出来る日を控えてのこれが私の精進潔斎の献立で、好きな物さわかかな品で心身の充実を整えたつもりであった。

食後はベッドに入るまで部屋でテレビを見る。終戦後、昭和天皇がマッカーサー元帥をG・H・Qに訪ねられたときの歴史的映像がNHKの特集で放映されていた。東京会館も父母との思い出深く、なつかしく見ていたが、このたびの慶事に妻の随伴が無かったことは一番の心残り、共に喜びを頂きたかった。



受章の日(5月10日)国立劇場にて

国立劇場では木杯を受ける代表として舞台上に上り、親しく遠山敦子文部科学相から賞状を頂くことが出来たのは感激だった。NHKのテレビ番組、「詠めやうたえや川柳天国」でご支援頂いた俳優の小沢昭一氏も一緒に一緒だったので挨拶をしたが、見覚えのある頬の黒子にもお交りはなかった。

大臣は一番末席の私に一番やさしい大らかな笑顔を下さった。私はそのほほえみに一瞬包み込まれたように打たれた。こんな笑顔がこの世にある。私のこれからの生き方に大きい示唆を受けたように感じた。

天皇陛下には豊明殿でものしずかなねぎらいのお言葉を頂いた。近々とお顔を拝すること園遊会の様子とあまり変らない。皇居前広場での記念写真は風薫る中で、今つけたばかりの胸の勲章が光る。印象的だ。

かくて緊張の一日、新幹線に座ったときにモーニングのポケットから出てきた紙片には、新郎の父とあった。何年振りの着用か。夜、帰宅して早速妻に長年の感謝を述べ、三つ重ねの杯で喜びを交わしたが、まるで新婚再出発やなあの感慨は、咽喉まで出かかって言わずに置く。

川柳界の後押しあつての受章はありがたく、この方は声を大にしてお礼を申し上げます。

木杯へ男の月の花菖蒲

薫風へ大内山の風の色

恩師かや豊明殿の雲に声

かしこさよ陛下と同じ目の高さ

文相の薔薇の微笑もしかと受け

自選集

橋 高 薫 風

傳いて笑うことなき盲導犬

リストラ後犬の顔にも深い皺

母と児が母と娘になる写真帖

世の中はそういうもんやで済まされる

風薫る伽羅も馨香もしずかなり

石 川 侃 流 洞

国会答弁 詭弁になって荒れてくる

定期入れに些細な機密費あたたためる

酒の友逝つて無沙汰の繩のれん

バスツアー トイレ休憩でも土産

老いて子に従う日々の無力感

藤 村 女

白壁が夕陽に見事映える街

白足袋の軽く酔うてる踊りの輪

エプロンと足袋の白さに母の自負

哀歎もともに母娘で織るドラマ

白い手に紫煙がゆらぐティールーム

堀 端 三 男

年金と釣り合う軽い旅をする

負の相続無だけ良しとしておこ

接待は番茶と決めて川柳

もがり笛聞きつつ友と嵯峨野ゆく

タフですね月に二十日は句座と言う

田 口 虹 汀

卒寿過ぎるとしばしも辞典離せない

生き字引き等と言われた節もあり

照る照る坊主に子供の夢をたんと積み

この足がお城の藤も駄目と言う

母と別れて六十五年も経ちました

西 田 柳 宏 子

オペのあと弱みは見せぬ空元氣

無視されているらし四面楚歌を聞く

爽やかな風にかうか風邪を引き

調法な口だスラスラ二枚舌

心経を唱えて丸い心抱く

八十田洞庵

あぶり絵の中に淀んだ欲の皮
兵馬備あなたも戦好きですか
寝かせば旨味増すワインにも似る女
グダイスト失意の日々がまだ続く
風塵を避けて貴方の後を追う

西村早苗

誕生日届きもらった花ことは
言いそびれそびれて寝返りばかりして
麦わらを目深に暑いきのう今日
梅雨もよしほろりと酔うている独り
河にこり気にせず鮎の解禁日

小林由多香

天皇も来ておりました淡路島
皇后のお躰が見える位置で会え
玉青館 九十九翁の絵に出合い
なにはともあれおみやげにくぎ煮買う
すばらしい橋うつくしい瀬戸の景

藤井明朗

待つ事久し景気回復神詣で
世相悪こんなにはんになろうとは
二〇〇一年 曾孫誕生九〇の幸
参院選 野党力が抜けている
柳友ありがたし九〇のぼくを閑にせず

土橋 螢

爺さまと孫携帯で話中
右もひだりもよろしくという人ばかり
光っていたなあ悪人でいた時は
土曜日が女と遊ぶためにくる
文学博士の珍しい美人僧

榎本吐来

さり気なく老婆の横顔見つめる夜
言うことははっきりと言う共白髪
古稀の杖 今年も初夏を迎えたり
やるだけはやった男の粋な背な
明日という日を持つてる古稀の椅子

宮口 笛生

戦争のみじめを嘗めた終戦日
敗戦に涙してから半世紀
負けたとは思わず武装解除され
靖国参拝 忠義に散った兵ねむる
靖国参拝反対 兵の浮かばれず

斉藤 荔

ご懐妊の兆し嬉しやこぶし咲く
ブナの芽がすくすく森の苗づくり
ハシ打ちの夢ばかり見るトキである
名馬像の除幕奏でる馬頭琴
霊柩車 桜吹雪に包まれる

竹内紫鏡

診る部屋は4も9もあり受付機
レジャーランドの宙に力学心理学
横書きに変えた名刺で若返る
縦書きは句稿と悔みだけにする
コーラスの金賞 狂喜する美声

舟木与根一

竹槍の力信じる千枚田
親離れさつさと進み五月闇
化けそうに老けてしもうた招き猫
仲の良い喧嘩はいつも派手になる
整形は抜きで女の子が生まれ

野田素身郎

定年後の設計死期まで書いておく
治ること信じりハビリしています
書き終えてビールがうまい夏の宵
プライドを捨てて二度目の職に就き
ギリギリの暮らし年金明日は出る

恒松町紅

それぞれの出番へ花は咲いて散る
商魂も職人肌も落ちぶれる
恙なく町の行事に揃う靴
友だちが減って淋しくなる湯呑
退院し街が変わったように見え

遠山可住

コンクリートの割れ目で足をの知るいのち
金握るのが一番好きな大きな掌
賛成の声はニュースに乗って来ず
卒業のビリで生涯親しまれ
合格へ犬も家族の尻尾振り

玉置重人

栗師の遺徳 北から南から
嘘ひとつ隠し通しているなざけ
粗品だけ貰いそ知らぬ顔で去に
信心は二の次という集印帖
棒読みの祝辞に欠伸かみころす

月原宵明

晩酌の時間は平和な父である
見ぬように歩いたはずの縄のれん
半日は無職テレビとおつき合い
老人が一人二人と花むしろ
良し悪しにつけ仏壇へ御線香

森下愛論

病癒え奇遇の如く酒を酌み
春風に浮かれて飲んで朝を悔い
花の下飲めない奴が急ぎ足
挨拶を引きずる電車に手を振って
まだ炎える残り火がある老兵に

河井庸佑

温かい風に押されて湧く勇氣
じつくりと次のチャンスを待つ布石
一冊の本に出合つてから目覚め
持ち味を引き出し生かすのも度量
積みあげた努力がチャンス引き寄せる

波多野五楽庵

羅漢さま不肖の弟子が手を合わず
紀伊国屋 太宰治に立ち止まり
有線を切つて下さい泣いてます
いつかいつか私を捨ててゆく情念
人の世や心頭滅却できもせず

正本水客

春うらら美しいままに恋おわる
お世辞だとわかっているから笑うとく
口裏を合わせることをおぼえられ
いつも真ん中へんにいる昔の写真
一呼吸おいて自分をなぐさめる

芳地理村

倒れない工夫が斜塔生かしてる(ヒサ)
一〇〇段の階段きつい洗礼堂
青銅の扉にドウモオの顔がある
墓地ぐるり囲む誇りの大理石
珍しいシノピエがある博物館

阿萬萬的

お若いと言われちよっぴり無理もする
手術した友へ自分の傷を見せ
私利私欲ついつい良心まで揺らぐ
あつさりと妥協やつぱり裏があり
価値観の相違と孫にしてやられ

木村あきら

上昇志向 豆のツルも人間も
似顔絵を丸くまあるく描いておく
逆境に佇つと男の値が決まる
長寿国くにの財布が下へ向く
鉛筆は出刃包丁より怖い

工藤吟笑

大地の愛求めて種は飛んでゆく
踏まれても雑草しぶとく花咲かす
土に陽を受けて雑草しゃべり出す
波のまにまに人生の一ページ
陽を傘に月を鏡にして暮らす

八木千代

前の世も橋のたもとで見た柳
川風を柳ひよろりと受け流す
風の夜に柳ゆらして逢いに来よ
柳困つてあいまいに首振つている
柳はせめて癒しの手紙書くばかり

台風がまた日本へちよこまかと
汗ぬぐう瘦せた体を日がかざす
改札にパンチの音が消えてから
赤ワイン今日は夫の誕生日
一票はちよつとの義理で上げられぬ

黒川紫香

川島諷云児

一徹を身上として無位無冠
少しづつ積み荷降ろして終の駅
いつまでの夫婦と思う傘を干す
我慢などやめた泣きたい時泣こう
もう一度咲かせてみたい枯尾花

野村太茂津

苔の花夜明け前から待つカメラ
裸婦像を囲んで美とは美学とは
顕示欲強い司会がチョンボする
大声で叱る心は恕してる
競うこともう無い梅雨を聞いている

越智一水

花がご馳走花と出合える山が好き
葱坊主敬礼したいよう並び
深淵で神秘たたえるかいの音(保津川下り)
激流でしぶきの花を嬉しがり
嵐山橋があるから人がより

告げ口を聞くたび耳が痒くなる
フラスコの中にもめぐと入れて見せ
気くばりを絶やさぬ母の肩の凝り
口紅の彩薄くして風を待つ
招待をされたパーティー高くつき

小西雄々

両川洋々

離農した父の無口を知る土だ
消火器を背負いおんなに逢いに行く
ふぐ鍋が賄賂の金を見ておった
天の神地の神余る米に泣く
その内に使う仮面が干してある

板尾岳人

もう誰も愛してくれぬ破れ傘
濡れて行く相合傘は誰だろう
六月を楽しむ雨だ濡れて行く
愛されているのに傘が干してある
愚痴言わぬ傘だが泣いているのです

河内天笑

菖蒲よりきれいにうつりたいわたし
僕に似た顔の蘭鑄飼ってます
あとになるほどむつかしくなる返事
またあした朝逢いましよと陽が沈む
花が咲くように笑ってくれました

水煙抄

板尾岳人選

京都市 山本 磔

京都府 前上 英一

切り札があるのに黙っていてくれる
ピアノソロやさしく素敵な女だった
世渡りの下手な男の妻である
迷路では仆れることのないように
錆の効いた答してから別れよう

京都市 勝山 美千代

マイカーで来るなど酒が出るらしい
ネクタイの愚痴をビールの泡が消す
ほとぼりの冷めるまで待つUSJ
正論を青いと蹴った自己嫌悪
言い訳の矛盾を妻は見落とさぬ

秋田県 湊 修水

公園の泣く子笑う子みな宝
窓ひらく今年も無事でツバメ来る
五月晴れ夢を花壇に遊ばせる
連休を栄養補給に帰る孫
老境の胸にしみじみ亡父母の恩

綾部市 藤田 芳郎

母が手を振っているから振り向かぬ
若い木の根が手探りをして伸びる
てこずった釘ががちり効いている
不用意に出せば白旗染められる
騙された振りする母を欺けぬ

黄昏の挽歌淋しい介護法
掛け捨ての保険に自問自答する
乗ってみて車椅子にもある疲れ
卒寿なお諦め切れぬ夢がある
年金の財布があくびばかりする

東京都 清原 悦子

絵日記に書くひまわりが育ち過ぎ
資格欄 人の心が見えますか
人間に余計な知恵で胃酸過多
気晴らしのつもりの酒が二日酔い
社宅から解放されて太り出す

川崎市 浦野 昭志

定年後 妻から家事を教えられ

正論が通つて白い眼の四面

かあさんに抱かれた子供振り向かず

物不足耐えてきたから捨てられぬ

新婚の宿懐かしくフルムーン

川崎市 塩 沢 ひで

亡母の歳越えて生きざるを有難き

今日一日電話鳴らずと日記帳

台所も新内閣を期待する

肩ぐるま可愛い足が首を締め

肩書を脱ぐとあいさつ軽く出る

町田市 土 田 今日子

レオポンのゲームに謎が深くなる

花嫁の父を演じて疲れ果て

タンデムの足が揃う日揃わぬ日

生涯の友は酒だと思ひ知る

カレーライス昼も食べたと言えぬまま

八王子市 井 上 京一郎

続編を出すよと決まつた視聴率

バランスに生きて無言のヤジロベエ

幻のごと薄命の二千元

再映のドラマへ主婦の昼下がり

分身としみじみ思う子のしぐさ

日高市 根岸 方子

この歳が風の音にも振りむかせ

さりげない言葉が自我を目覚めさせ

携帯の話題おかずとダイエツト

子育ての勲章とするカーネーション

子育ての合せ鏡を子が磨き

横浜市 山 梨 雅子

娘の電話何かあるなと親の勘

まだ当分生きるつもりで塀直す

ドラ鳴つてタグに曳かれる豪華船

珍しい人の電話で訃報知り

横文字の輸入野菜に迷わされ

横浜市 生 坂 サト子

絵と同じ富士に向かつてこんにちは

オフの海夏の騒めき乗せてみる

アレルギー旨い料理に箸も泣き

そこそこの美白夏日に重装備

寂声が響き安売りらしく見え

横浜市 山 本 為佐子

ロボットの方が躰ができている

仲良しと思われている濡れ落葉

朝帰り少し饒舌過ぎないか

捻挫した足が時々駄々をこね

着飾つてみても蝶にはなれぬもの

横浜市 荒井宏和

遠い日の記憶を戻す子守唄
想い出が凝縮してる古日記
ふるさとの友も地蔵がただ一人
舌先で操られてる青リンゴ
分譲の墓へ富士山入れて売り

横浜市 近藤道子

さて何処へ行くか迷う青い空
自販機が怒ったように缶を吐く
うかうかとしていて短所攻められる
ゆっくりとスローカーブで攻めてくる
海に来てみんな許してしまえそう

三重県 尾崎勤

罨があるかもしれないマンホール
スポンジになれぬ固さを信じたい
あと少し重いギアで漕いでみる
排ガスもエコロジードと言うクジラ
価値観の違い言わずに若くいる

田辺市 大峠可動

祝婚歌風が吹いたら押ししてやる
男とは右折左折も世の舞台
生野菜わが血糖の蜜を吸う
偏頭痛天の孤高と思し召せ
向かい風ばかりで直線を引けず

海南市 堂上泰子

薫風を吸いつつ草を引く冥利
一途さに負けた男の純な愛
母さんは何といても我がルートツ
若葉風吸って尾を振る鯉鱈
阿吽の呼吸で夫と長谷の寺

和歌山市 松尾和香

貧しいが自由に一人歩いている
虹の橋渡って行つた君の影
ワンカップひとひら浮かぶ花の下
花の下熱い女の恋灯り
苦も楽し夫婦の絆忘れ草

和歌山市 武本碧

吞舟の魚が釣り竿手こずらす
竹光を見抜く視力も白内障
難題が巧く運んで高枕
強烈なギャグでゴキブリやつつける
生き方を草書に変えて崩れ過ぎ

岐阜市 平野あずま

米びつを満たし魂飢えている
逆転の発想生んだ股覗き
衣替え少女おんなとなる兆し
運勢欄信じて買った宝くじ
回転寿しくくるネタは多国籍

奈良市 乾 春雄

正座からやがてあぐらに座がなごむ

勞わりにもろい男の向こう臍

切り札にだんまりという武器を持つ

童唄抱かれて聞いた母の膝

三面鏡シヨックを受けた背の曲り

鳥取市 録 沢 風 花

千年の彩で遺伝子風に会う

煌いてみたいカラスのひとり言

壺の飴にがい薬と書いておく

義理果たす袱紗の色も褪せてきた

新世紀維新の風に帆を上げる

鳥取市 永 原 昌 鼓

善人の振りを続けて白髪増え

酒好きがしょんぼりしてる心配だ

とりあえずボスには尻尾振っておく

知らぬ間に僕の遺伝子スパイされ

辛いこと川へ流して明日を待つ

鳥取県 下 田 茂 登 子

だんだんと無口になって行く夫婦

八十路坂今更迷うこともない

年金の赤字を埋める策がない

聞く耳をもたない夫と半世紀

真夜中に恐ろしきこと考える

鳥取県 平 井 栄 翁

夢ばかり詰めて置いとく玉手箱

空き缶を蹴って鍵っ子憂さ晴らす

生き残る事を路傍の草で知る

コップ酒溢れて目尻下げ笑う

大正の意地算盤を未だ使う

鳥取県 鳥 羽 玲 子

降りやまぬ空にも愚痴をこぼして

捨てがたいごみ押入れに眠ってる

下車近くなつて切符にからかわれ

おいしさに恵まれ過ぎて恐くなり

文庫本バックにいつも住んでいる

鳥取県 福 西 茶 子

妻の座に勝る影などもう要らぬ

激流へ女の意地を出す一步

木枯らしの恋か女を連れていく

一步でも退けない愛が親にある

片想いシヨートカットの風になる

兵庫県 山 本 泰 子

迷いなどふつとばして着る赤い服

まとまらぬ話に退屈してしまふ

飛んで来るつぶてこわくて出ぬ本音

喋りすぎ叱られてから寡黙です

占いに負けて黄色い花を買う

尼崎市 軸丸勝巳

短冊に風は天敵通り抜け
七十五恥ずかしながら初入院
手術するせめて蜜柑の剥ける手に
千枚田先祖の美田守り継ぐ
この空を飛ぶケイタイの無駄話

尼崎市 河津正治

ニアミスの風が女の窓開く
開封の胸ときめいて春うらら
ひと口多く何時も火種を抱いている
他所行きの言葉で話す留守電話
忍ばせた火種にむせぶコンパクト

西宮市 坪井孝一

夢に出るバラは無口の過去形で
妥協という負けを意味する勇氣いる
振り上げた言葉のみ込む妻相手
訪れてうまい茶菓子にうらがある
ひとり酒盗んだ方がなぜ旨い

宝塚市 飯西ミサヲ

ふる里が無性に恋し子守唄
経を読むゆるせゆるせと詫びながら
夢で見る母はいつもの割烹着
伝言板何か書こうか白すぎる
使うほどよくなる脳とは言うけれど

伊丹市 延寿庵野霧

茶柱が立って糸口ほぐれ出す
三面鏡裏から見てる影喰い
尺度捨てバカなことでもおどろかず
我が胸を輪切りにされて検査済む
巢立つヒナ試されている向かい風

川西市 井本清山

旅なれば朝昼晩の膳に酒
派手目なら何でも貰う子の古着
千ミリに伸びて縮まぬ腰まわり
開けるまで夢を抱かせる引出物
門と塀なくて空き巣が困りそう

神戸市 両川無限

ときどきは自分が号令かけてやる
手話ニュース私も音を消してみる
ど忘れの真ん中辺に妻がいる
水割りの底にたつぷりある本音
見栄張った分だけ句読点を打つ

神戸市 山口光久

幸せな今に感謝の千鳥足
寡黙だが要所は締める頼もしさ
枝振りの良い娘が誘う甘い蜜
宝くじ当たった積りの酒支度
枝豆をつまみ遣伝子考える

岡山県 国 米 きくゑ

新緑が明日の幸せ予告する

夢だけは乾かぬように老いの辞書

うかつにも本音が洩れた齒の隙間

紫の袂紗へ義理を包みこみ

風の出口で義理人情が絡みつく

岡山市 藤 原 一 平

ポケットの石がだんだん老いてくる

逆らえば投げる小石は持っている

背伸びする度に梯子が外される

投げ返す石がだんだん減ってくる

嘘一つまぜて話を盛り上げる

広島県 福 島 万 年

生命線たどれば御先祖様に逢う

新世紀ノーと言いたい事ばかり

ポイントを過ぎて終点までわずかに

父さんの願いは雨の大連休

勲章も恋もまだまだ七十歳

倉敷市 家 守 政 子

三代代なまこ一匹もてあます

六月忌義父も実父も田植どき

川縁を卑弥呼も追った姫虫

わが余生萎んだ花と重ね見る

味付けはいつもの手順サシスセン

倉吉市 大 下 智 子

介護する目が怒ったり笑ったり

先祖からいわゆるシヤイな家系です

親切も過ぎていわゆるおせっかい

十人が話すうわさの種ひとつ

助けたり助けられたり農作業

倉吉市 牧 田 賀 寿 恵

どっこいとかけ声かけて朝が来る

軒下でわかる家庭の息づかい

目薬をさして青葉に会いに行く

墓参して父母の話を持ち帰る

焼魚尻尾が先に火事になる

米子市 猪 森 スミエ

母さんの懐にある避雷針

ひゅうひゅうと飛ぶ風船の応援歌

キリシマを吹かせ小庭の厚化粧

箱庭に植えたい物が多すぎる

やるやらぬもめた揚句の角隠し

米子市 森 脇 麗

春の膳まず筍を茹でてから

筍掘りまだ祖父の鉄確かなり

春雷や地震来たかと身構える

気紛れな風の誘いに乗ってみる

初夏の風ほんのり潮の香を運ぶ

出雲市 伊藤 玲子

咲いて咲いて春がこぼれる鳥はたん
思ひ出のしたたる傘を干しておく

正論が数の論理に食べられる
正論を吐いて冷飯食べている
気まぐれな雑音耳に栓をする

大阪市 伊藤 博仁

鶯の声に目覚めた旅の宿

ありがたい今年も達者で桜見る
よくなろう我慢がまんの灸と鍼
春が来た俺もこぶしを聞くととき
病みついて世話する嫁の名を忘れ

大阪市 小泉 ひさ乃

ときめきを忘れず独り自由席
リハビリへ五月の風に助けられ
春うらら花粉症には辛い春
待ちわびてほんやり見てる花時計
青テント春夏秋冬花の下

大阪市 熊代 菜月

振り返るそこにあなはいつも居た
愚痴言わず涙もみせぬ妻の意地
大阪の花も知らずに住んで居る
賽銭の小銭をたんと遍路旅
ほどほどの欲が老後をかがやかす

大阪市 岩崎 公誠

リストラで憎いライバルみんな消え
マンションのマド窓ごとにあるドラマ
割勘で寒いふところ丸見えに
親の世話わたしがすると手を挙げぬ
鏡拭く心の揺れがこびりつき

大阪市 尾崎 黄紅

酷寒と戦ってきた冬が好き
少うしの毒を塗ったら艶が出た
禁酒してます嘘医者を知っている
双眼鏡で絶対を見てしま
月とスッポン同じ兄弟なのになあ

大阪市 星野 さらり

山寺も元の静けさ桜散る
美人薄命忙しそうに咲く辛夷
地図にない街へ行きたい青春譜
愛唱歌昔しのでタクト振る
湯豆腐は母と別れの宴となる

大阪市 大川 道子

リーダーになつて悪餓鬼まるくなり
ヒロインはぱっちりメイクして眠る
生傷の絶えない孫で医者知らず
冷え症に嬉しい冷房車
幻になった初恋しゃぼん玉

河内長野市 大西文次

百までも生きたら困る軍資金

食べ放題お替りをするてんこ盛り

ライブに庇われそうになる落日

生きてます腹がへつたら起きて来る

明治大正昭和またいで今日も生き

河内長野市 木太久 正一

フレッシュジュース毎朝作る私です

肉じゃがをテレビの通り旨く煮る

大根島生れの牡丹七つ咲き

竹の子を三日つづけて飽きぬ旬

納骨のように冷たい貸金庫

河内長野市 水谷正子

姫も居て国会中継面白い

偏差値の良い銀行に主婦が寄る

数字には弱いがお金貯めてはる

美しい牡丹を庇う蛇の目傘

披露宴私の真珠誰も見ず

藤井寺市 吉田喜代子

連休で土と対話が出来ました

故郷から良い風ばかり吹いて来ぬ

宅急便野菜の隅に母の愛

善い人でいたいときどきツノが出る

あの言葉甘く聞こえた日の孤独

和泉市 小坂凡英

乗せられて臍を噛んでる口車

口封じほど当てにならないものは無い

酒飲める健康解さぬ医者がいる

無党派が実像になる恐怖感

木盃ですます不条理官の国

泉佐野市 稲葉洋

格付けが事前にあつて奉加帳

大小の失敗談で同期会

体調を尋ねご自愛にて結ぶ

息災の酒有難や有難し

ITよ黄泉のアドレス知らないか

岸和田市 不破仁緑

さび抜きを頼んで孫の帰り待つ

結納の報告をする花手桶

権太くれ今日はちよこんと畏まり

口上は簡単にして祝い酒

凜として立てば風までついてくる

堺市 荻野像山

アルバムで色変わりしていた初心

若葉マーク貼ったまんまで祝う古希

ポックリへ羨むように悔やんでる

週刊誌妻の気配へページ繰る

拝観料取られ仏像留守の寺

高槻市 西谷 治三郎

吹田市 太田 昭

健康法酒も薬も飲んで

天災は忘れる間もなくやってくる

宝くじわが人生にどこか似て

謙遜の裏に自慢がちらちらと

二千円なぜか世に出ず生きて

高槻市 左右田 泰雄

夢を抱くあの子はきつと星になる

蹴り上げたボールに明日の夢を賭け

回転ドア リズムが合わず押し出され

抜け目なくしかと押えた勘どころ

権勢もいつかは見えて来るかげり

高槻市 執行 稲子

ロボットも人間大で闊歩する

さわやかな風に馬酔木をゆらす寺

控えめにすこし安堵の自己主張

いにしへの蹴鞠のしぐさ風に舞う

座禅草に足とめられる春のステップ

吹田市 須磨 活恵

女の鱗落し人間らしく生き

人はみな多少の痛み持つて生き

耕せば大地の匂い土の声

うたかたと知りつつ淡い思慕を抱く

棒線を引きつつ生きるヒント読む

ころげ落ちる坂の途中で母がいた

大盃に桜散らして春を飲む

あちこちとよそ見しているチューリップ

古里の山を見つけた絵画展

哲学を持った彼とは絵を見ない

羽曳野市 福田 悦子

デリケートな舌が知ってる母の味

あの町へ行きたい虹の橋が出る

スカート捲りさせた突風憎めない

七夕に会いたい人の中に亡父

朝顔が咲いた咲いたと蝉しぐれ

羽曳野市 森田 四三郎

単身赴任妻子臉に一人酒

にっこりとリストラ告知四月馬鹿

父の日も元氣そうかとそれつきり

平均寿命過ぎてそろそろ万歩計

老人会寄ると話題は安楽死

松山市 高橋 宏臣

それからを読むから一歩踏み出せぬ

理不尽へかすんだ男立ち上がる

貫いた気ままの背なに寒い風

迷いから抜けて据わった肝つ玉

国境の向こうの空も春がすみ

愛媛県 黒田茂代

あたたかしあなたの傍に居るだけで

花によい雨は雑草にも恵み

山道で握手をせがむ葛の蔓

夢を描く色鉛筆の五百色

退屈とも言えず愚痴の聞き役に

高知県 桑名孝雄

女偏だんだん増えてきた字引

ムダ足もカウントされた万歩計

新緑の砌 絵具を使い切る

百までの生きる日記は買つてある

至近弾打つても気付いてはくれぬ

高知県 小川てるみ

スイッチを入れると部屋が笑い出す

春愁かまだ風船が上がらない

恩愛をたつぷり受けた松葉杖

夢を盛る器が少しかけている

花びらの軽さで恋が散つてゆく

今治市 渡邊伊津志

喜んでもらえるように生きている

岩の間の潮が息づく春の音

掌の皺を見つめる失語症

撥ね返る石を見ている沖の波

真似出来るはずない深い海の色

今治市 塩路よしみ

ねじり花素直になろう陽は昇る

花も人も耐えねばならぬ風に逢う

強がりを言つても妻の傘の中

一徹の心へ誰も踏み込めぬ

気くばりの言葉が足らず呼ぶ波紋

今治市 野村清美

金だけが味方と思う不幸せ

我慢するすべないままに諦める

何も出来ぬが耳なら貸して上げられる

目立たない花も咲きたい意地がある

飯の世に義理と情けが絡みつく

唐津市 坂本兵八郎

姿見がパントマイムのお客様

合格の足音高いオクターブ

初めてのデート蟻にも笑みかける

日記には嫁に感謝とさりげ無く

井の中の隅の隅まで知る蛙

北九州市 岡田幸生

マドンナのその後を訊いたクラス会

年下の男に揺れるイヤリング

その先に妻を裏切る途がある

コンビニに主婦の手軽が置いてある

近道と聞いていたのは茨道

札幌市 三浦 強 一

生一本などと短気をほめられる
よく笑う仲間でうまい酒となる
脱皮する娘まぶしいキヤミソール
職場には放送局が一人いる

東京都 井上 つよし

各停で行く夫婦旅五月晴れ
騙されて迷って見たい朧月
人生をパッチワークで見るテレビ
物捜し妻が捜せばすぐに出る

川崎市 大島 賛詩朗

やきもちが妻の言葉の棘になる
おふくろの味も売ってる縄のれん
よく喋る人が視線を気にしない
金婚へ子がさりげなく旅行券

静岡市 増田 扶美

輝いた新緑の香に朝動く
体調を崩し若葉の気をもらう
方言も消えてふるさと遠くなる
決断に目覚めの枕裏にする

横浜市 川島 良子

用心をしているうちは大丈夫
ケセラセラ時の流れに身をまかせ
夢にさえ出てきてくれず一周忌
仏さま亡姉元気にしてますか

横浜市 伊藤 ふみ

放し飼いにされて時間を金にする
横見れば満月共に坂登る
地下鉄で方向音痴鼻さかす
電子辞書軽々引いてすぐ忘れ

横浜市 巖田 かず枝

五十年じつと我慢の足の裏
顔の皺霧でも吹いてみようかな
ポケットに笑い袋を入れておく
母の日に元気を添えて贈ります

横浜市 石原 三郎

目も耳も悪いが口はまだ達者
男でも歳は伏せたいときがある
浄水器 人の心も通せたら
消しゴムで消しても跡は残される

横浜市 北沢 街湖

甘くみた風邪に踵を返される
物忘れつける葉が欲しくなり
永田町よりも夕餉が気にかかり
人生の伴侶に才女肩が凝り

横浜市 鈴江 純子

脱皮時逃がし蛹のままにいる
畳替えすこうし部屋が広がる
背景に記憶をたどる旅写真
花束に添えたカードが火をつけた

横浜市 長 島 亜希子

満開へ見納めと言う老母を連れ
先取りの薄着にカイロしのばせる
化粧して行こうか春の風が吹く
尾を振ってくれるからロボ犬を買おう

横浜市 金 森 徳 三

筈をまだかまだかと買わず待ち
別腹が始末している残りもの
連休を喉に刺さった骨と居る
塗装屋のセールルわが家ねらい打ち

藤沢市 妹 尾 安 子

ことばまでイ抜きラ抜きのダイエツト
乗ってから着くまでしゃべる女連れ
ゴキブリを逃がして妻にバカにされ
吊り橋を渡りネズミも出かせぎに

武蔵野市 亀 井 円 女

自分史は閉じ後はゆっくりゆっくりと
隠すまい皺はわたしの勲章だ
特大の笑い袋が自慢なり
金婚も済みやつと阿吽の仲となる

富山市 沢 江 和 代

毛並み良しレール外れることはない
ネコの名で架空口座がある我家
感情に逆らってばかりいる鏡
根っからの阪神ファンを飼っている

富山市 松 見 た え

濁る川女がやつと渡り切る
価値観の違うガッツで立ち上がる
前途ある少年の樹が揺れ動く
根性でぶつかる孫に負けたふり

京都市 清 水 英 旺

妻は留守レシピたよりの夕支度
雨の日はモーツアルトのぬくもりを
願いごとさい銭箱が順位づけ
百円の攻防フリーマーケット

和歌山市 上 地 登 美 代

青色でつながる空と海の仲
若者のモラルのなさを嘆く海
俺よりも先に死ぬなど言わず酒
毎日が試行錯誤の陽が沈む

和歌山市 土 屋 起 世 子

はしゃいでる卒寿の母の旅帰り
残業と言った貴方が縄のれん
あの世まで持って行きます嘘ひとつ
五月晴れ洗濯挟みで空掴む

和歌山市 橋 爪 佐 一

変人と言われ総理の支持を上げ
楽しみが増えるファッション初夏の風
連休に縁もゆかりもない暮し
神様と客に遺言春に逝く

和歌山県 中村 君枝

母の愛いつも四隅へ手が届く
城壁を守る不義理は欠かすまい
泣きばくろ私の武器として使う
潮時を掴みそこねた藁の鬱

和歌山県 村中 悦男

愚痴すてて見返る過去は美しい
相談を受けて一緒に迷い舟
田舎道青信号を待つ一人
衣替え去年の小銭鳴っている

香川県 松村 輝夫

欲望を少し残して腰伸ばす
金貯めて買う物がない不況風
二合でも過ぎるエンジンまだ動く
酒の量減らす代わりに薬飲む

香川県 原 賢

のん気だが要所は釘を打っておく
老いの知恵一滴までもしほり出す
放浪の旅に出たがる宵の影
人間の弱さがすぎる阿弥陀様

香川県 伊勢 八重子

閉ざされた心を開く鍵さがす
釜揚げのうどんに通の顔がある
木洩れ日の森林浴へ軽い靴
車座の隣気になる花むしろ

今治市 中村 好恵

贅沢の極み旅行の宇宙船
使う気になれば百万二百万
新車ばかり嫌に目につく行楽地
マスクミが乗っては来ない良い話

愛媛県 花岡 順子

マスクミが言うから本当かと思う
もう良いと思う帰りの靴を履く
積み立てたストレス満期近いよう
ごろ寝して専業主婦のストライキ

高知県 近森 功

白髪をいたわるように風薫る
血の絆もつれて切れた遺産分け
食通街回り回って田舎そば
千枚田ブルドーザーの餌となり

高知県 伊野部 和江

水鏡 我が身映して飛ぶ燕
辛い過去笑いの中で言える時
手に負えぬ事は神様任せです
縁結ぶ神が目に付く寺参り

南国市 小原 圭二

山勘の勝負本音は神頼み
仏壇にカーネーションを供える日
水澄んで魚の見えぬ農水路
雑草がどこかいじけた花をつけ

兵庫県 安達 厚

お互いのどじ笑い合う老いの日々
生き残りなのかと思う歳になり
誕生日母に感謝の日と思う
逝く前に母と妻とに勲一等

尼崎市 桑原 東園

母の日よだから私は食べる役
病人に恋が何より良い薬
ひた走る幸せ最高競走馬
古い傷向かい風呂び痛み出す

神戸市 木村 忠義

膳を見て揉める話の先送り
悔しさのあまりレモンの丸齧り
不意の客すぐに通せる部屋が無し
人のこと気にして自分けつまずく

姫路市 北条 てる代

ぶつかって本音で回る夫婦ごま
もつれ糸解けて会話も弾み出す
ささやかな幸せ米びつ一杯に
迷いぐせチャンス逃がしてまだひとり

岡山市 大森 純子

きぬぎぬの別れは知らぬメール愛
マスコミが政治世論をリードする
浸水は過去の結果の日本丸
野球好きこの遺伝子は父だろう

鳥取市 福永 ひかり

お楽にと言われて逆に肩が凝る
介護保険期待したのに苦が増えた
橋渡り切るまで強い風当たり
お名前のおの字に斜線して返す

鳥取市 田村 邦昭

乱れ髪心の彩を隠せない
よく妬いてしつかり拗ねて恋と言
煩惱を絶つたつもりが欲に負け
明るさに慣れて傷みに気づかない

鳥取県 鳥羽 直市

言い訳は嫌い明るく生き残る
普段着に着替えいつもの母となる
無職です銀行なんか用がない
細腕を頼りにみんなぶらさがる

鳥取県 小谷 孝美

沈黙が互いの腹をさぐりあう
ゆくゆくは娘のものになるダイヤ
平凡に飽きて冒険する一步
一言がきっかけ作る仲なおり

鳥取県 澤 裕子

群衆の中のひとりである安堵
子と孫をスパイにしている嫁姑
どうしてか訳も無いのに出る涙
より高く飛ぶ風待っているわだけ

鳥取県 河本 晴子

食欲が少し出たから医者へ行く
メンデルの法則ひとり自慢する
鮎一つなめて元氣を取り戻す
結局は煙たい者になる主張

鳥取県 橋谷 静江

愚痴聞いて丸く付き合う友がいる
頼られて知恵を貸してる祖母の役
春の野へ私を誘う花の数
几帳面すぎて仕事が捗らぬ

鳥取県 蔵本 悦子

しっかりと大地を踏んで生きている
なるほどなおまえも恋がしたかろう
人妻が笑うと月も丸くなる
跳べ跳べと五月の空が声かける

鳥取県 山岡 久枝

真っ青に海も静かな夏の顔
鮎が跳ね川にも初夏の訪れが
人並みの暮らしを願う親心
花好きが世話やりすぎて花枯らす

米子市 足立 由美子

悴せだと友に逢いたくなつてくる
白足すとやすらぎ色になつてくる
一歩ずつ確かな音で老いていく
リードすることも見込んでいる時計

松江市 松浦 登志子

向きあつて無言のままに飲むビール
タンポポの弾ける音に象の耳
うどん屋で南天の絵を肴にし
おしゃべりな南の風が通る道

松江市 三島 淞丘

ひと言で心晴れたり曇ったり
ほろ酔いの耳に優しい国訛り
頑固親父口も背中も丸くなり
此処までと匙投げられてから元氣

出雲市 川島 和歌子

初音聴く女一刻春の午後
チューリップ風にひらひら影落す
よく気付く気軽な嫁に助けられ
見えすいたお世辞にやはり裏がある

益田市 岡田 たけを

軽い軒の妻に安堵をして眠る
衣替えして鼻風邪を引いている
風呂で死ぬなと親切な嫁が言い
人情に触れ回り道して帰る

鳥根県 多々納 テル子

厨に立ち今日も感謝の音という
よろこびへ流れる涙汲みあげる
コデマリも旅の帰りを咲いて待つ
春眠へ蛙の合唱聞く枕

島根県 武 島 ちよえ

世の汚れ知らぬ若葉の生き生きと
えんびつの芯丸くなりほつとする

砂吐いて貝はしきりに話しかけ
かき捨てた恥を土産に持ち帰り

大阪府 野 田 栄 呼

空っぱの財布ばかりで吐息つく
よい姑の仮面重くてずり落ちる
仮面脱ぎ一挙変身翔び出そう
散る春を惜しみ新緑衣替え

大阪府 小 栢 こずえ

薫風にうれしい受賞わが自慢
仮面つけ紫外線より強くなる
波頭しぶきを上げて花と散る
いつまでも続くこの道生きる道

大阪府 中 村 叡 子

主婦の座を渡したいのに核家族
父母在す古里の田に水張られ
ほほえまし祖母がキムタク好きになり
秘め事をそつとしまつた住所録

大阪府 伴 洋 子

脇役に徹したタンポポ風になる
仕事の顔まだ引きずって縄のれん
ライバルと飲みたい夜もある仕事
仕事まで奪われ逃げる場所がない

大阪府 津 守 なぎさ

胃も腸もやつと快調旅ごころ
入道雲どっかり座る水しぶき
包み込む笑顔ライバルから学び
よれよれのガイドブックと午後の雨

枚方市 二 宮 紫 鳳

生き様が残してくれた父の恩
親不孝わびてメロンをお供えす
胎動を感じてからの母の顔
子ら巢立ち夢のぬけがら夫婦酒

柏原市 永 浜 加 津 子

爽やかな風にためらう計りごと
たらの芽の揚げもの一つ春体感
カタカナの新語辞典が仲間入り
花多彩きれいな色を着たくなる

高槻市 乙 倉 武 史

見ぬふりで他人横目で批判する
晩学の本気ノートは寿司詰めに
冗談を交え相手の腹探る
日々新たな余生楽しむ自分流

高槻市 生 田 義 一

宅急便急いで出れば隣の宛
御所の庭名残を惜しむ糸桜
湯の宿に親子三代揃う幸
古里の駅はなつかし国訛り

堺市 渡辺 さだを

治らない病と一生お友達
病む妻に無器用な手がリングゴむき
お腹の子動く嫁のはずむ声
方向音痴ホームレスから聞いている

吹田市 早川 棲世

国民が軽くて軽い政府なり
育児漫画ごときで孫が育てられ
連れが妻なので盛り場気楽なり
妻にもう本気というは死後のこと

吹田市 木下 敏子

血液をきれいにしたい料理メモ
運命と諦めている靴の紐
相性も趣味も合わせていく余生
写経する筆はまだまだ悟れない

大阪狭山市 矢野 梓

寝坊したつけが一日つきまとう
それ以上聞くのは困りますマイク
着もしない着物に風を入れておく
共通の秘密で馬が合う二人

東大阪市 田中 美弥子

かたくなな心を開くさとの風
うとまれて哀しみ募る母の胸
やんわりと言われた棘が突き刺さる
しわとシミ眺めて飽きぬ姫鏡

東大阪市 笠井 欣子

母さんが怒らぬようにチチンブイ
暇すぎて掃除機掃除する夫
連休の子守ストレス解きほぐす
七回忌お会いたようにほのほのと

羽曳野市 山本 たけし

木の根っ子趣味に加えてコレクション
自然との出会い楽しむひとり旅
逆鱗に触れて覚った身の迂闊
記憶にはないがテープにある記録

和泉市 横山 捷也

前歴は知らぬ貸農園の友
聞く人が無いふるさとが遠くなる
ウィークポイント少し狙いを外しとく
セールスに血液型を見破られ

八尾市 平川 幸枝

鏡見てあだ名のわたし呼んでみる
ペコチャンのあだ名で母も娘も同じ
大胆な砂文字を消す波の意地
視線にも温度があつて熱くなる

八尾市 山本 宏至

雑草も小さい恋の花咲かす
雨風のつらさ知らない貝割れ菜
春がきておしゃべり好きな庭になる
意地すててからよくのびる無精ひげ

青森県 富士トキ
仏様今日はうれしいニュースです

欲ばりが来世は花に舞う蝶に
老いの耳明るいニュース待つてます

秋田県 秋野 宏

環境のルール地球焦げ臭い
花日和 農が多忙の恨み節
五月の絵色はみどりで事足りる

横浜市 福田 由美子

主導権娘に渡るシヨツピング
糸通し勘が頼りになつてくる
念入りの化粧へ誰も気づかない

横浜市 吉田 裕峰

携帯が秘境の宿へ御伴する
捺印を曲げて反意を仄めかす
箱書きが茶碗に箔の化粧する

横浜市 平 達也

さて何を見せてくれるか今日の夢
生きたらただで感謝と子が諭す
恩人は妻だと気付く傘寿です

横浜市 布山 嘉信

出稼ぎの戻った窓に灯があかい
お人好し心の広い人にされ
泳いでも遡上かなわぬ鯉のぼり

横浜市 三村 八重子
ケアホール大きな声のチューリップ
繰り返す自慢話は太りだす
働いて来た顔してる再生紙

横浜市 秋元和可

この冬に備え手袋編みはじめ
パソコンもケイタイも無く筆無精
ご馳走になつて器も褒めておく

横浜市 芦田 鈴美

放牧の牛も仲間の側に寄り
忘れてた鉢がかれんな花をつけ
下積みを支えてくれた貯金箱

川口市 原 沢かね子

路地裏が消えてマンション立ち並ぶ
見積書ない入院を強いられる
掃除機をまああるく使う狭い家

日立市 加藤 権悟

減反を穀蔵虫の振る反旗
とぎじるの明日を労る茄子胡瓜
職人の釘が妥協を許さない

川崎市 小林 久美子

旅好きはマンション暮らし性に合
絆とはまさかの時に知らされる
単身で赴任夫婦が羽根伸ばす

新潟県 高野 不二

退職を老人会が待っている

ワープロも死語になる日が近そうだ

二本目はぬるいビールの栓を抜く

静岡県 中西 雅

有難うごめんなさいで生かされる

胎動に話しかけてるひとり言

雲に乗り彼に会いたし戻りたし

奈良県 江波 正純

人並みに苦の種かかえ生きている

たこ焼きはずっと前からまんまるい

おいしいと妻のオダテが腕磨く

和歌山市 宮本 三喜夫

古都の夜囃子舞妓と景気よく

おこしやす納涼床に京の夏

金のため地位も名誉も灰となり

和歌山市 前岡 健三郎

莫大な費用がかかる宇宙旅

サッチーは強いが弱いタイガース

警官の不祥事今日も社会面

和歌山市 永廣 昇太郎

眩しいな病院帰りの回り道

信じ合い目と目で話す共白髪

苦勞の字 倅とよむ妻の愛

和歌山市 根田 美子

正式に國中騒ぐ御懷妊

連休が終わってホッと普通の日

死んでから過ぎた夫と褒められる

和歌山市 今 一步

季節はずれ極暑の陽射し水癒す

カーテン替え風歓迎の支度する

口チャック念を押されて川へ捨て

和歌山市 吉田 比佐子

メモを張り輪ゴムも掛けた冷蔵庫

摘み草は戦前戦後旬の味

米を研ぐ仕合せ今日も噛み締める

和歌山市 芝 あつむ

平手打されて山椒が眼を覚ます

ちよびりと嫌味もこもる片笑窪

空とほけ弱みはみせぬ父の背

和歌山県 森下 順子

独り住む春を満たした冷蔵庫

おいしそうな百円市の春キャベツ

見てみない振りで保っている平和

兵庫縣 広瀬 房江

山ぶきの香りは亡母の便りかも

病室のボスの泪を見せまう

にっこりと今朝は機嫌のいいナース

兵庫県 岩本 美緒子

我流に生きても今は障りなし
察知よい甘え上手な犬と住み
幸運と今を笑ってゆとり置く

兵庫県 徳平 穂子

新緑の息吹もらって山路ゆく
薫風と戯れてみる五月晴れ
すれ違い瞳和んで朝の風

兵庫県 黒崎 美紗子

株相場ひと言助言福の神
信じよういつも笑顔の善人だ
ボランティア出会う人のお付き合

尼崎市 尾宮 弘治

故郷の家母逝き給い烏住む
なき母の植えた雛罌粟蕾めく
髪染めぬ孫にピアノを買わされる

姫路市 服部 一典

元気かと嫁のコールは朝七時
逢った日は鼻歌もでる万歩計
二人きりなれば無口な好きな人

篠山市 谷田 多美子

どの子にも思い出のある老母の膝
へそくりの場所を忘れて夜もすがら
気がつけば皺くちやでしたダイエツト

大阪市 中村 忠敬

麻葉犬 嗅覚鋭く悪を指す
わが鼻で賞味期限を判定す
自動ドアと思つてじつと立っている

大阪市 内海 綾乃

コンビニで二味三味すぐ揃う
定食を戴く店は決めてある
甘やかし自立出来ない子に育ち

大阪市 平井 露芳

耳鼻科でも内科と同じ風邪薬
ゴミ拾いする人も居るエベレスト
宇宙から大型ゴミが降るご時世

大阪市 浦田 綏子

お母上 結婚しましたEメール
パラサイトはた目に仲の良い親子
棄てて来た夢を集めて一里塚

大阪市 三浦 千津子

告白や二つ返事を待っている
私にまだ存在感のある名前
口に出る引つ掛かっていた過去の糸

大阪市 中井 正秀

早朝は信号無視の多い事
可愛いと言われるような老人に
後二日嬉し楽しい喜寿が来る

大阪市 中川 千都子

母の顔とり戻しつつ帰る道
恋でなくときめき否定できぬ仲
言い過ぎた言葉刺さって眠れない

大阪府 前田 忠子

ジェット機の翼かすめるおぼろ月
ツバメ飛ぶほっと安堵の初夏の宵
仕事継ぐ子の居る幸を噛みしめる

大阪府 東 文江

欲言わぬ今の生活好きだから
娘に電話 嫁と仲良くしてるから
新緑にひとときわ目立つ藤の花

大阪府 桑田 ゆきの

倒れそうでも倒れない案山子です
父さんの給料明細薄い紙
育毛剤塗って帽子を忘れない

大阪府 藤井 郁代

天の川七夕の日はへそを曲げ
栗の花ブンブン匂い夏が来る
梅雨空に洗濯物が溜息を

豊中市 みき わきみ

あと少し金の苦勞も気苦勞も
四苦八苦あれこれ我に当て嵌める
子育てが終わり喧嘩の種が尽き

豊中市 藤井 則彦

知り勘を筆算でするもどかしさ
不況でも家事のリストラありません
カラオケでやっと漢字の曲が出た

八尾市 鷺見 章

にがり川落花をのせて流れけり
連休も我がものならず病みており
湯上がりの肌にやさしい春の風

八尾市 中島 春江

どなたさんと言われて淋し母を見る
おしゃべりを聞いてやるのも見舞いです
マンネリの単細胞に塩胡椒

八尾市 與田 明

老いの愚痴 酒に溶かして酔って寝て
踏まないで雑草だって花が咲く
生きていく事実パソコン習ってる

八尾市 田中 トシエ

引越の隅に残して行く本音
懐の財布が酒の味を決め
暑氣払い手抜き料理の冷や奴

岸和田市 亀井 皎月

米を選ぶ豊かな国に住んでいる
口だけはとても元気に妻は古い
服を買う老妻若さ垣間見る

春の風 菜の花畑でたわむれる

吹田市 二宮 栄子

古希までを支えた足をほめてやる

物忘れ痴呆症ではないらしい

吹田市 木村 無禄

鍵一つ増やし我が家も自衛権

遠慮なく老いの二人へ夕月や

足音の妻を迎える定年後

枚方市 大昇 隆広

子のついでにパパをも叱るママ元氣

メルヘンの味付けしたい子の会話

心底は人の温もり欲しい街

高槻市 大崎 侑子

共稼ぎ休みの日には居留守さめ

母の香の瓶空なれど捨てられず

自転車乙女爽やか風薫る

堺市 大橋 錦

鯉のぼり不景気の風吸い込んで

嬉しくてランドセルまで踊ってる

我悩み友にうちあげ軽くなり

摂津市 望月 遊美

武力ムダ外交優先こそ平和

西田哲学物足らぬまま学徒征く

権力者敗けてヘンシーン好々爺

木の芽にも聞こえたらしい春の音

東大阪市 今岡 真人

I Tの早さ地球の裏からも

地震国いつ縁切れる春のうつ

富田林市 山原 昭水

薬局の主人の風邪が治らない

水羊かん食べたら怒ること忘れ

吞まされてたつぷり愚痴を聞かされる

羽曳野市 永田 章司

無理言える仲だと思ふ擦れ違い

レンジチン食通の客味を褒め

御陀仏の意味を知ってか真紀子節

泉佐野市 備後 三代子

釣具屋のすすめ上手に早釣られ

ばあちゃんは旨くないのか蚊もよらぬ

日にひとつ整理してゆく老い支度

河内長野市 杉谷 カズエ

日の長さ言うて何にもしていない

赤とんぼ流して車走り去る

モミの木が古い葉っぱをまき散らす

奈良市 田中 賢治

ゴルフ好き学会のため休みます

ずる休みそつと知らせるメール来る

長生きへ保険代わりのお賽銭

初対面 大和三山春霞

奈良県 古手川 光

歯の治療しつかりやって逝きました

ガン保険たっぷりもろた不幸せ

生駒市 小西 稔

不景気も桜と共に通り抜け

四季の花尋ねてたのし古都の庭

風さやか春の気配に香る梅

生駒市 飛 永 ふりこ

各停の駅新緑と握手する

なにげないしぐさに本音隠れてる

平行線つかず離れず和が保つ

岡山市 清水 金太郎

天国で仕事があるのか帰らない

人間が作って機械につかわれる

旧式の機械は父が直す役

倉敷市 撰 喜 子

うどんやのかまぼこ向こうすけて見え

トラブルはいつもの事とほっておく

トラブルを起しやすやすやお昼寝中

岡山県 土 居 ひでの

先生の陽気へみんな手を繋ぎ

蟹鍋へ出足が揃う姉の喜寿

手のひらの地図へあれこれ夢を盛る

賽銭が小さな鐘のように鳴る

雨がやむ修行が足りぬのでしようか

坊ちゃんとマドンナが逢うお手洗い

竹原市 正畑 半 覚

気の迷い若葉の風になだめられ

巧妙な舌で勝ち得た金の椅子

初夏の声小鳥と蛙の音楽祭

府中市 岩 本 雅 代

クラス会素足の頃の花が咲く

野良仕事後にまわしてバラ祭

やりなおす勇気をくれた通り雨

府中市 馬 場 利 子

今日も来ぬ憎い碁敵待ち焦がれ

要らぬ物浮世の義理で買う羽目に

業悲し老いても女身を焦がす

宇部市 高 山 清 子

姿勢から直せと孫とさす将棋

今のとこ異状はないと医師の声

蛇口から女の声がほとばしる

宇部市 中 田 忠 夫

平凡という幸せに気がつかず

生きざまの足跡無言でついてくる

はつきりと言えぬ訳あり口ごもる

高知県 百 田 幸

愛媛県 山之内 八重美

一言のごめんなさいを信じよう

ほめられてそれから意欲沸いてくる

夏を着るそつと覗いたウインドー

唐津市 岩崎 實

孫達の喜ぶ声や子どもの日

心地良き疲れとなりし氷水

悔いのない心に残る深いしわ

愛媛県 安野 案山子

イチローがベースボールの風となる

ポケットへ臍繰り入れたまま洗う

降りこめる雨を肴に昼の酒

愛媛県 宮本 末子

許されて許して溜る涙壺

潮時が無くて散れない造花かも

総裁を鮮度で決めた有権者

倉吉市 前田 喜美子

小手毬の優しく揺れて風誘う

梅の実がひしめき合って自己主張

失言もいわゆる本音いっただけ

鳥取県 岡村 孝明

過ぎし日へ旅のアルバム引き返す

長髪に絵筆にぎればよく似合う

終局へ善を重ねて罪返す

鳥取県 西 冲彰雄

長所だけ見える眼鏡で老いを生き

恵まれた暮し年金ある老後

いつも句俺は男と生きている

鳥取県 西 垣美知子

妻の留守何処か空気が動かない

人生を乗りつぎながら生きている

折りに触れきらり輝く義母だった

鳥取県 竹 信照彦

楽をするつもり趣味に噛みつかれ

玉の輿に乗らず歩いて来た嫁だ

万札を出すたび重くなる財布

鳥取県 竹 森富久江

ゆさぶりに堪えたほどよい根の長さ

まろやかな機微にとけてるお茶の味

窓ガラスがいて祭り通りすぎ

鳥取県 山下 節子

おふくろの料理毒味はいりません

人生を台無しにした嘘一つ

胸叩き任せておけと言った悔い

鳥取県 岡 嶋金子

この先は一日一善してくらす

我が日本愛しつづけて感謝する

武器をすて六〇億の無事ねがう

鳥取県 松川行男

風強し発想青い空へ消え

春野菜チヨツと植えたら五連休

丁重に休んでくれと月曜日

鳥取県 藤山弘子

犬といて会話も弾む散歩道

裏庭で季節を語る花野菜

休日は庭と畑と会話する

鳥取市 横田春名

姥捨ての山はきれいな施設です

電卓の速さ鈍って老いは来る

病む娘から花束届く母の日に

鳥取市 河田のり代

朝霧に忘れた過去を思い出す

束の間の恋が人生左右する

恋心何時も一緒に夫歩く

鳥取市 山口千代子

母の日に恩の雫の紅の花

歳のこと忘れて生きる新世紀

満員電車 豊かな尻で人を押す

鳥取市 谷岡清子

思い切り真心こめて太く書く

青空を五月我が世とこいのぼり

花作り心の穴を埋めつくす

鳥取市 近藤秋星

春うらら犬も退屈欠伸する

髪染めて八十歳はまだ若い

地獄行き極楽行きは辞退する

鳥取市 岡田信恵

ボランテニア愛を運んで燃えている

親切が崩れたままで許せない

五十肩重さを選びマイペース

鳥取市 宮脇道子

プールにも老いのパワーでおよぐ女

自転車で鼻歌うたうころげ坂

余命表自分だけには遠いもの

鳥取市 福島庸二

義理堅い友の文読み涙する

見たかったその瞬間に夢覚める

純白のドレスをまとい梨開花

鳥取市 西尾敬之介

害虫の蛹にスプレーかけてやる

これでもか老いの一徹押ししてゆく

いつの間に歳重ねている気は若い

鳥取市 加藤茶人

背を向けて寝ても夫婦という定め

アトムいつ見てもハミングする世代

疲れてる介護で殺す生あくび

鳥取市 山宮 愛恵

厨からハミングねぎも歌いだす

花園のお花に恋をするカメラ

紋白蝶 母の幻連れて舞う

米子市 小塩 智加恵

芽吹く山 山菜見つけ子に還る

ちぎり絵のかぶとで祝うこどもの日

三途の川渡る船賃まだ出来ぬ

鳥根県 毛利 幸

ちらほらと咲いてすぐ散る姥桜

春が好き私と蝶がランデブー

笑顔好き彼女の胸に住む私

鳥根県 福岡 博利

なら山の切符は捨てて高軒

八十路入り明鏡止水にほど遠く

妻好み茶系をいつも着せられる

川柳塔

(つづき)

弘前市 蒔 苗果 林

桜より若い人みな美しい

輪になれば桜の雨の歓迎会

無礼講に桜も知らぬ人一人

花便り桜に酔うて誤字ばかり

鳥根県 菅 田 かつ子

白髪のタンポポ風に誘われて

子も孫も出かけあなたとレモンティー

国会に見放されそう無人駅

鳥根県 持 田 多輝子

ざわざわとエゴがひしめく日のドラマ

解散もリストラもなく農に生き

気休めは読書でいやす老いの部屋

安来市 原 煩惱児

軽い嘘法螺で話を盛り上げる

鎌倉を急がぬ旅の人力車

山笑う僕もるんるん散歩道

松江市 福岡 芳 枝

さりげない言葉噂に乗せた春

涙ぼろり同じ女として判り

空威張りしてる男が透けて見え

出雲市 梅 ミツエ

大空を無事につばめが飛んで来た

地藏様桜花の下でよだれかけ

西見れば真つ赤な太陽また明日ね

出雲市 加藤 スズコ

雪かぶり耐えた球根花盛り

復興のきざしくぎ煮を運ぶ春

待ちわびた春だゆつたり風に会う

愛染帖

波多野五楽庵選

鳥取市 徳田ひろこ

一步でるたびに鱗の落ちる音

折鶴になつてあなたの港まで

尼崎市 春城 年代

許せないのに川は静かに流れている

川は匂うて遠いわたしを連れて来る

京都市 山本 磔

一筆啓上 何処に隠れているのだい

まだ脱皮出来ないのかと言う鏡

西宮市 奥田みつ子

雲速しまだ考えがまとまらぬ

歩いても歩いても追いつけぬ影

弘前市 斉藤 焔

人のため泣けるだなんてなあ野菊

白骨を拾う介護をするように

弘前市 高瀬 霜石

ぬるま湯に浸かると手相悪くなる

独立独立歩 妻もわたしも愛大も

和歌山市 福井 桂香

小面に焦がれひたすら瞳をとじる

逢うた日は胸のスイッチから嵐

西宮市 門谷たず子

一幕の終りにすこし蹴躓く

紅うすく引いてあなたの華になる

八尾市 村上ミツ子

弾込めて仕返しする気なさいと言う

手引きした右腕手持ちぶさたです

和歌山市 西山 幸

足枷がこんなに重いおんな坂

独り居て雨漏りの音聴いている

寝屋川市 江口 度

賛成の二字が見えないブラカード

夫婦とや山菜のややほろ苦さ

羽曳野市 吉川 寿美

おくり仮名何とやさしいなさけだな

裏の裏読んでしまった偏頭痛

弘前市 宮崎ヒサ子

春の空へ振った両手が止まらない

踏まれ踏まれて少しは丸くなる小石

愛知県 早川 盛夫

狼になつて見ようか血が騒ぐ

悪人の素質もあつてよく眠り

砂川市 大橋 政良

唯我独尊 青天井の下にいる

化けの皮剥けて昔の顔が出る

美祿市 安平次弘道

鳩尾に症候群がぶら下がり

職退いて挑戦状が来なくなる

四条畷市 吉岡 修

ひとときを狂つて妻の手に戻る

善人の顔で閻魔に会う予習

川崎市 和泉あかり

幸せにするとビビツときたことば

燃えつきた艾が立往生をする

弘前市 一戸 ツネ

靈感の有無を信じるロゼワイン

五月病去つて年中病んでいる

横浜市 三村八重子

目に青葉独りになる日近くなる

鳥取県 西原 艶子

故郷の音頭でどうじゃ皆の衆

三田市 北野 哲男

叩かれた時は仏になつてやる

鳥取市 夏目 健一

歩き疲れて十指まともな爪がない

寝屋川市 森 茜

渋滞が続く女の曲り角

和歌山市 川上 大輪

花道ははるか女の夢芝居

岡山県 矢内寿恵子

引き際に一言投げてから乱に

米子市 白根 ふみ

弁解は止しなと風がやわらかい

岡山県 山本 玉恵

ハンカチの白さに油断してしまふ

大阪市 前 たもつ

雑兵の靴矢印をはずさない

松原市 玉置 重人

斜に生きて貧乏神と手が切れぬ

綾部市 藤田 芳郎

香芝市 大内 朝子
あじさいのころはきつとまんまるい

尼崎市 春城 武庫坊
桐下駄も利休も土の香を忘れ

出雲市 岡 あきら
要領の悪い喜劇がまだ続く

富田田市 池 森子
絵はがきの薔薇と草書の深い仲

西宮市 牧測 富喜子
括弧閉ず急にしたしさ増してくる

吹田市 山本 希久子
命さらさら つるりとむけた茹で卵

鳥取県 さえきやえ
恥かいてまだ人間がやめられぬ

鳥取県 土橋 螢
杜若しずかに鳥になってゆく

鳥取県 上田 俊路
ゲームセット葬送曲をひとり聞く

米子市 林 瑞枝
平手打ちの文と向き合う夏の縁

藤井寺市 中島 志洋
偽りを書く鉛筆の芯が折れ

和歌山県 中後 清史
賛成の方へ傾く安楽死

香川県 木村 あきら
紫の楸紗で思惑やってくる

米子市 青戸 田鶴
ひと彩でない人生にあこがれた

鳥取県 小西 雄々
軸足を義理人情の上に乗せ

竹原市 正畑 半寛
ふつきれたようだ瞳が澄んでいる

弘前市 高橋 岳水
明日もまた逢う約束のサウナラ

自治市 塩路 よしみ
忘却ははるかな亡母の桜餅

香川県 松村 輝夫
一本道 何処まで続く妻を看る

松江市 川本 畔
スイートピー軽い謀反を企てる

西宮市 西口 いわゑ
人形が意見を言うて疎まれる

弘前市 相馬 銀波
点眼をして一日を締め括る

八尾市 高橋 夕花
答がないからひたすら鶴を折る

高槻市 乙倉 武史
大手広げる太陽に抱かれよう

弘前市 櫻庭 順風
はたはたとお城を匿す花いかに

東京都 播本 充子
白紙ひらひら良心を売りにくる

海南市 三宅 保州
先に目を逸らしてしまうのは男

大阪市 渡部 さと美
話したい本音やんわり水を向け

富田田市 片岡 智恵子
善人を続けながらの胃のいたみ

米子市 足立 由美子
柳行李の中で眠っている昔

伊丹市 櫻谷 郁子
封筒にメの字書いて思い絶つ

和歌山県 村中 悦男
今日の無事浴槽の湯はあふれ出る

藤井寺市 太田 扶美代
ポケットの中から落ちた独り言

大阪府 初山 隆盛
面接の椅子深からず浅からず

唐津市 仁部 四郎
相手の目のぞいて一歩退いてみる

唐津市 坂本 兵八郎
箱の中娘は何処へ行つたやら

岡山市 藤原 一平
決心がついて座ぶとん裏返す

大阪府 澤田 和重
お世話になりますとポストに頭さげ

大阪市 三浦 千津子
決断を少し鈍らす凹レンズ

羽曳野市 森田 四三郎
譲られた席のためらうしサイズ

尼崎市 田辺 鹿太
活火山らしいおんなと酒を飲む

鳥取市 岸本 宏章
妥協案すっかりわさび抜けている

寝屋川市 岸野 あやめ
ホームレス英語朝日を音読し

吹田市 早川 棲世
人間の残滓引越車にあふれ

米子市 光井 玲子
父の地図四角四面を捨てきれぬ

大阪市 板東 倫子
友情と言う名のもとで共倒れ

鳥取県 石谷美恵子
いつの日か友になりたい敵がいる

倉吉市 山中 康子
タイミング外して粹のそとにいる

大和郡山田市 坊農 柳弘
しとしとと疑心暗鬼の菜種梅雨

青森市 漆戸凡々子
ためらわず美人の傍に座る歳

鳥取市 植田 一京
大物を狙い討ち死にしたらしい

横浜市 清水 潮華
弱り目に祟り目 虫歯疼き出す

西宮市 井上 松煙
煩惱がほどよくあつて老いられず

吹田市 石原 靖巳
良心が近頃横を向きたがる

羽曳野市 徳山みつこ
なんだ坂こんな坂へと握り飯

宇都部市 平田 実男
先生と言われる馬鹿になりきろう

八尾市 井尻 民
こぼれ陽の一つのケジメ抱いて行く

鳥取県 田村きみ子
傷つかぬように噂を切りかえる

鳥取県 岩崎みさ江
お月さまにもう帰れない白うさぎ

鳥取県 土橋はるお
死んでから階段降りるのは怖い

尼崎市 長浜 澄子
口惜しさを口に出したら負けになる

米子市 政岡日枝子
投げたボールの数を忘れてしまつてる

横浜市 川島 良子
緊張の糸がほどけて蹴つまずく

藤沢市 妹尾 安子
急坂に挑んで膝に笑われる

枚方市 海老池 洋
削除キー押したいようなるさ型

弘前市 福士 慕情
不器用に運命線走る貨車

出雲市 園山多賀子
少しづつ風が優しくなる予感

愛媛県 花岡 順子
吐き出せぬままストレスを溜めている

和歌山市 福本 英子
すぐ切れる子に育てたのもわたし

横浜市 芦田 鈴美
白票に託す無言の意思表示

和歌山市 青枝 鉄治
低く咲く桜の下の遍路さん

横浜市 石原 三郎
満開で粹な別れの田舎駅

唐津市 宗 水笑
石楠花寺人に揉まれて帰りけり

川崎市 小林久美子
ぬかるみを選んで歩く鬱の午後

和泉市 西岡 洛酔
B面の妻は陽気で茶目つ気で

和歌山市 田中 みね
あれこれと悩み出したら切りがない

熊本県 高野 宵草
またひとつ智慧をもらつて出る理髪

寝屋川市 太田とし子
お名前と顔とくらべて今日は

池田市 栗田 久子
能書きを捨てて自分をありのまま

豊中市 田中 正坊
生きるとは一合で打つ句読点

出雲市 石倉美佐子
雨の鬱こむらがえりが酷くなる

今治市 月原 宵明
怒つたり笑つたり携帯電話行く

横浜市 近藤 道子
羽ばたきを終えた翼がたためない

鳥取市 春木圭一郎
妻や子へ弱味もたまに見せておく

横浜市 山下 省子
いい人になつてもお金貯まらない

鳥取市 近藤 秋星
虚しいね死を待つだけという老いは

京都市 都倉 求芽
油断召さるな花道にさえ落し穴

黒石市 相馬 一花
ウグイスが自殺したのかまだ来ない

大和高田市 鍛原 千里
淋しさへひとりよがりのコンパクト

金井文秋

東野大八

金井文秋(本名清二郎)、明治44年(一九一一年)九月二日、大阪市生まれ。平成十三年

一月十九日、肝臓癌のため逝去。享年91歳。

家は代々、チャキチャキの書籍商で、物心ついた時はホンヤになっていた。新刊と古本のチャンポンの商いが本筋。「古くなると商いの代物を古本の方へ回すので便利です」というのが口癖だったらしい。生野区ではチョイと知られた本屋で、一人きりで店を切り回していた。

昭和37年1月号の『川柳雑誌』に「週刊誌あれこれ」を菊判の一頁半にわたって書きたいことを存分に書いた。余程、『週刊誌』がアタマへきてのことらしい。その中に自作の川柳もふんだんにまぶしている。

初めだけ全集物のよく汚れ 文秋

本屋の蔵書にあれば売れるつもり

暖冬に売り残さない値をきめる

一寸した噂実話にもう書かれ

これだけの本に独り寝起こされる

これだけの本や表紙はまけておく

いい春画はとけばいいのに書き添える

のほんんと春画の本は置いてないか

本のことを書いておれば句はキリもない。

仰山おまつせーといたいぐらいである。

路郎先生の『名句と難句』という書割に

二、三度抜けてるのを見ると、たまには名

句らしきものを作っていたらしい。それに

しても週刊誌の売れ行きのすさまじさには相

当参っていたとみえる。

「道を歩いていても、電車に乗っても、週刊誌をもっている人にならずに出会ふ。なぜこんなに週刊誌が一般大衆に普及されたのだろうか。それにはいろいろの理由があろうが、今から数年前、全国に貸本ブームが起こった。一冊の雑誌を読むのに保証金が一文も要らないというのがその理由の第一で、それはよい内職になるとマスコミまで騒ぎ出した」(昭和37年1月号『川柳雑誌』金井文秋)。

これが一つのキッカケであつたらしい。うらみつらみを地で行く文秋は、この件については、相当量の原稿紙を費やしている。

「そこで出版業者は、貸本を借りるような手軽な値段で買える雑誌を考えたのは週刊誌である。週刊誌はこれではじめてではなく、『サンデー毎日』や『週刊朝日』などは昔からあつたが、言わば新聞の分身で、読者層が限られていた。それが雑誌出版業者の出現で、一段と活気をおびてきた。

売れるとなると、すぐマネをしたがるのが日本人で、われもわれもと乗り出した。新聞・雑誌はもとより、月刊誌・週刊誌に乗りかえるやら、三文文士のグループまで週刊誌に乗り出すという騒ぎ。現在では総評までが週刊誌を出している。

週刊誌に力を入れるのにはもう一つの狙い

がある。一般雑誌だとお客に売ったものがまた古本屋へ回る。屑屋の集めたものでも業者が集めてまた古本屋へ回る。つまり形のある限り何回も売られることになり、貸し本とあまり変らない。週刊誌の方は一度、屑屋に売られると古本屋には還らない。袋にされるか、製紙工場へ逆戻りするくらいのものだ。それにしても全週刊誌からみれば知れたもので、何人も人の手にわたらない。雑誌の持つ宿命打關に成功したといえるだろう」(同)。

かくの如く文秋の週刊誌へのうらみつらみはただごとではなく、本屋なりせば：の慨嘆を久しくして余りある。

これから文秋の週刊誌をタネにした怨嗟の数々は山を成して『川柳雑誌』に溢れ返っていったというわけだが、これはやはりその日暮しの小売本屋の宿命であるかもしれない。少々クドクとなるが、小売業者金井書店のささやかながらのぐちもきいてやつてほしい。「一家揃って週刊誌党もある。テレビの合間にちよつと見るには手頃なのだろう。」

週刊誌また子供からリレーされ 万女
一家みな楽しめる週刊誌ならよいが、いかがわしいものも時々ある。

新聞で言えない事を週刊誌
週刊誌女性心理をかきたてる

嘉次
桃村

いわゆる〇〇実話とか、〇〇記事とかと称する暴露ものである。これも

嘘ばかり書いて実話の本を出し 文秋
と割り切っておればよいのだが、

週刊誌本当にしてる女の子 青風

のようにそのまま受け取る人もかなり多いようだ。都会より農村の方の人が純粹なのだ。だから売り出しの俳優等がウワサをもとにしてスキャンダルでも書きたてられるとなると、致命傷になることさえある。その殺し屋とか、ゴロツキ記者とかいわれる人種が都会にはひしめいているのだ。あな怖ろしきことかな。

文秋が週刊誌を悪しざまに罵っているのは、この商売の道で相当痛手を蒙っていたらしいのである。そのせいか、この稿では、エンエンと週刊誌よ、くたばれ式の悪口をどつさりとして書いている。この悪口はあと幾らでも続いていくのである。ちと長いが拝借しておく。

「週刊誌の本質かも知れないが、退屈しものに読むように出来ていて、スパー族好みのもので、中年向きのものがよく売れる。年配者が読めば、エロも程よき清涼剤になるが、不良学生等が読むから困りものだ。」

週刊誌はかり読んで不合格 平吉

時事問題をとりあげたり、まじめなことを書いたものはあまり売れず、つまらないものが横行する。売つてる方も嘆かわしいと思つているくらいだから、これすなわち悪貨が良貨を駆逐するというグレシャムの法則のようなものだ。

週刊誌にもグレシャムを知る嘆き 天悟空
売らんかなの週刊誌だから、ニュースには敏感である。一番狙われるのはスターだ。

タフガイの石原裕次郎や、猫(有馬稲子)とキンギョ(錦之助)の結婚話もアツと言つ間に売り切れ。だが正田美智子と皇太子の結婚ニュースは正に超スター級で、ニュース性は一切傾かず、堂々正面を押し切つたものだ」(同)。

金井文秋は要するに週刊誌ブームがアタマへきて、とうとう菊判の『川柳雑誌』の紙面を一頁半も埋めてしまったが、しがない一小売業者のやつかみ、そねみにしてもちとどり上げ方が大仰であったことは疑いないが、そこにはしがない一小売業者としての、この人の人柄からする嘆きがかがいとれるわけである。少々コキ下ろし過ぎたかな。

▼次号は「北 勝美」

誹風柳多留二四篇研究 31

金を貰ふにつき嫌がついて来る 一四四

橋本 贊。本末転倒。

清・佐藤 贊。

245 もし旦那旦那と四ツ手かつちかち

大野 かちかちは、堅い物がぶつかってたてる音を表わす語。規則的に、また軽く打ち合う音火打ち石や拍子木の音、時計の秒針が時を刻む音などということが多い。(日国)

四ツ手駕籠といえは吉原行の乗り物として詠まれている句が多い。本句も吉原行の客と見込んで、かごかきが旦那くんと声を掛けているところと解した。

「かつちかち」は夜警の拍子木の音であると思う。吉原と結びつけると時刻としては四つが適当であろう。

半鐘の下で四手にひらり乗 傍一四七

あぶれ駕かね四つ迄八見世をはり 四三

四ツ手駕すてかねの内直がきまり 一〇三六

大野 贊。「かつちかち」が今一つ落ち着かぬ。

大野 贊。なれど「かちかち」を点景の拍手木とするには無理がある。これは「がちがち」の濁点略ではあるまいか。

がちがちあくせくするさま。がちがち。

242 盗人の目に花のさく土用干

大野 土用干でたくさんの着物や武具などを並べているのを見ると、盗人の目にはいい鴨だと見えるのである。花の咲くという語から華やかな着物の虫干しが想定される。

一日は春めいてくる土用干 六二六

細紐の足らぬは嫁の手柄なり 二七三

小栗 贊。「目に花の咲く」は成句のように思えるがわからず。

清・佐藤 贊。

243 ばいやつてはしごをあがる大一座

大野 大一座の登楼で、二階への梯子をわれ先にと上がる。早く行つたからよい遊女にあ

たるわけではないが、やはり心がせくのであろうか。

追々に来るぞと上がる大一座 明五義五

盃で運の定まる大一座 一〇二一

どやくと来て昼三を取残し 天五松一

清・佐藤 贊。

244 娘が付で貰ひてなし百兩

大野 持參嫁の句。持參嫁といえは、婚家へ相当の持參金を持って行くので、容貌の醜悪な女を意味することは当然である。持參金の百兩という金はほしいが、不細工な娘が付いて来ては貰いたくない。

是は百兩と申嫁に候

金ばかりなれ八だれでもるふ也 一七七

玉一

(「江戸語の辞典」)

粕谷 あぶれ駕籠の句ではないでしようか。夜中に人が通りかかると声をかけて火をつける。その火をつける音が「かつちかち」ではないでしようか。

清 「かつちかち」について、もう一つ意見を追加。客に声をかけながら、息杖を鳴らす。佐藤 清説賛。息杖の音、江戸小唄にあり。

246 母門トで大腹立てござるそよ

大野 母親が門口で待っていて、朝帰りのどら息子に対して、「親父が怒っている」と言っている句。大腹から親父の怒りも並大抵ではない。

朝帰りの母のかぶりで横へ切れ 四三〇
朝帰り裏へ廻れと母小声切れ 四二二
朝帰それ親父がおどされる 一一二

清・佐藤 賛。

247 徳を取りより名を取った八高尾

大野 「名を取るより徳を取れ」名声を博すより、実利を得るほうがよい。(「日国」)

一般的には「名を取るより徳を取れ」ということになるが、三浦屋高尾には島田重三郎

という情人がいて、仙台侯伊達綱宗に身請けをされたが意に従わないので、大川の三つ又で切り殺されたといわれる。

大名に身請けされるといことは優雅な生活ができるし、たいへん得なことであるが、好きでない大名に身請けされるを潔しとしない高尾は名をのこすことになった。

むよくの全盛まつせへ名をのこし 二一三

浅黄羽二重を振ったで名が高し 二五四
清・佐藤 賛。

248 中秋の頃大どらを愚息うち

小栗 中秋は陰曆八月の異称。吉原では、この月は朔日の「八朔」と十五日の「月見」の紋日があり、これを両方仕舞うと大散財になる。その「大ドラ」を馬鹿息子が打ったといふのである。

句意はそれだけのことだが、「中秋」(拾遺では「仲カ秋」「愚息」の語が、寺子屋のテキストとしておなじみである「今川状」冒頭の「今川了俊愚息中秋制詞条々」を踏まえているところがミソなのだろう。

一ト月に風月をくふいたし事 十五九
八月ハビどひついたち十五日 二・八・五
仲秋はどらに実の入る時分也 二〇二

清・佐藤 賛。

249 よし原も市の仕込に文をかき

小栗 ここで「市」は、浅草の「年の市」であろう。年の市は十二月十七日に浅草寺界隈で開かれた市で、「新年の儲けとて注連飾りの具、庖厨の雑器破魔弓手鞠羽子板等の手遊び、其餘種々の祝器をならべ」(「東都歳事記」)商売をした。浅草寺周辺は大変な人出で、つれて「此日吉原の賑ひいふも更なり」(同)というのも当然の成り行きであつたらう。

主題句は、吉原の遊女たちが年越しの金を稼ぐための方策として、なじみの客たちに「年の市のついでに必ず来ておくれ」という文を出すのを、市の商売になぞられて「仕込み」と表現したもの。「市の商人が当日の商売の為に仕込みをすると同じように、吉原も当日の商売の為に仕込みとして文を書く」という意味。

おしつめた文八市様御もとへ 安七智四
橋本 賛。「年の市」は他所でもあつたが、浅草寺が最も有名。

なつかしくゆかしくそして金と書

清・佐藤 賛。

尚香のむ

西出楓楽選

生年月日言う時ちよつと身構える

妻というでかいぎぶとん外される

アメリカのくしゃみで咲いた花水木

モナリザにほほ笑みかえす春の午後

いまはもう余生の風と戯れる

豆の木を一杯植えておく未来

長い坂 後歩きもたまにする

よく出来た人の話がつまらない

花が笑うわたしも笑う散歩道

視野すこし変えると風も味方する

仏さまの分も数えて切るケーキ

忘れること覚えてからは楽になる

忘れねば次のハードル越えられぬ

向き合うとさむい言葉を吐く鏡

小走りの女に続く影がない

満月に女心が満ちてくる

側においてあげねば駄目な人という

行く末を想う儂い影法師

惜敗の涙へ夕日大き過ぎ

和歌山県 森下 順子

八尾市 村上ミツ子

西宮市 牧淵富喜子

八尾市 井尻 民

尼崎市 春城 年代

岡山県 矢内寿恵子

藤井寺市 太田扶美代

寝屋川市 籠島 恵子

西宮市 西口いわゑ

尼崎市 長浜 澄子

和歌山県 古久保和子

大阪市 神夏磯典子

東大阪市 田中美弥子

和歌山県 西山 幸

出雲市 園山多賀子

高知市 小川てるみ

今治市 塩路よしみ

和歌山県 山口三千子

大阪市 三浦千津子

戦中の飢えをしのいだお針箱

補聴器を取れば世の中丸くなり

さりげなく話し核心には触れず

試着室までは似合っていたはずが

病窓に五月の空が青すぎる

投げ捨てた言葉勝手に歩き出す

大低は許せそうです春うらら

横顔がきれいな人に嫉妬する

ギア変えて登る六十路のきつい坂

女の荷物 預けられないものがある

煽られているベラベラな自尊心

合わせたい歩幅へ息が切れてくる

もめ事を入れる袋が綻びる

千羽目の折鶴抱いていく檻

あらこれは尚香の花独り言

常識に風穴あける鼻ピアス

散り尽すまでは掃かずにながめてる

美しい誤解を入れる冷凍庫

人知れず流す涙は懐に

何着て行こう昨日六月 今日四月

取り扱ひ注意小さな夢の箱

一笑にされた言葉は枯れやすい

爪切って過ぎたることは忘れよう

我執みせちぎれて行った雲ひとつ

雑木林は嘘がなくても生きらるる

菜の花に道聞いている揚羽蝶

鳥取市 福田 登美

弘前市 一戸 ツネ

鳥取県 西原 艶子

あきる野市 佐藤 季穎

大和高田市 鍛原 千里

島根県 伊藤 寿美

弘前市 宮崎ヒサ子

池田市 栗田 久子

和歌山県 上地登美代

堺市 志田 千代

富田林市 中井 アキ

和歌山県 桜井 千秀

倉吉市 米田 幸子

大阪市 川久保睦子

横浜市 保田 絹子

横浜市 清水 潮華

横浜市 長島亜希子

羽曳野市 徳山みつこ

羽曳野市 吉川 寿美

大阪市 本間満津子

吹田市 山本希久子

鳥取県 田村きみ子

鳥取県 植田 一京

富田林市 片岡智恵子

米子市 政岡日枝子

伊丹市 榎谷 郁子

グレーブの黄よ妹がまた入院す
満月のその後は聞かぬふりをする
試着室 女は服と勝負する

花束を渡す役にも服が要り

逢つてきてみどりの余韻したたらせ

新聞が届くと朝が走りだす

紅をさす命に少し色をつけ

日をおいてジョークの毒が回りだす

幸せが待っていないような向こう岸

クラス会セーラー服の顔になる

明日の米無くとも心売らぬ意地

褒めないで下さいすぐに染まるから

桐の花やわい男を近づけぬ

長袖に躊躇い疵を隠す夏

セーターもまだ仕舞われぬ雨の冷え

傷跡が未だに痛い言葉の矢

絶世の美女の回りが揉めている

このままをお守り下さい花の寺

取敢えず今日は笑顔を振りまこう

片付けてしまうと何も出来ぬ部屋

涼風の森で揺り籠漕いでいる

タイエット決意させてる試着室

いつの間に爪がのびてた忙しさ

夢描く期待はずれを覚悟して

母の手の温み欲しくて駄々こねる

やさしさに心の棘がぬけていく

西宮市 門谷たず子

和歌山市 福本 英子

香川県 池内かおり

横浜市 福田由美子

奈良県 渡辺 富子

鳥取市 録沢 風花

西宮市 奥田みつ子

鳥取県 石谷美恵子

三田市 久保田千代

川崎市 和泉あかり

箕面市 出口セツ子

八尾市 生嶋ますみ

和歌山市 福井 桂香

町田市 土田今日子

今治市 野村 清美

岡山県 富坂 志重

鳥取市 永原 昌鼓

八尾市 高橋 夕花

和歌山市 吉村さち子

藤井寺市 鴨谷瑠美子

米子市 林 瑞枝

横浜市 芦田 鈴美

横浜市 三村八重子

岸和田市 池田寿美子

横浜市 田中 笑子

横浜市 近藤 道子

信号無視 地獄の釜の口が開く

コウノトリ隠れんぼして眠つてた

愛犬とテキ分けあつて誕生日

腕みがき頭を低く下げている

ときめきの恋は故郷に置いたまま

花の名も覚えられずに植える鉢

しぶちんが孫のおねだりには弱い

指呼点検 三回やつて旅に出る

度忘れの中味夫に通じてる

義理捨てる心さびしい老いの風

染な方ばかり選んで生きている

添えられた箸がうれしいフルコース

二代目が継いで番頭使い捨て

寮屋川市 坂上 高栄

松江市 安食 友子

大阪市 鈴木トヨ子

倉吉市 山中 康子

鳥取県 西川 和子

尼崎市 内田美也子

和歌山市 玉置 当代

鳥取県 岩崎みさ江

熊本県 岩切 康子

熊本県 永田 俊子

愛媛県 花岡 順子

藤沢市 妹尾 安子

大阪市 板東 倫子

順子さんの句―人間は誰でも公平に一つずつ歳をとつてゆく

のだが、とり方に多少上手下手があるようだ。それを相手に評

価される怖さで身構えるのだらうか。「ちよつと」の使い方が

適切で心の機微が捉えられている。ミツ子さんの句―長年つれ

添つた夫と死別された悲しみの大きさに胸を打たれる。「でか

いざぶとん」というユーモラスな言葉を使って、つらい気持を

はぐらかそうとして居られることが、読み手に伝わってくる。

川柳が少しでも救いになるよう、祈るばかりである。富喜子さ

んの句―合衆国のワシントン、ポトマック河の桜と交換に送ら

れた花水木は、春を待っていつせいに(花と言われているのは

苞なのだが)花開く。そのさまをアメリカのくしやみとイメー

ジした作者の感性に文句なく敬服した。民さんの句―様々に言

われているモナリザの微笑だが、春の午後は理屈抜きで、同じ

微笑を返してしまふやさしさがある。心安らぐ句。

秀句鑑賞

同人吟 尼 れいじ

— 6月号から

妥協ざらにあちこちで火傷する

大石 あすなろ

簡単に妥協するのも嫌ですが、時には早く妥協して前へ進まねばならぬ時もあります。あまり火傷しないために。

啄木の母より軽くなって来た

矢内 寿恵子

「母を背負いてそのあまり」、それでも啄木よりずっと長生きしたのですから、きんさんごんさんともきつと軽かったはず。それであれだけ長生きされました。きつと貴方も長生きでしょう。

穏やかな瀬戸ゆるがせた大ナマズ

藤解 静風

阪神淡路大震災にはじまり、最近また地震が続きます。鳥取の時、五十数年振りに当方もゆれました。あちこちにまだまだ大ナマズがいるのでしよう。

修羅いくたび男は海に立ち向かい

安平次 弘道

これが男の宿命でしょうか。大荒れでなくとも大修羅場は何時でもやって来ます。

人並みに触れて楽しい花の土手

堀江 正朗

今年初めて隣の夫婦に誘われて木次土手へ

夫婦坂 晴 時々は暴風雨

西口 いわゑ

晴ばかりというわけにはいかないでしょう。曇りもあれば雨の日あり、時には暴風の時。それで続いて行く夫婦道でしょう。

長いこと論吉を泊めて上げられぬ

瀧井 勝

家で泊まられなくても、銀行と言うホテルで貴方名義で、沢山の論吉さんが泊まっておられます。時々は散歩に連れて出てあげてください。

老人手帳十年前の写真貼る

銭山 昌枝

何時までも女は女です。若く見たいのは当然の事も知れません。それでこそ若々しく暮らせませす。

小さくとも良し小回りのきくボディー

宮本 かりん

小回りのきく方が何かと便利かも知れません。大安売りにも何時の間にか最前列に。

こめかみの奥に潜んでいるマグマ

高瀬 霜石

私もマグマを三つ四つかかえて生きています。それを爆発させぬよう、堪忍袋の緒をしつかり握りしめ、日々穏やかにと心掛けています。作者もきつとそうだと思います。

少子化へ悩むメダカの学校も

平田 実男

最近、廃校や統合の話をよくニュースで見ます。メダカの学校もそんなんでしょうか。子供の頃はこっちの小川、あっちの小川どこにでも見られたメダカです。最近めつきり見かけなくなりました。宇部市でもそんなんでしょうか。

夜桜見に出掛けました。あんなに素晴らしい夜桜ははじめてで、感動しました。また、ひとの多さにびびりして帰りました。

欲がなくわさびの抜けた顔になる

岸本孝子

わさびの抜けた顔とはいったいどんな顔でしょう。きつと、私もわさびも辛子も抜けた顔ではないかと、思わず鏡を見てしまいました。欲は人一倍あるのですが。

ふるさとの土の温もり知る裸足

奥谷彩子

言われれば裸足になるのは家の中だけ。土の温もりもすっかり忘れていました。近いうち晴れた日に思いきり裸足になり、土の温もりを感じたく思います。

友達と比べてしまつ頭と齒

新家完司

ああそうか。完司さんは私と会うたび、俺が勝つてると安心されていたのですネ。カーラジオで聞くと、三ヶ月でふさふさになる薬を通信販売しています。そろそろ試さねばと言つ気になります。

雷がほくそ笑んでるへそルック

青枝鉄治

笑んでるのは雷ばかりではありません。た

まには苦虫をかんでるおじさんもいるでしょうが、大かたの男性はニヤニヤ喜んでいる事でしょう。

冷蔵庫の隅に残っていた余罪

川上大輪

我家の冷蔵庫も、徴役三年執行猶予二年位です。いやいや余罪がまだまだあるかも知れません。そうなるも無期徴役が島流しか。言う事を聞きそうにありません。

虚無僧になりたい雑事多過ぎる

酒井勇太郎

この不況の中仕事より雑事が多く、保護司もやめ何々委員もやめ、それでも雑事がつきまといまふ。川柳もあの会この会と多忙をきわめます。でも川柳会はやつぱり楽しいです。

致死量の酒を愛して病んでいる

高田美代子

どきつとしました。私も致死量の酒を毎日飲んでます。柳人からも「身体大丈夫ですか、酒はひかえ目に」と、うるさい位気を遣つてもらい、有難く感謝している毎日です。柳人ならばこそ……。

小骨一本折れて軟禁される春

西出楓楽

軟禁されていらつしやつたとは知りません

でした。私も妻や姉妹から、病院で検査をうけられうけれど、うるさく言われますが、一生軟禁されそうで行きません。

不況解く方程式が見つからぬ

村上玄也

誰か解いてくれる人がいないんでしょうか。一日も早くそんな人が現われるのを、首を長くして待っています。

傘を持つ右手に軽い罪がある

山海友照

右手は軽い罪も作れば、幸せを与える事もあるでしょう。右左の手足それぞれ、役目はたしているのです。

朝焼けの空僕だけの美術館

岡あきら

朝焼けをとんと見なくなつた私には、羨ましい限りです。僕だけの美術館とは、思わずうなつてしまいました。此の人の感性にただただおどろくばかりです。

九十六歳聞けば何でもよう食べる

渡部さと美

出雲にも柳人で九十の女性がおられます。よく一緒に出掛けますが、元気な事にびびりしています。食欲も私よりずっとあり、それがやはり長生きの秘訣かなと思つています。

薄 い

後藤早智選



羽衣が舞いおりそうな春の風
 薄化粧心にもして出かけます
 老いの身にほどよい五月うすくもり
 簡単にけそう薄い観光図
 薄造り箸がためらうふうの皿
 君と居る部屋の空気が薄くなる
 フルムーン薄れた愛を呼び戻す
 一枚ずつペールはがれる里の風
 もどれない橋で情けの薄さ知る
 不況風財布も影も薄くする
 薄目してもういいかいと鬼が問う
 薄闇に中学生の煙草の火
 棟梁の自負が生きてる鈍屑
 金箔師うすくうすくと技が冴え
 オブラートに包んだ嘘が透けている
 人情も空気も薄いまちに住む
 鉛筆の薄さよ自信持てぬまま
 薄墨の便り次第に増えてきた
 生きのびた笑顔が映る薄いかゆ
 抱き上げた児の耳たぶに陽が透ける
 水子塚薄い緑の風車
 薄い髪かくす帽子のコレクション

寂子 昌鼓 徳三 紫晃 勝巳 純子 遠野 美也子 雄々
 サト子 半覚 哲男 重人 凡々子 和枝 喜子 たす子 章久 正子 あらた 勝視 英旺

一枚の辞令が俺の舵をきる
 ご焼香の順番がある薄い緑
 薄日射す森林浴に癒される
 エベレスト薄い大気に立ち向かう
 薄くてもどこにも負けぬ同人誌
 おだやかな日射しリングを薄くむく
 薄らいた慕情をおふる古日記
 薄っぺらな紙が命を取りに来た
 選挙戦薄い緑も手繰られる
 妻の乱以来空気の薄い日々
 薄情に見せて培う自立心
 薄水をパレットと踏んで行く女
 企みを書く鉛筆の薄い芯
 颯爽と男尻目にキヤミソール
 百難をかくすペールの透け工合
 佳
 法律を盾に情けが薄くなり
 上げ底の箱に詰った薄い義理
 薄紙に重いはなしを載せてくる
 出口かも知れぬ薄日が射してくる
 ポケットの薄いカードにあるドラマ
 人
 薄化粧すれば元気がでてきそう
 地
 薄味にこだわる妻の処方箋
 天
 自叙伝は薄くても良い三行詩
 軸
 薄絹の魅力に女高く舞い
 弘一 螢 碧 秀夫 盛夫 鉄治 ちかし 寿恵子 富子 朝子 慕情 愛論 武史 泰竜 満秋 あずま 時弘 大輪 晴翠 絹子 岳水 緑良

トラブル

矢内寿恵子選



友達の間で喧嘩に軍配が揺れる
 輪の中にトラブルメーカー居て困る
 トラブルの風をかわしている笑顔
 駐車線の太さに文句言う若さ
 トラブルの元は地権の杭ひとつ
 トラブルを起す一言居士である
 教科書にトラブル絶えぬ横車
 トラブルをいつもチャンスにする男
 トラブルが好きなら原潜偵察機
 正義感トラブルメーカーとも言われ
 トラブルにまき込まれてる老いの金
 トラブルがご縁で長いお付き合い
 トラブルの常習犯の居るクラス
 県境のトラブルウラン落着けぬ
 愚痴っぽい酒で宴会採めている
 自己チユ増殖ルールブックが厚くなる
 トラブルはすまんと言えはすんだのに
 価値観のトラブル銭が欲しくなる
 トラブル発生そこに必ず君が居る
 トラブルに巻きこまれてる保証印
 トラブルを治めるボスの咳払い
 トラブルメーカーひとり空気がき混せる
 充子 岳水 朝子 志重 高明 善信 正剣 孝雄 晴翠 アキ 美也子 周信 登美 笑子 霜石 勝巳 螢 みね 清史 志洋 幸生

隣とのトラブル花が顔を出す
社内トラブル頭の痛い首脳陣
外車とのトラブル嫌う車間距離
トラブルを上手にかわす変化球

トランプを避けライバルに勝ち譲る
生き下手の歩幅に続く小ぜり合い
トランプが大事なネタの週刊誌
トランプがいやで弱気の妥協ぐせ

温い手でトランプほぐし救せそう
トランプを起すおさめる常連だ
トランプを解決できぬコンピュータ
ごたごたをすっぽり包む母の胸

トランプは今日のさんまの焼け具合
発端は些細な箸の上げおろし
知らぬ名がある遺言で揉めている

厄介な海南島の不時着機
トランプの気配に妻が酒を出す
午前さまたあトランプがはじまるよ

戻らない口で揉める医療ミス
横からの命出ししいよいよつれ出す

トランプを器用に包む姑がいる

母心ついでトランプの元になる

コンピュータウイルスに隙狙われる
トラブルになったひとこと噛み直す

典子 寿美子 正雄 玉恵 愛論 睦子 像山 時弘 雄々 妻子 次男 みつこ さち子 今日子 大輪

多賀子 しばお

保州 可住

勝視 俊子 度

保州 可住

多賀子 しばお

保州 可住

多賀子 しばお

保田絹子

倒れる

田辺鹿太選



田辺鹿太

倒れても側には妻がいる安堵
倒れても起こさぬ母の強い芯
倒れても只では起きぬ太い眉
倒れたらあかんあかんと手をつなぐ
倒れても進軍ラッパ吹くころ
ワンマンが倒れて会社名を変える
ななああで心許して共倒れ
倒れたらピサの斜塔もただのゴミ
永遠の富士が倒れるわけがない
村茶碗どちらが倒れるわけがない
快感は巨人倒して飲むビール
ドミノ倒しの脆さに背中さむうなる
倒れたらまかせといて強い妻
倒産の憂き目は知らぬ丸い顔
巨木倒れて自分の影も見失う
倒れてはならぬと膝のひとりごと
父の木は倒れてからも道しるべ
倒れても起る心にと添え木する
倒れても起きるグルマの心意気
倒れてもゴール前では手が貸せぬ
脱サラで父が倒れた後を継ぎ
どうせなら納得すくで倒れたい

倒れても側には妻がいる安堵
倒れても起こさぬ母の強い芯
倒れても只では起きぬ太い眉
倒れたらあかんあかんと手をつなぐ
倒れても進軍ラッパ吹くころ
ワンマンが倒れて会社名を変える
ななああで心許して共倒れ
倒れたらピサの斜塔もただのゴミ
永遠の富士が倒れるわけがない
村茶碗どちらが倒れるわけがない
快感は巨人倒して飲むビール
ドミノ倒しの脆さに背中さむうなる
倒れたらまかせといて強い妻
倒産の憂き目は知らぬ丸い顔
巨木倒れて自分の影も見失う
倒れてはならぬと膝のひとりごと
父の木は倒れてからも道しるべ
倒れても起る心にと添え木する
倒れても起きるグルマの心意気
倒れてもゴール前では手が貸せぬ
脱サラで父が倒れた後を継ぎ
どうせなら納得すくで倒れたい

倒れても側には妻がいる安堵
倒れても起こさぬ母の強い芯
倒れても只では起きぬ太い眉
倒れたらあかんあかんと手をつなぐ
倒れても進軍ラッパ吹くころ
ワンマンが倒れて会社名を変える
ななああで心許して共倒れ
倒れたらピサの斜塔もただのゴミ
永遠の富士が倒れるわけがない
村茶碗どちらが倒れるわけがない
快感は巨人倒して飲むビール
ドミノ倒しの脆さに背中さむうなる
倒れたらまかせといて強い妻
倒産の憂き目は知らぬ丸い顔
巨木倒れて自分の影も見失う
倒れてはならぬと膝のひとりごと
父の木は倒れてからも道しるべ
倒れても起る心にと添え木する
倒れても起きるグルマの心意気
倒れてもゴール前では手が貸せぬ
脱サラで父が倒れた後を継ぎ
どうせなら納得すくで倒れたい

倒れても側には妻がいる安堵
倒れても起こさぬ母の強い芯
倒れても只では起きぬ太い眉
倒れたらあかんあかんと手をつなぐ
倒れても進軍ラッパ吹くころ
ワンマンが倒れて会社名を変える
ななああで心許して共倒れ
倒れたらピサの斜塔もただのゴミ
永遠の富士が倒れるわけがない
村茶碗どちらが倒れるわけがない
快感は巨人倒して飲むビール
ドミノ倒しの脆さに背中さむうなる
倒れたらまかせといて強い妻
倒産の憂き目は知らぬ丸い顔
巨木倒れて自分の影も見失う
倒れてはならぬと膝のひとりごと
父の木は倒れてからも道しるべ
倒れても起る心にと添え木する
倒れても起きるグルマの心意気
倒れてもゴール前では手が貸せぬ
脱サラで父が倒れた後を継ぎ
どうせなら納得すくで倒れたい

倒れても側には妻がいる安堵
倒れても起こさぬ母の強い芯
倒れても只では起きぬ太い眉
倒れたらあかんあかんと手をつなぐ
倒れても進軍ラッパ吹くころ
ワンマンが倒れて会社名を変える
ななああで心許して共倒れ
倒れたらピサの斜塔もただのゴミ
永遠の富士が倒れるわけがない
村茶碗どちらが倒れるわけがない
快感は巨人倒して飲むビール
ドミノ倒しの脆さに背中さむうなる
倒れたらまかせといて強い妻
倒産の憂き目は知らぬ丸い顔
巨木倒れて自分の影も見失う
倒れてはならぬと膝のひとりごと
父の木は倒れてからも道しるべ
倒れても起る心にと添え木する
倒れても起きるグルマの心意気
倒れてもゴール前では手が貸せぬ
脱サラで父が倒れた後を継ぎ
どうせなら納得すくで倒れたい

倒れても側には妻がいる安堵
倒れても起こさぬ母の強い芯
倒れても只では起きぬ太い眉
倒れたらあかんあかんと手をつなぐ
倒れても進軍ラッパ吹くころ
ワンマンが倒れて会社名を変える
ななああで心許して共倒れ
倒れたらピサの斜塔もただのゴミ
永遠の富士が倒れるわけがない
村茶碗どちらが倒れるわけがない
快感は巨人倒して飲むビール
ドミノ倒しの脆さに背中さむうなる
倒れたらまかせといて強い妻
倒産の憂き目は知らぬ丸い顔
巨木倒れて自分の影も見失う
倒れてはならぬと膝のひとりごと
父の木は倒れてからも道しるべ
倒れても起る心にと添え木する
倒れても起きるグルマの心意気
倒れてもゴール前では手が貸せぬ
脱サラで父が倒れた後を継ぎ
どうせなら納得すくで倒れたい

倒れても側には妻がいる安堵
倒れても起こさぬ母の強い芯
倒れても只では起きぬ太い眉
倒れたらあかんあかんと手をつなぐ
倒れても進軍ラッパ吹くころ
ワンマンが倒れて会社名を変える
ななああで心許して共倒れ
倒れたらピサの斜塔もただのゴミ
永遠の富士が倒れるわけがない
村茶碗どちらが倒れるわけがない
快感は巨人倒して飲むビール
ドミノ倒しの脆さに背中さむうなる
倒れたらまかせといて強い妻
倒産の憂き目は知らぬ丸い顔
巨木倒れて自分の影も見失う
倒れてはならぬと膝のひとりごと
父の木は倒れてからも道しるべ
倒れても起る心にと添え木する
倒れても起きるグルマの心意気
倒れてもゴール前では手が貸せぬ
脱サラで父が倒れた後を継ぎ
どうせなら納得すくで倒れたい

介護者もいつ倒れるかわからない
倒れても母は床から指図する
倒産を陰で操る黒い糸
逆風へ構えています豆の蔓
人間の仮面倒れてから外す

倒れての駄目よこれから実が熟す
倒れるはビルが疲れた顔でいる
生命線自慢していた友が逝く
止まり木で倒れ馴れた飲み仲間
倒さねば相手に逆に倒される
倒錯がやがて真理になる怖さ
躓いた石と今夜も酒を飲む
食い倒れの街で売れてるパンシロン
過労死と言わぬ弔辞の白々し
完走の気迫タオルへ倒れこむ

倒れても側には妻がいる安堵
倒れても起こさぬ母の強い芯
倒れても只では起きぬ太い眉
倒れたらあかんあかんと手をつなぐ
倒れても進軍ラッパ吹くころ
ワンマンが倒れて会社名を変える
ななああで心許して共倒れ
倒れたらピサの斜塔もただのゴミ
永遠の富士が倒れるわけがない
村茶碗どちらが倒れるわけがない
快感は巨人倒して飲むビール
ドミノ倒しの脆さに背中さむうなる
倒れたらまかせといて強い妻
倒産の憂き目は知らぬ丸い顔
巨木倒れて自分の影も見失う
倒れてはならぬと膝のひとりごと
父の木は倒れてからも道しるべ
倒れても起る心にと添え木する
倒れても起きるグルマの心意気
倒れてもゴール前では手が貸せぬ
脱サラで父が倒れた後を継ぎ
どうせなら納得すくで倒れたい

倒れても側には妻がいる安堵
倒れても起こさぬ母の強い芯
倒れても只では起きぬ太い眉
倒れたらあかんあかんと手をつなぐ
倒れても進軍ラッパ吹くころ
ワンマンが倒れて会社名を変える
ななああで心許して共倒れ
倒れたらピサの斜塔もただのゴミ
永遠の富士が倒れるわけがない
村茶碗どちらが倒れるわけがない
快感は巨人倒して飲むビール
ドミノ倒しの脆さに背中さむうなる
倒れたらまかせといて強い妻
倒産の憂き目は知らぬ丸い顔
巨木倒れて自分の影も見失う
倒れてはならぬと膝のひとりごと
父の木は倒れてからも道しるべ
倒れても起る心にと添え木する
倒れても起きるグルマの心意気
倒れてもゴール前では手が貸せぬ
脱サラで父が倒れた後を継ぎ
どうせなら納得すくで倒れたい

倒れても側には妻がいる安堵
倒れても起こさぬ母の強い芯
倒れても只では起きぬ太い眉
倒れたらあかんあかんと手をつなぐ
倒れても進軍ラッパ吹くころ
ワンマンが倒れて会社名を変える
ななああで心許して共倒れ
倒れたらピサの斜塔もただのゴミ
永遠の富士が倒れるわけがない
村茶碗どちらが倒れるわけがない
快感は巨人倒して飲むビール
ドミノ倒しの脆さに背中さむうなる
倒れたらまかせといて強い妻
倒産の憂き目は知らぬ丸い顔
巨木倒れて自分の影も見失う
倒れてはならぬと膝のひとりごと
父の木は倒れてからも道しるべ
倒れても起る心にと添え木する
倒れても起きるグルマの心意気
倒れてもゴール前では手が貸せぬ
脱サラで父が倒れた後を継ぎ
どうせなら納得すくで倒れたい

倒れても側には妻がいる安堵
倒れても起こさぬ母の強い芯
倒れても只では起きぬ太い眉
倒れたらあかんあかんと手をつなぐ
倒れても進軍ラッパ吹くころ
ワンマンが倒れて会社名を変える
ななああで心許して共倒れ
倒れたらピサの斜塔もただのゴミ
永遠の富士が倒れるわけがない
村茶碗どちらが倒れるわけがない
快感は巨人倒して飲むビール
ドミノ倒しの脆さに背中さむうなる
倒れたらまかせといて強い妻
倒産の憂き目は知らぬ丸い顔
巨木倒れて自分の影も見失う
倒れてはならぬと膝のひとりごと
父の木は倒れてからも道しるべ
倒れても起る心にと添え木する
倒れても起きるグルマの心意気
倒れてもゴール前では手が貸せぬ
脱サラで父が倒れた後を継ぎ
どうせなら納得すくで倒れたい

倒れても側には妻がいる安堵
倒れても起こさぬ母の強い芯
倒れても只では起きぬ太い眉
倒れたらあかんあかんと手をつなぐ
倒れても進軍ラッパ吹くころ
ワンマンが倒れて会社名を変える
ななああで心許して共倒れ
倒れたらピサの斜塔もただのゴミ
永遠の富士が倒れるわけがない
村茶碗どちらが倒れるわけがない
快感は巨人倒して飲むビール
ドミノ倒しの脆さに背中さむうなる
倒れたらまかせといて強い妻
倒産の憂き目は知らぬ丸い顔
巨木倒れて自分の影も見失う
倒れてはならぬと膝のひとりごと
父の木は倒れてからも道しるべ
倒れても起る心にと添え木する
倒れても起きるグルマの心意気
倒れてもゴール前では手が貸せぬ
脱サラで父が倒れた後を継ぎ
どうせなら納得すくで倒れたい

倒れても側には妻がいる安堵
倒れても起こさぬ母の強い芯
倒れても只では起きぬ太い眉
倒れたらあかんあかんと手をつなぐ
倒れても進軍ラッパ吹くころ
ワンマンが倒れて会社名を変える
ななああで心許して共倒れ
倒れたらピサの斜塔もただのゴミ
永遠の富士が倒れるわけがない
村茶碗どちらが倒れるわけがない
快感は巨人倒して飲むビール
ドミノ倒しの脆さに背中さむうなる
倒れたらまかせといて強い妻
倒産の憂き目は知らぬ丸い顔
巨木倒れて自分の影も見失う
倒れてはならぬと膝のひとりごと
父の木は倒れてからも道しるべ
倒れても起る心にと添え木する
倒れても起きるグルマの心意気
倒れてもゴール前では手が貸せぬ
脱サラで父が倒れた後を継ぎ
どうせなら納得すくで倒れたい

倒れても側には妻がいる安堵
倒れても起こさぬ母の強い芯
倒れても只では起きぬ太い眉
倒れたらあかんあかんと手をつなぐ
倒れても進軍ラッパ吹くころ
ワンマンが倒れて会社名を変える
ななああで心許して共倒れ
倒れたらピサの斜塔もただのゴミ
永遠の富士が倒れるわけがない
村茶碗どちらが倒れるわけがない
快感は巨人倒して飲むビール
ドミノ倒しの脆さに背中さむうなる
倒れたらまかせといて強い妻
倒産の憂き目は知らぬ丸い顔
巨木倒れて自分の影も見失う
倒れてはならぬと膝のひとりごと
父の木は倒れてからも道しるべ
倒れても起る心にと添え木する
倒れても起きるグルマの心意気
倒れてもゴール前では手が貸せぬ
脱サラで父が倒れた後を継ぎ
どうせなら納得すくで倒れたい

保州 五月 笑子 典子 雄々

和重 慕情 伊津志 清芳 孝雄 霜石

強一 しばお

春雄 郁子 とし子 大輪 権悟 圭一郎

今日子 ちかし

今日子 ちかし

今日子 ちかし

今日子 ちかし

今日子 ちかし

初歩教室

題 ノー

吐田公一

この教室の方々からよく感謝のおハガキやお手紙を頂戴し、ありがたく心から喜んでおりますが、本来が筆不精なところへもってきて、勤めております関係上、帰宅後に添削や句報（城北川柳会）の作成などをしておりますので、お返事を出せないのが実状でございます。誌上を借りてお詫び申し上げますと共に、悪しからずご諒解下さいますようお願いいたします。

なお、いただいたお手紙類は私の生涯の宝物として大切に保管し、あの世まで持って参りますのでよろしく。

添削句

○退職後ノーと叫んでボランティア 益子
退職後とするから意味が怪しくなる。

○再職へノーと叫んでボランティア

○三才の曾孫もノーと云う反抗 トキ

○三才の曾孫も第一反抗期

○塩ビのごみへもう勘弁と病む地球 象山
上七を代えてリズムをよくすると

○ゴミ投棄汚染に耐えている地球

○子等の言うノーの響きは濁らない 彰雄
具体性が乏しく内容が伝わってこない。

○いやなことはいやと言ふ子に育てあげ

○ノーと言いきり後悔するばかり 敬之介
この句も具体的内容が詠み込まれていない

○ので、ひとりよがりの句となっている。

○求愛へノーと答えてからの悔い

○イエスカノー信じて答悔いがない 輝夫
何をいわんとしているのか分り難い。

○横槍へノーと答えて悔いがない

○切り出され二世帯ノーと気を損ね 雅子
倒置法で整理してみると

○二世帯の話へノーで採めはじめ

○正義感声震わせてノーと言う 半覚
末席が声震わせてノーと言う

○家族会連休遠出はノーと決め

○最近は不況のせいで安価・近場・短期の旅
行ばやりとか

○安近短それでも財布ノーという

○ワンマンの社長にノーとレッドカード 好勝
ノーを詠み込まなくてもー。また下六は

○余程でない限り避け方がよい。

○ワンマンへ怖さ知らずが反論す

○ここは一つノーコメントで押し通す 泰雄

○この件にノーコメント追い返す 三喜夫
類想句。二句共具体的内容に乏しい。

○不祥事へノーコメントの社長秘書

○気が弱くノーと言えずに誤解され 純
上五の表現に一考が欲しかった。

○口説かれてノーと言えずに誤解され

○鍵かけて老化をシャットアウトする 栄子
見付けはいいのだが、上五が分り難い句

○恋をして老化をシャットアウトする

○あの日のノーはとも効き目がありました 丹女
いい句ですが、これに具体性を加えればな

○よかったのでは……。思いは違うが

○あの時のノーがこたえた店じまい 清
雑草も踏れりやノーとよじれます

○雑草も踏れりやノーとよじれます

○擬人法と解しても下五の表現に無理。

○踏まれてもノーと言えずにいる野草

○お見合いをノーで通した我が息子 更紗
ひとり者でいる親の心情を詠むなら

○お見合いをノーで通してまだひとり

○心では嫌だが一人赴任する 孝明
説明句（状況をそのまま述べただけ）

○拒否できぬ単身赴任へ縄のれん

○ノーと言う返事出そうか迷ってる 欣子
説明句。何の返事なのか？

○ノーという返事に迷う娘の見合い

○保証印頼まれノーと言えぬ仲 四三郎

これも説明句といえる。

▽ノーと言えず押して悔いてる保証印

○孫と居る私の心ノーカード 純子

着想はいい。

▽孫といるときの私はノーカード

○スポーツの微妙な技をノーカード トシエ

下六はできるだけ避けるように作句

▽審判のノーカードを悔しがり

○性格でノーが言えない腹がたち 綾乃

下五の表現をストレスに代えて、倒置法を

用いてみると

▽ストレスが溜まるノーとは言えぬ性

○私でも英語話せるイエスとノー 文江

倒置法でやってみると少し川柳らしくなる。

▽イエスノーわたし英語を話せませす

○マンネリ化ノーと声出す民の風 賢治

▽マンネリ化へノーと答えた有権者

○ノーストップ曲り切れず火花散る 栄呼

▽暴走のノーストップが事故を呼び

○逮捕されノーマネタイで行く紳士 栄翁

中七を省略してみると

▽ノーマネタイの逮捕写真が出た議員

○原案にノーと言ったが運の尽き 照彦

下五が抽象的

▽原案に思わぬ人がノーと言ひ

○ノーなんて言わずにうまく躲してる ふりこ

もう少し技巧を施してみると

▽本心はノーだが笑顔絶やさない

○疲れた主婦業ノーに出来るかな こずえ

▽母の日へノーマネタイの贈り物

○一途さにノーとは言えず娘を許す 美代子

▽親としてノーとは言えぬ娘の一途

○ノーと云うたぐらみ持つて日々ぐらし 妙子

下五の表現がまずかった。

▽ノーという腹に一物持った席

○堅物の耳は問わずにノーと決め ふみ

こんな場合合老人の頑固さを詠むとすれば、

▽はなつからノーと決めてる老いの耳

○孫の声「行くよ待つて」断われず 錦

内容が乏しい。

▽ジバカで孫の無心を断われず

○弱いけどきつと選挙でノーと言ひ 勝久

▽無党派のノーマネタイの答が出た選挙

○あれこれと反対して来るへソ曲り サト子

▽ああ言えはこうと反対へそ曲り

○無手勝流八方美人はノーマネタイ 重之

▽ノーマネタイ言わぬ八方美人で丸くいる

○酒断酒すすめられたらノーマネタイ さだを

▽聴診器の禁酒へノーマネタイ言ひ切れず

○一旦はノーマネタイと決めている見合ひ 敏子

▽会いませぬ見合ひへノーマネタイという娘

佳句

ノーマネタイ言う勇氣持てない宮仕え 章司

電話からおいしい話ノーマネタイで切る 喜代子

初恋のノーマネタイが今だに効いている 〇八重子

ノーマネタイのババと行くマア超オシヤレ 春江

その顔に返事はノーマネタイと書いてある 昌鼓

ノーマネタイと言ひたいことが多すぎる よしこ

イエスマンノーマネタイそれしか言わぬ夫と居る 菜月

いやいやという好きもあり恋遍路 鈴美

ノーマネタイで出した答案記名ミス 侑子

イエスマンノーマネタイを使えば崩れ出す 郁代

ノーマネタイ言う返事の裏にある決意 たえ

せがまれてノーマネタイと言えないボーマネタイ 君江

イエスマンノーマネタイはつきりという嫁がくる 智加恵

そつとすなあノーマネタイをやんわり年の功 宏子

ノーマネタイなんて言えるはずない恐妻家 〇洋子

今日はノーマネタイ明日はイエスマンか風見鶏 てる代

ノーマネタイと言ひ言葉忘れた風見鶏 賢

遠ざかる背中がノーマネタイと言っている つよし

(少し具体性があればなおよかったが)

イエスマンノーマネタイ三日過ぎたハワイ島 美弥子

(海外旅行を上手に)

倦怠期ワイフのノーマネタイが多くなる 一典

(着想がいい)

私の句

直球の恋文ノーマネタイと言わせない

—水煙抄

秀句鑑賞

—6月号から

太田 扶美代

宇宙旅誰が何しに行くだろう

高野 不二

そのとおり常々わたしも思っていた。宇宙開発に使う膨大な努力と費用を、地球のために遣ってほしいのだけれど……。

花吹雪宇野千代さんの裾模様

中西 雅

亡くなられてからの方が、宇野千代さんと花との結びつきが生々しく感じられる。

一行で済み平穩な日記帳

芦田 鈴美

極端だけれど、毎日ぎっしり書く事があるうはずはない。短い日記だから続くのでしよう。さっぱりとしたお人柄なのかまたは続けるという事に意義を感じておられるのか。

ふだんならどうもなかつた胸騒ぎ

大西 文次

日常茶飯を川柳にした見本のような句。

雑音のない一日の広い部屋

谷田 多美子

これはホントですね。静かな部屋は夏なら涼しく見えますし、冬なら逆に寒々として見える。雑音も少しくらいなら、ある方が暮らし易いかと思います。

家もわたしも修理費ばかり増えてきた

足立 由美子

下五を増えてくる、と書かれたら多分、見過ごしていたと思いますが、増えてきたという書き方に惹かれました。古くなった自分を、まるで楽しんでるようにもとれました。ペットシヨップお前もほくも売れ残り

三浦 強一

決して笑える句ではないのにおかしくなりました。遠回しでなくこれだけ僻めば、かえって愉快です。

何度でも優しくさせるありがとう

秋元 和可

言っても言われても嬉しい言葉ですね。一行で足る職歴に自負がある

岡田 幸生

銀行にあるさ金ならサケ茶漬

木村 無緑

銀行にあっても仕方ないと思うのですが、作者はなぜか見得を切っておられます。サケ

茶漬を食べながら誰かに吠えているのでしょうか。

自分の名何度書いたか八十歳

飯西 ミサヲ

年齢は一年ごとに変わっても名前はそうです。ねえ、考えてみた事もなかったのですが。これだけの高さ踏く足となり

中村 毅子

悔しいですよねえ。こんな所で踏くなんて、恨めしくてその場に立ちつくすという事、その後しばらく落ち込んだりもするわたりです。

おいしくつくらいたかと思ったり、多分わたしと似たりよったりのお年だろうと思ったり、とても同感致しました。

ささやかな贅へ一人の湯が溢れ

津守 なぎさ

節約は美德であった時代の教育を受けたので、お湯がザザッと流れるのは、本当に贅沢な事と思つてしまいます。

今の若者には理解できないかも知れない句ですね。

また元の話に戻るご返盃

西谷 治三郎

やつとまとまりかけた話を、また元に戻すのはお酒。光景が目には浮かびます。

第七回全日本川柳誌上大会特選句

第7回全日本川柳誌上大会は、2345名の参加を得て、社団法人・全日本川柳協会の主催、文化庁・日本放送協会の後援により実施され、このほど全入選作品が、『平成柳多留』第7集に発表された。このうち、特選句（10句）は次のとおりで、6月10日の日川協新潟大会で表彰された。

平成柳多留賞

トリックもなくふるさとは四季つづる 東京 西潟賢一郎

川柳大賞

和解して春の音譜を手に入れる 東京 斉藤由紀子

NHK会長賞

むき出しの梁から溶けてくる民話 福岡 古賀 絹子

日本青少年育成協会会長賞

いいお客だった余韻の残る部屋 愛媛 望月 和美

全日本川柳協会会長賞

一輪の花に垣根が溶けてくる 長野 石田 一郎

全日本川柳誌上大会賞

蜃気楼春を眠たい神の戯画 茨城 村田 花扇

展望はどうあれ父は鎌を打つ 愛媛 西田美恵子

朝市の客へ食べ方伝授する 兵庫 岩原 隆子

分れ道もう手助けのいらぬ子 東京 柳瀬 容こ

逃げ道はいらぬ男の仁王立ち 福岡 神谷 幸恵

全日本川柳二〇〇一年新潟大会開催

第25回全日本川柳二〇〇一年新潟大会は、6月10日に新潟市一番堀通町のりゅうとぴあで開催された。事前投句者1234名、当日出席者597名。大会各賞は、事前投句4題、当日出句3題の各題秀句のうちから次の14句の受賞が決定した。

文部科学大臣奨励賞

靡いても柳ひれ伏すことはない 山口 進藤 竹生

参議院議長賞

王者の血継いで牧場の春を駆け 宮崎 田中 伯

川柳大賞

和解した一歩がこんなにも軽い 秋田 大石 一粹

大会賞

地雷撤去地球澄むまで晴れるまで 福島 熊坂よしえ

大空に生きるヒントが浮いている 青森 佐藤 竜夫

風速へ柳は身がまえたりしない 新潟 皆川 綾子

一歩ずつ進む螢を道連れに 青森 高瀬 霜石

チューリップ団地の嘘を聞きあきる 青森 岡本かくら

コンドルの翼よわたしにも野心 埼玉 渡辺 梢

ニューリーダー昆沙門天の貌で立つ 青森 高瀬 霜石

積乱雲もつと自分になりたいな 新潟 橋本 佑子

チューリップの花から春の鼓笛隊 東京 近江あきら

洗面器朝のコントが澄んでいる 埼玉 松岡 葉路

ITでニューリーダーに出たサイン 広島 河浦 邦子

本社 六月旬会

六月七日(木)午後五時半

アウ イー ナ 大阪

梅雨入りをしたばかりの大阪は朝からどんよりとした曇り空であったが、六月旬会には百九名の参加があり、定刻開催された。

はじめに故人となられた同人山地マツエさん、村上剛治さんの冥福を祈り黙祷を捧げる。

お話は常任理事の本木朱夏さん。最近の携帯電話が街にあふれている様子を、車内風景から切り取って話す。次に自身が編集に携わって来て、はじめてその苦労がわかり、締切を守らねば、いかに迷惑をかけるかを実感したと言ふ。又片手に赤鉛筆、片手に辞書を持つようになつてから辞書に興味を持ち、辞書には出版社により、それぞれの特徴があり解釈や表現に微妙な違いがあることを発見、暇をみてたくさんの辞書と遊んで下さいと結ぶ。

初出席に村上玄也・菱木淳一氏を迎える。

月間賞は川久保睦子さん(大阪市)に輝く。
(司会―遠野) (記名―朝子・澄子)
(受付―冬葉・恵子) (清記―希久子)

席題「降る」 平松 かすみ 選

新総理のポスターに降る紙吹雪

降りかかる怒号に凜と真紀子節

降って湧いた塩爺さんの財務相

雨しずくドレミの音で降ってます

降つたり止んだり妻の機嫌に似た雨だ

軍配へ座ぶとん野次が降り止まぬ

もう妻の小言は降らぬ朝帰り

来年も降つたら僕の涙だよ

蝶ンゴに一雨降つて慌てさせ

金策もストレスためる長い雨

ちぎり絵のあじさいに降る虹のあめ

盲導犬へ雨容赦なく斜めから

人恋えば雨も人恋う音で降る

雨降りも唄い続ける洗濯機

約束だ槍が降つても会いに行く

天もストレス溜めたかどつと雨降らす

古木にも命つなげる種降らす

星が降る夜の散歩にボチ連れて

星の降る里でおいし水掬つ

少しでも降ると休みたい決めて酒

梅雨入りのご祝儀みたいちよつと降り

紅一点噂降らして生きたい

降りしきる灰へ帰れぬ三宅島

あじさい寺に降る雨だから美しい

もう一杯激しい降りが止まぬから

久し振りの雨に口開け花菖蒲

桂香

柳弘

玄也

ふりこ

天笑

陸風

弘風

愛論

洋

恭昌

アキ

雅文

風云児

満州

由一

一風

妙子

一步

天笑

由一

柳宏子

弥生

雅文

桂香

弘一

達子

広重の雨は斜めに降る木曾路
紙吹雪降らす役しかもらえない

星の降る里母さんの話など

矢が降つたとて母さんは動じない

ビルの下たまに人間降ってくる

忘れるものか焼夷弾降るあの音を

過疎は良し星のタイヤが降ってくる

降るような愛はいつでも澄んでいる

ぶつぶつと相合傘の中の妻

星の降るあの夜のことはひ・み・つ

人

湯水の琵琶湖生命の雨が降る

地

コウノトリ降りて国中日本晴れ

天

緑みな万歳雨が降ってくる

軸

ボランティア雨が降つてもママチャリで

兼題「ゆかた」 福井桂香 選

新しい恋がうまれてくるゆかた

斬新なゆかたに祖父の背が伸びる

糊効いた浴衣自然の風が好き

ゆかた着て踊る阿呆になつて

川の字に揃いのゆかた干してある

天神祭鼻緒が指をかむゆかた

威勢よいゆかたが走る城の町

緑台もゆかたも情も遠くなる

萬的
朋月
ダン吉
千代
度

弘一

金太

比ろ志

伽羅

いわゑ

寿美子

比ろ志

ダン吉

ダン吉

蝋

充子

満津子

愛論

修

度

茜

セツ子

兼題「騒ぐ」 玉置重人選

良いことが何かありそう胸騒ぐ
止めに来て騒ぎの渦に巻き込まれ
ワッショイワッショイ投手がまた替わる
ゴキブリを叩き潰ねた台所
騒ぐから五輪がいやいやして逃げる
墓口の小銭が何か騒がしい
騒がれて亡父の合図を待っている
ウインクをしたのに誰も騒がない
泣き騒ぐそんな勇氣もないままに
支持率を騒ぎ過ぎてはいませんか
時どきは騒いでみたいカタツムリ
胸騒ぎ検査結果がまだ出ない
花束の中で騒いでいる記録
娘三人口を挟める余地がない
よく騒ぐお方の傍で寝ています
騒いだらすぐに尾ひれが付く噂
警報がまた誤作動で騒がせる
少々の風では騒がない老樹
救急車うちより近所騒がしい
人をさす指先とて騒がしい
胸騒ぎ妻がよそよそしくなった
定刻に戻らぬ人へ胸騒ぎ
騒ぐまいどうせ先行決まってる
野村支持不支持で騒ぐ屋台酒
すぐ騒ぐ人には上げぬ柿の種
原因は私だったと知る騒ぎ
九段坂また騒がしくなってきた

満津子 満津子 充子 淳一 章久 房子 しげお 瑠美子 いわゑ 靖巳 度 泰子 紫香 かりん 哲男 ふりこ 柳宏子 洋 英子 千里 賢子 利昭 正雄 楓楽 はじめ 洞庵

マスコミが騒ぐと火種燃え上がる
吊り橋の真ん中で騒ぎ出す
胸騒ぎ受話器とろうか止めようか
騒ぐ子の世間て楽しい目ではない
騒がしい世間に遠く埴輪の目
騒々しい人で淋しい人でした
消費税困らぬ人が騒がしい
騒がしい星だと月のひとり言
個室喫茶でコーヒーカーップ割れる音
人ごみの中一人つきりになれる
教科書が生徒達より騒がしい
公園に子らの姿も声も無い
胸騒ぎどおり左遷の辞令くる
人もかも聞いてしまった胸騒ぎ
地 何かも聞いてしまった胸騒ぎ
宴席で誰より騒ぐウーロン茶
傷口にふれると過去が騒ぎ出す
騒ぐのはよそウノトリが逃げる

三喜夫 弘風 英子 由一 朱夏 洋 ダン吉 かりん 天笑 千代 桂香 伽羅 諷云児 しげお つづや 桂香 充子 螢 紫香 伽羅 文

兼題「今更」 川島諷云児選

今更僕に毛生え葉を貰っても
今更に言えない過去を持つている
還暦を過ぎて今更恋なんて
そんな事今更言うて何になる
合格の通知いまだ貰ってても
今更と思うころ着くお詫び状
生前の不孝を詫びる墓の前
島に来て今更戻れぬ嶽をふる
今更に未練を残す余命表
あと何年今更禁酒とは殺生
仏壇に昔の浮気責めている
蹴とばした石だ今更拾えない
頑固者今更変わるわけがない
切れた糸今更繕りは戻せない
お互いの過去を今更匿しても
八十の浮気に角は出しません
貞淑な妻に今更なれません
お見合にすればよかつたなどと言
窓際の席で今更絵は掛けぬ
今更に父の拳固が懐かしい
句読点今更慌てても遅い
誤診でしたと今更弁解されたとして
九条を変えたと怖いことを言う
前身は聞かすにはほしい夜の蝶
憧れていたとささやく同窓会
医療ミス今更詫びて何になる
改めて妻を好きかと訊かれても
金婚の妻がひとりになりたがる
箸の持ち方今更とかく言われても

萬巳 靖武 利武 笛生 金太 保子 弘一 弥生 愛論 武庫坊 弘一 鐘造 かりん 泰子 鹿太 典子 つづや 由一 比ろ志 恭昌 重人 萬的 丹吉 正坊 尚士 倫子 金太 朱夏 たもつ

好きだった今更言われても違い
いわゑ

佳

今更に丈夫な縄を縛っておく
しげお

じたばたしてもテールランフはもう点に
英子

愛してゐるなんて今更言えるかい
尚士

二度の職茶髪に頸で使われる
セツ子

欠点は欠点のまま生きてよし
美代子

人

今更に平行線と知った愛
朱夏

地

墓に酒かけても父は飲まれない
利武

天

いわし雲きのうのことは言うでない
美代子

軸

今更の歳をかぞえる誕生日
美代子

兼題「鳴る」 河内天笑選

花咲いて散って雷さんが鳴る
螢

鳴ることのないのを願う非常ベル
満津子

神様も手の鳴る度にいそがしい
愛修

老木へひょうひょうと鳴る風の私語
妙子

よつこらしよのたんびに鳴らす老いの骨
つづや

つれあいと靴を鳴らして春ひと日
つづや

SP盤いま幻の音で鳴る
雅文

叩いても鳴らぬ男と二人きり
鐘造

弱虫は手の鳴る方へばかり寄る
鹿太

職安で鳴る腕じつと耐えている
たもつ

鐘が鳴るたび走り出す癖がある
ダン吉

鳴り響く三味が呼び込むよされ節
遠野

旅たのしどこかで寺の鐘が鳴る
萬的

純ちゃんの鳴らす笛なら従いてゆく
楓楽

棘腕で鳴らして今は日向ぼこ
尚士

人間が好きではおずき鳴らして
アキ

糸ピンと鳴らすまきれもなく女
度

胸の鈴鳴らして消えた憎い風
鐘造

恙なく早や田植え機が鳴り響き
満州

もう限界地球の悲鳴聞えそう
弥生

地鎮祭みんなの拍手よく揃い
あやめ

風ぐるまカラカラと鳴る水子塚
正坊

クラクション鳴らして凄味利かされる
久峰

風鈴が鳴ってぐっすり寝てしまふ
しげお

思考力ゼロおなかグウと鳴る
希久子

出たくない電話のベルが鳴り続け
弘風

雷が鳴っても接吻はつづく
桂香

風鈴が嘲笑うかのように鳴り
冬葉

集印帳 水琴窟でひと休み
かすみ

着メロが鳴る戸惑いの満員車
かりん

ポキポキと骨を鳴らしている孤独
朱夏

鳴つてるがまだ踏み切りは渡れそう
弘風

首の鈴 仲間外れにされた猫
柳宏子

ケイタイの鳴つてる過労死の靴
洋

海鳴りの街です周りは皆他人
森子

佳

サイレンがどいてどいてと鳴っている
利武

関節のコキコキ朝のご挨拶
千代

正直に鳴って目覚まし叩かれる
諷云見

正面でしっかり鳴らす神の鈴
洋

私が座ると椅子がギューと鳴る
泰子

娘をとられちゃベルの鐘がキンコンカン
さだを

人

ダイエツトさせてくれない腹の虫
セツ子

地

タンポポの旅立ち風のファンファーレ 川久保睦子

天

人形が太鼓を鳴らす戎橋

軸

とき 7月29日(日) 開場 午前10時

と 7月29日(日) 開場 午後1時30分

ところ 堺総合福祉会館5F 大研修室

トロフィー贈呈・おはなし 河内 天笑

題と選者 「鈍い」 菱田 満秋

「笑う」 新家 完司

「肉」 河内 天笑

「暮らす」 嵯峨根保子

「芝居」 中田 幸一

「背中」 三宅 保州

「裸」 土橋 螢

「惜しい」 古久保和子

「じゃんけん」 小島 蘭幸

各題2句 出句締切午後0時30分

なお「笑う」河内天笑選は事前投句とする。

(ハガキに2句・7月15日締・堺川柳会宛)

賞品 初声・19番目・五客・三才など

会費 二〇〇〇円(お茶・軽食・作品集呈)

〇(ベストテン)招待懇親宴(午後五時〜七時)

をせぬ

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

岸和田川柳会

長谷川昌万報

望みないと知つても母は願かける
究極の救い涅槃の蓮の上
捨て猫を抱き上げ救うのは母性
長電話インターホンに救われる
へソの緒で救う命もあるらしい
不景気が世間を暗くして困る
世界並これがなかなか楽でない
湯の宿に世間の垢を置いてくる
巢立つ娘に世間の裏も教えとく
親の手をはなれ世間の風を知る
都合よく世間の二字を出してくる
ほんばんで世間知らずの三代目
夫の忌に木ノ芽和え添え昼の膳
連れ添うて余生へ灯す金婚譜
何かある膳に銚子が添えてある
婿養子添えものみたいに顔を出し
つき添った夫人笑顔の車椅子
絵手紙に母の心が添えてある

俣子 笑司 笑司 笑司 笑司
みつ江 甚一 富志子 昭二
洋 盛之 路子 さよ子 ダン吉 狸村 弘子 仁緑 蛙城 穰一 苑子 基

よろしくと部厚い封筒添えてある
父さんの不機嫌の酒添えるふみ
退屈で鼻毛抜いてるお爺さん
退屈はさせてもらえぬ妻の下知

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

まだ利用される力が残つてた
投函を頼む散歩のまわり道
廃材が生きて小さい花の棚
なんとなく利用されてるお人好し
持ちつ持たれつ利用し合つて仲がよい
茶柱が立ち相場は肚を決め
わけもなく唯もう切れる十七歳
ストレスへ理由をつけて里がえり
わけありの謝罪はしないUSA
敗因をさぐるお酒をひとり酌む
夫と遠し理由はなけれど

高槻川柳サークル卯の花

川島麗云児報

万物の霊長疎遠になる兆し
人間の明日を人間信じてる
人間の身勝手怒る天の声
人間を見せる仮面の裏おもて
ポツクリ寺すこし早いが参つておこ
もう少し飲んだら雲に乗れるのに
おほろげな女と春の午後逢う
青空へ届けとばかり蹴るボール
蹴られたり踏まれたりした立志伝
躓いた石蹴飛ばしてなお孤独

東吉 けい子 東雲 呂万 欣史子 シマ子 アキ 弘直 能子 清芳 会美 慶子 香住 あずき 喜美子 稲子 重人 庸佑 泰雄 義一 靖巳 晴美 あやめ 柳宏子 萬的

友情を蹴つて味わうにが酒
大海へ小亀は砂を蹴りつづけ
宣言のシヨック写経で乗りこえる
背信の愛に気づいた日のシヨック
シヨック死という死に方も悪くない
うどん屋の話題にシヨック受けてくる
神様と慕つた人に耳がない
信じてた人が握つていた反旗
あいにくの雨に二人の喫茶店
あいにくと降つて来たわと寄つて来る
おあいにくさま母の財布は口堅し
急ぐのにパトカーずつとついて来る
おあいにく貴方の嘘はばれてる
人生は回り舞台だ焦るまい
顔見れば歩きなはれとせつかれる
死ぬの生きるのいろいろあつてまた嫁かず
陰口を言うてるボスに胡麻を擦る
片足はいつも杵から出してる
さくらほろほろいのちほろほろ花糞り
春の息吹に約束ひとつしてしまふ

三幸川柳教室

三宅

保州報

試験管パイオパイオと草臥れる
健康のためなら毒も舐めてみる
正念場トップ器量を試される
ノーベル賞試験管から始まつた
試されてやるぞと亀の自尊心
こころ一番試しに翔んでみる蛙
お祝いの袋舞います春ですぬ

鹿太 五月 活恵 磯子 スミ子 節子 澄子 無緑 紫香 尚士 吉之助 満寿蔵 武史 よ志子 石舟 治三郎 しげお 秀夫 諷云児 桂香 朱夏 嘉平 和代 当代 正一 碧

笑い袋の底に溜めてる涙壺
羽のあるキュービッドかも状袋
また一つ老舗の袋消えてゆく
風袋も入れて女に華がある
水たまりに写った空をひと跨ぎ
謎一つ解けて気付いた空の青
この空の続きに飢えた子等の群れ
ふっ切れて風船空へひとり旅
青空へ春の絵具が花になる
空つばのくせに陽気な春財布
ピーチクとさえずる空があり女
コラムから広がっている青い空
匂い袋が逢瀬を急かす花ぐもり
お守りの袋カラフル神の国
黒い服着ると出ていく熨斗袋
宇宙から見れば地球という小舟
虐待と嫉はさまで揺れる舟
性善説信じて乗った泥の舟
補陀落の海は遥かに終の舟
志立てた男の一挺櫓
子の世話にならぬふたりの舟を漕ぐ
日本という舟の舵取りない不安
舟人のこころを誘うローレライ

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

健三郎 正圃 キミエ 公子 千秀 鉄治 さち子 起世子 昭枝 美寿子 靖子 栄之進 みね 豊太郎 伸二 保州 章子 美子 町子 和子 三千子 登美代 孝子

地蔵さま拜んで散歩Uターン
鶯の初音聞きつつ散歩道
子と散歩していた小径いまダンブ
挨拶を笑顔でかえし散歩道
健康の維持へと散歩日課です
山菜も散歩がてらに摘むゆとり
花と蝶お話できる散歩道
モノリザの眼と散歩してすれ違い

川柳塔おつば吟社

木村あきら報

豊枝 鈴枝 信敬 弘子 静江 正光 康女 雄々 ひかり 勝 あきら 吟笑 まさる 輝夫 放任 八重子 貞月 かおり 文仙 治延 寿々女 いさむ よしみ 坊太郎

腕組んで散歩するほど若くない
ルンルンで歌もとび出る散歩道
雪解けを待つて散歩へ心浮く
朝の笑顔逢える期待の散歩道

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報 弘治

手さくくら昨日の花に実をつける
土手を行く日傘をゆらす春の風
カッブルが土手に座って動かない
駅前広場に集う若い群れ
花壇ある駅前広場なぜか佳しい
生きて来た広場あちこち置き忘れ
広場にはダイナミックの空がある
広っぱの草がくすぐる土踏まず
赤旗のたれ下がった労働歌
体重計赤信号をちらつかせ
もぎたのトマトが光る朝のテーブル
年金へ赤鉛筆のひとりごと
素晴らしい赤で他人になった街
蝶発ちてよりは濃くなる蛇母
タイガース負けてせんざい二杯食う
説教が自慢話になる先輩

佳句地十選 (6月号から)

池田 寿美子

不合格そこからひらく道もある
残り火が燃えそうなので切る鉄
満腹になったら思案はじめてよう
老いらくの恋はフイクションだけに
塩胡椒足りぬ男が多くなり
エリートの夢が重たない塾靴
偶然に頼る淋しくなっている
煩惱がホイ捨てもよいと言う
やすらぎを求めて風と旅に出る
面会謝絶そんな罪が痛ましい

十四郎 満寿蔵 糸子 節子 正子 昭三 郁子 久子 幸子 和子 みち子 美子 芳子 志激 弘一 貴代子 半蔵門 楓楽 無緑 保人 利はん ダン吉 蝿 諷云児 美代子

沙羅双樹思ある人の眠る寺

新緑の山に抱かれて旅なかは

斜めから沈む夕陽を見る無職

鶯のふんとありふとははの鏡台

ばやき言葉を回転木馬に乗せてみる

月の雲落ちるところで飛ぶ虫

水呑んであしたのことは風の中

体温があるキトラ古墳の朱雀

脇役でいようひまわりにあと少し

母は熟睡胎児のあそぶ時間

魚ころたしかにあつた深い杜

握る手がだんだん熱くなる別れ

回転が鈍い月曜日

田辺 鹿太郎

鹿太郎

鹿太郎

連休は花をたつぷり可愛がる

ダンディなつばめすいすい五月晴

雑草が好きで二軍のまま終る

びつたりと盲導犬が居る強み

前向きに友と語つて日々たのし

つば広の帽子が似合う娘の帰省

大臣をすぐこしらえる柿の種

時々は散歩のコース変えてみる

プレゼント母にはききたが祖母になし

七色の夢が広がる子の未来

顔のいろまたかとなる新免許

びつたりと財布に合うが身に合わず

古伊万里の壺にびつたり華の精

五月晴れ老いて帽子がよく似合う

しづ子

歌子

義芳

孝一

武庫坊

紫香

薫

半蔵門

全彦

光穂

年代

静

比ろ志

叙勲沙汰世間は内助の功を賞め

どの色を着ても若さが出て似合う

貧しくも父の歩んだ白い道

過去の傷ほどくと長い道になる

父の道しつかり継いでゆく絆

この道の他なしこの道をゆく

振り向けば寝たきりの母手を合わす

行き届く介護やつぱり金次第

介護する素手に真つ赤な血が通う

介護して貰うことなく解りたい

接吻の記憶ブドウが舌に終り

果物に野菜に変身するトマト

果物が好きです夫唱婦隨です

ヒーローの掃蕩沸き立つ無人駅

ヒーローはいつも父だという記録

下りるしかないヒーロー独り言

そろそろとわたしの小舟風まかせ

愛が冷えてそろそろ別れ近くなり

もつれ糸そろそろ解ける気配する

川柳塔唐津支部

久保 正剣報

ビール酒少し多いと横の手が

愛妻の名で昼めしも管理する

若葉からニツコリ梅実太つてる

愛妻に怒鳴られてる速い耳

春菊を一株残し開花待ち

柳宏子

紫香

猪太郎

千里

湖風

英一

度

萬的

賢子

賀子

雅文

シマ子

章久

柳宏子

庸佑

和代

三重子

英一

晋吾

美弥子

實

兵八郎

タミ

勝視

幸夫

着膨れの父の背中への優し過ぎ

朝の窓生きている証深呼吸

洋間では疲れのとれぬ老夫婦

一寸だけ拗ねて見せたい薬指

六人も娘でゆとり有る老後

退陣の虚報が不意に羽化をする

母の舟メルヘンへ漕ぐ子の寝顔

竹原川柳会

時広

早すぎるあつという間にもう二十歳

水を飲む辞令一枚ふところに

一口の水が許され快方に

わさび沢きれいな水がある限り

ふるりの水あたたかく胃にしみる

水がめは水の重さを知っている

闇夜にも表情がある水の音

ふるりの水を欲しがるといふ音

世の濁り澄ましておくれミススマシ

命拾いした水のごくりごくり

飛び越えて自信のついた水たまり

一滴の水にも天と地があった

水澄んで今のわたしが写せない

竹の里歩けば気分青くなる

苔むした屋並みキラキラ目にまぶし

地の神の怒りも竹は知らぬ顔

桜咲き鯉も見下ろす竹の街

年金も介護も忘れ普明閣

朝日山わがふるさと富士と見た

難聴も浮世楽しいまだ元氣

輝夫

晴翠

水笑

高汀

虹明

正四郎

正劍

一路報

千枝

蘭幸

敬子

貞子

栄恵

寿枝

不朽

厚子

民恵

笑子

一枝

静風

汎美

正宏

房子

年子

慶子

瑞穂

半覚

夏喜

口下手な男と旨い酒を酌む
誌友あり我が人生は薔薇色に
女房に信用のある友も入れ
座る友亡くした机口惜しそ
友達がだんだん減つて海の無垢
本当の友はライバルかもしれん
友の辞書ノ一という字が無いらしい

堺川柳会

河内

月子報

いいんですかな自分独りが恵まれて
胃の検査自重して飲む目が可愛い
森が泣く自然破壊の贈り物
糠漬は誰にも負けぬ母の技
いまさらと地団駄踏んだめぐり会い
生きていく弱点をまた目張りして
意地捨てて自己診断のメス入れる
甲子園勝つても負けても泣いている
一旦は時間通りに目が覚めた
鼻くすり心ふわりと傾いた
泣いた日も体重ちつと減つてない
天狗鼻ほどよく折つてくれた君
クレオパトラと私も同じ鼻の位置
技術者の腕を見込んだプロジェクト
どんと来いまるいお鼻が座つてる
泣かされる度に大きくなっていく
わたくしの鼻に誰もがホツとする
いつの日か自由気儘にめぐる旅
向こう意気の強き鼻まで天を向く
親として子の泣き顔は見とらない

節夫 孝枝 万年 幸子 菁居 一路
春蘭 日の出 舞夢 伽羅 りつえ
みつこ つづや 紀美女 東雲 かりん
半銭 文 小雪 八千代 冬虹 梓
千代 なきさ 柳宏子 巳代一

泣いたあとけるつとケーキ食べている
まだ泣けと算盤片手攻められる
泣きどころ押えられてて歯が立たぬ
病から抜け出した母に嬉し泣き
住大夫人形泣かせて客泣かせ
鼻声に負けてマンション買ってやる
過去語る涙にうどん伸びている
だんまりの演技だ今修行中
一流は時間をかけぬメーキャップ
鼻がよく効く日で疲れどつと出る

城北川柳会

川久保陸子報

朋月 甚一 玄也 さくら 哲平 忠敬 洞庵 泰子 天笑 月子
江義 求芽 道子 東雲 高栄 昭子 登美子 トヨ子 春蘭 あい子 久留美 政子 史風 白峰 柳弘 睦子

花の雲に浮かれてばかりおれぬ世で
蓋の裏舐めてクリーム食べる癖
移動時期ひそかに狙う椅子がある
春うらら彼岸は亡母に会う墓参
冥途への旅リズムジンを予約済み
叱られた返事はドアをきつくしめ
暗がりの屋台で本音すつと出る
情熱の火など忘れて凡夫婦
ロボットの個性か同じミスをする
決断がついてすつきりしたデスク
たとへ紙に女の意地を折りたたむ
新鮮な花を羨む水中花
ゆつくりと歩いて風に逆らわず

若美川柳会

石谷美恵子報

達子 順三 はじめ 倫子 志華子 一枝 典子 あやめ 修 とし子 千里 ひさ乃 公一
忠良 孝男 完司 一京 一瑠 和歌子 公乃 圭一郎 大漁 蟹郎 静生 季芳 よしえ

ぐらぐらと揺れる心に妻が喝
 群集に耳を借りたい時もある
 仲間割れ波紋をよんで水をさす
 火事騒ぎ火は消え断たりに人が居る
 肩書きが取れて断り易くなる
 紋服の女が秘めている火種
 悲しみの柩が続く桐の紋
 この話大きな声で断れず
 ぐらぐらに残る一本俺の菌だ
 群衆の中の独りである安堵
 毒舌を吐けば非難の雨が降る
 物好きな蝶で毒ある花を選び

京都塔の会

都倉

求芽報

ばあちゃんはずを外すことつい忘れ
 手を振れば影も手を振る癖も春
 招かざる客花粉黄砂よ春のウツ
 静けさの無い街角の夜なきそは
 弁当は桜の下で食べようぜ
 夫の好きなもたたけけれど半分こ
 どもならん顔に誤解されている
 病院を信じて待合室に居る
 年頃の娘はらはら待つ夜更け
 はらはらと泣かぬ女になりました
 あの女が入ればいつも波が立つ
 子の知らぬ過去を持つてる母の帯
 兵児帯で夜店見た日の遠い夢
 文庫帯大文字より恋進む
 ひとひらの花に誘われ帯を解く

重忠 雅女 多哥由 一夫 かつみ きみ子 睦子 節子 喬水 裕子 たぬ 美恵子

崩れかけ気をとりにおす計の報せ
 何回も書きなおしたと見えぬ絵
 今のうちなら直る夫婦の蝶つがい
 リハビトへ行くにもなおす薄化粧
 一旦はトッパに立つて息が切れ
 一旦は忘れた恋が火照りだす
 つくろえぬ一旦切れた赤い糸
 定年後一旦止めた趣味に生き
 心停止電気ショックで蘇る
 父の血が一旦決めたら止まらせず
 一旦は矛を収めて機会待つ
 一旦は踏み止まらせた母の鞭
 昔なら一旦緩急 ハワイ沖
 一旦は振り向いてみる人違い
 よい妻を一旦休み友と旅

川柳さざやま

酒井

靖子報

伝統の重み支えた紺のれん
 半世紀ももうどれない過去の坂
 二十一世紀子等の瞳が描く地図
 出勤のコンビ靴音まで揃い
 時ときはゆれるコンビの水たまり
 静かならまた気にかかる子ども部屋
 よいコンビ運動会は晴れ姿
 息の合うコンビで約束すぐ決まり
 あんた誰聞き返したい老いの坂
 気をつけているがよいしょの立ち座り
 大きな声出すから間違ひ指摘され
 子どもには甘い遺伝子生きている

英一 典子 吉之助 芳子 庸佑 欣之 英旺 益子 高栄 柳宏子 百合子 友熙 求芽 紫香 宏子

結び目を時どき直し共白髪
 名コンビではなきいけれどピー婚
 直線を外す子どもにある主張
 手ぶらでも寄れば喜ぶ母の声
 お互いに半人前で裏切れぬ
 けんらんと咲いてコンビの蝶を恋う
 学校も過去にも触れぬコンビ仲

ほたる川柳同好会

田辺正三郎報

一秒を惜しむかのよう封開く
 小包を開いて親の恩を知る
 突つ張りの心を聞く母の歌
 アルバムを開き進まぬ大掃除
 家庭用金庫を開けるゼロ金利
 雪どけの川瀬に一輪花開く
 足りるかなそつと財布を開けてみる
 開封のハサミ震えるラブレター
 飼犬に人間性を見透かされ
 世渡りに性悪説も子に教え
 もう歳だ人間ドック用はない
 人間の驕りで消える瀬戸の浜
 人間の心を持つか介護犬
 善玉も悪玉も持ち苦悩する
 人間だものこのひとことに救われる
 人間が好きで寄り道ばかりする
 人間の資格をきめる売上表
 進化未だ足りぬ人間戦する
 アバウトに生きてストレス避けている
 ストレスもなければそれがストレスに

富美 毬子 寿子 八重子 芳郎 可住 靖子 桂子 吉太郎 祥風 まみ子 長一 賢次 幹治 敏子 昭子 正安 ただし 久子 雪子 禄骨 千里志 いさむ 黒兔 直次 善守

妻の眉ストレス示すバロメーター
うるさいつと怒鳴れずストレスなおつる
期待せぬ人がストレス感じてる
残業の疲れふつ飛ぶ子の寝顔
ストレスを道連れにして太つ腹
菜園で虫と分け食う夏野菜
失恋も傷も捨て去る夏の恋
サマータイム小泉さんならやりかねぬ

くろぼこ川柳会

武田

帆雀報

未開発国へ円出す人助け
円満に笑つて過ぐす余生です
札束に無縁で円く生きてます
円形の城なら敵も攻めにくい
円満な話ころははまだ落けぬ
隠し事ない円満な夫婦著
生きて死ぬ円運動の中にいる
夕陽追うまだまだ足が洗えない
早過ぎる追い着くことが出来ません
後さざりて追いかける心追い払う
真実のひとつを追って右ひだり
夕焼けが追い越してくるさあ帰ろ
土壇場に追いつめられて嫁にゆく
追うことに夢中で森へ迷い込む
さつぱりとするのに金がまだ足らぬ
今日は生き明日はさつぱりわからない
足洗いさつぱりとしてまた歩く
次に逢う時はさつぱりしていたい
小便がさつぱり元気なくなつた

よしろう 正三郎 見清 信男 契子 馬洗 セツ子 柳童
よしろう 正三郎 見清 信男 契子 馬洗 セツ子 柳童

黒髪を切つてさつぱり尼になる
努力した汗はさつぱり気持ちよい
さつぱりとした坊さんの浪花節
川柳塔なら 坊農
家の犬浮気したのか朝戻る
あと戻り出来ない夢をつつぱしる
塩味がよく効いてる甘い声
うす塩で残り時間へ四股を踏む
枕かえ若さ戻りし夢をみる
塩効いた意見をくれる真の友
新芽から元気をもらう朝の靴
新任のパバがおむつを抱えてる
新緑に鯉のたたきこの至福
反乱を起こし戻らぬブーメラン
風みどり風呂の掃除も水あそび
戻る道わすれた君は酒に負け
花鉄心のゆとり取り戻す
傷心をみどりの風に癒される
里帰りする子待つてるお漬物
頼りない新任医師の処方箋
塩おくる謙信の意気武士の華
旬の味引き出す塩の一つまみ
戻れない橋を夫婦の名で渡る
堂々の主婦に仕上げた塩の壺
新任の背広に匂うナフタリン
新緑の息吹きをもらう握りめし
したたかな鼻で故郷へ戻る
新任の椅子にタブーが伏せてある

帆雀 美智子 公弘 柳弘報 志 博一 美和子 春雄 カズ子 さと美 積子 とし子 敏子 富子 絹子 春蘭 孝子 國治 あやめ 秋泉 むつみ 良一 茂雄 真理子 洋子 道子 (做)眞生夫 和夫

あの時に恵みを受けた敵の塩
コーヒの香り二人の繕り戻す
みどりの風孕んで泳ぐ鯉のほり
フレッシュな顔交番に春がくる
めでたさへ鯛もはねてる化粧塩
川一つ渡ると弥陀の掌に戻る
倉吉川柳会 松本よしえ報
正直に生きていわゆる人がいい
目に見えない利益ないと拝まない
お話の途中ですがと口はさむ
熱が醒めていわゆる元の鞘
目に見えぬ私と彼の赤い糸
石一つ抱いて胸中話せない
握り拳の中から話題小出しする
夫婦でも電話で話す倦怠期
朴訥な言葉だけと胸を打つ
耳を澄ませば夕焼けの哭く音がする
ひとりが気楽といわゆる負け惜しみ
外面は良いがいわゆる内弁慶
音立てて見たがどなたも振り向かぬ
若けえもんにそがな話は聞いとらん
目を閉じて聞くと言音がよく見える
娘の話聞いて相手は値踏みくする
痛だとは言わずいわゆる遠回し
病持ち医者より説得力がある
音沙汰のないのも何故か気にかかる
花に水やわらかな声かけてやる
子守唄のCDかけてパチンコへ

章久 秋雄 寿美 美千子 朝子 弥生 菊枝 松盛 久子 節子 幸子 和歌子 雄々 一夫 季芳 睦子 博文 かつみ 石花菜 芳光 ゆり子 (函)喜美子 賀寿恵 秋草 康子 よしえ

夫婦別姓いわゆる強いのは女
真夜中に月下美人の聞く音
素潜りで一瞬間の無い世界
満天に話すことなど皆忘れ
寡黙でも酒が入ればよく話す
愚痴言ってもいわゆる半分かけてる
胸苦しいわゆる恋の芽生えかも
腰上げてからの話が長くなり
心音は胎児と母の絆です

うぶみ川柳会

上田 宣子報

お茶席の淡雪羹は春の彩
久方の出会いを濡らす淡い雪
れんぎょうの企みを知る淡い雪
切り出せぬままに淡雪消えてゆく
淡雪にレジスタンスの芽が育つ
沈黙のひろがりに湧く春の雪
朝食は手軽にパンがチンと告げ
急な客手軽にスルメさきながら
菜の花を一本手軽う春にする
お手軽なカレーライスに肉はなし
鎌とぐ事もわずれ手軽な草刈機
半額と言う手軽さが吊つてある
手軽でもインスタントは使わない
手軽に終る喜劇の赤いバラ
甘え癖つけてしまった尻拭い
影法師僕を拭つて見たかろう
枕から拭いきれない一つの絵
三歳でなくとも客で良しとする

(前)喜美子

和枝 照彦 泰輔 都子 十三男 日出子 次男 静生 和枝 美ツ千 華子 葉士人 也恵 重忠 克枝 登美枝 雄人 芳江 健一 ひろこ 茂

えひめ丸せめて五分も早ければ
送りましようせめて人目につかぬ間に
貧しさをせめてお酒の防波堤
這つてもせめて平均寿命まで
せめてひとりにして欲しや春の宵
角樽を飾つていても信じない
いつか樽を出てゆくためにある時間

川柳ふうもん吟社

杉本 孝男報

笑顔とは裏腹だった裏切りよ
罪のない罪を背負つて難流れ
裏腹な心は持たぬ侍だ
茶髪とは裏腹演歌唄いだす
よろしくと頼む謝礼は時効後に
裏腹が指の先から見えている
探査機が針の穴までスパイする
妻は家出子をよく伝しくと置き手紙
知らぬ間に僕の遺伝子スパイされ
よろしくと言われないで見たくなり
首切りのみんなスパイに見えてくる
よろしくと納税通知やってくる
スパイとはよき友であり敵である
裏腹に生きてロマンを捨て切れぬ
よろしくを担いで不眠症になる
よろしくと子の便りまた金が必要
スパイとは孤独なものよ背が寒い
長男の嫁はスパイに気をつかう
よろしくと朝昼晩の神頼み
仮面つけスパイ踊りの輪に入る

良男 一枝 黙光 完司 蛭 天雀 宣子 洋々 喬水 孝美 正邦 茂登子 道子 益子 昌鼓 圭二郎 鬼桜 彰夫 健一 無限 一瑤 三津子 一京 鍾植 裕子

裏腹男がママシ焼酎のんでいる
飾り難流し難にもあるさだめ
赴任地へアナンテナ向けて夫見張る
哀愁によろしくやがて日が沈む
生きたいから死にたいなどと口走る
座りなおして裏腹の話する
好きなので裏腹なこと言っている
裏腹な心が読めず傷を負う
憎い人なのになんか出て行かぬ
よろしくと頼めば裏で金が必要

かわはら川柳会

上田 俊路報

さらさらと流れる河に帖よこい
急告げの書面さらさら置き手紙
さらさらと文書くように行かぬ恋
術後食さらさら粥で生きかえる
さらさらの献血若き日の証
ゲームでも勝負の世界おとし穴
ゲームにも歳の差感じ手が出せぬ
泣き笑い八十路ゲームと振り返る
捨てゲームでも世を生きる知恵拾う

輪多朗 静子 悦子 泰良 一薰 登生 寿子 俊路 孝男 悦子 春名 宗明 蛭 由美子 公弘 静生 忠良 是るお

川柳塔わかやま吟社

牛尾 緑良報

川柳の海で犬かきしています
川柳と相撲とつてる一行詩
超気楽起きて川柳寝て川柳
川柳で綴るわたしの一代記
川柳に人間好きにされました
川柳にいつも迷っている私

稚代 美子 克子 鉄治 優夫 三喜夫

世の中が解り家出の子が帰る
 桜散るその後は誰も振り向かぬ
 ヒロインが去ったその後の風の街
 頂点の椅子でその後の養を振る
 欲捨てたその後血圧異常なし
 その後の少年の母背負う枷
 どの星で会つてゐるのか逝つた父母
 行方不明大穴当てるその日から
 人気タレントその後いつしか消えていた
 あれ以来地下に潜つたさきのご雲
 生かされたその後に意義のあるいのち
 御先祖を語る見事な花が咲き
 結婚記念樹繁つて妻はもう居ない
 初句会の記念に抜けた句を愛す
 記念日の壊れた時計捨てられぬ
 あぶつたら海に戻りたがるするめ
 焼いてる鯛はまるで生きてゐる
 のた打つて干されるめとなる定め
 はりつけの刑で鯛の一夜干し
 義歯完成今日はずるめで試運転
 網の上鯛も踊る嬉しい日
 網の上鯛熱いと丸くなる
 浜風の鯛悟りの味を出す
 鯛干す浜の日照りは打って付け

大輪 射月芳 利治 正博 紀美女 英子 千寿子 桂香 和子 三男 寿子 泰子 保州 健三郎 さち子 和重 良一 佐代子 佐一 富美子 豊太 一夫報 靖巳 いわゑ 義子

あいまいに笑い存在感を消す
 過信したつげは必ずやってくる
 母子手帳女が俄然強くなり
 初めての愛を育てている手帳
 祝辞と弔辞とちらがむずかしいだらう
 何するもしないのもよし自由の日
 大自然松吹く風の声で泣き
 花活ける仏退屈させぬよう
 本当の批評を他人から貰う

川柳大坂 高木 信辭報

恋愛も文字の良し悪し気が変わり
 ホカ弁の宅配女房また太り
 市長選女性パワーが弾けます
 強盗をしてまで借金義理を立て
 なぜかしら妻に土産を買っている
 一人ではないよと友が手をつなぐ
 着物着るつもり雨ですかなんなあ
 ラストダンス私とあなたかなんなあ
 人の顔見える手書きの文字がいい
 忍一字大事にせよと老父の筆
 達筆の軸が読めたらつまらない
 仮名ばかりでも温かい母の文
 誰にでも読める楷書で書けとある
 点字からぬくもり拾う指の先
 新しい字が詰まつてるランドセル
 あたたかい文字だと思ふありがと
 終電車白い手袋無事送る
 メールより手紙で送る父の愛

楓楽 房子 遠野 澄子 智恵子 正坊 哲夫 希久子 保子 隆司 功 敏 比呂志 潔 柳昌 柳弘 柳道 柳宏子 金太 利昭 聰一 洛醉 笑風 朝子 一步 川童

宅急便人より先に家に着き
 松茸を送り味方につけておく
 名水は神の心の送りもの
 送り仮名忘れた程の軽い義理
 褒めるだけほめて小言を少しだけ
 厳しさも温もりもある指導者や
 鬼コーチ一人で酒を飲んで
 子の進学父のクラブはカビだらけ
 重ためと言えぬ土産の母ごころ
 思いきり指導されたい風の糸
 三指で送り迎えをしてごらん
 送られた人が元氣な宴会日

南大阪川柳会 吉川 壽美報

おだてられタフで通した空元氣
 人一倍大事にタフな奴
 リストラの夫助けるタフな妻
 老婆のタフさにもたれ甲斐がある
 仕事で徹夜寝れば麻雀また徹夜
 母さんはタフだよ食べよく動く
 毒舌は毎日タフな真紅子ぶし
 祭すきタフで獅子を舞う
 胃袋がタフ過ぎ味覚オンチです
 常識を越え連想がよく弾む
 連想は以心伝心君と僕
 ご懐妊双子ならいいなあーと想い
 さくらんぼ亡母の笑顔が甦る
 古里を連想させるぐみの花
 包装の豪華連想する中味

照月 一風 重人 丹吉 美花 青道 章久 民子 芳香 まつお 信醉 萬的 柳宏子 庸佑 シマ子 修 直子 辛子 東雲 楓楽 雅文 柳弘 ひさ乃 柳伸 たもつ なぎさ

連想が老母へとつづく夕茜
相続をしたが暖簾割れかけ
一人つ子親と財産独り占め
人間の涙相続出来ぬ鬼

連想がはずんで銀河系越える
母が待つ浄土につづく花の道
好きな風吹くまで花は咲きつづけ
忽然と地に湧く蟻の縦列だ
疑問符がつづきまな板乾かない
行列につづいて並び特価品

虎の子を猫ばばされた小引き出し
好連がつづき背後が留守になる
ハッピーに連想して出すラブレター
連想よりしかとこの眼で確かめる
継いだ腕磨いて詫びる親不孝

ふくべむら川柳

橋本多哥由報

過勞死へつづく秒針取りはずす
父の骨拾いライバル父ときめ
ライバルの労使に春が弾まない
首の眼鏡に歳を知らされる
うそくらべ警察などに負けとれん
未来へと続く宝の孫がいる
苦勞してトンネル出ると春が来る
春だから少し素直に風と合う
土俵際ライバルの目が泣いていた
ライバルは地球家族だ仲良くね
顔笑う腹の中ではライバルだ
厚底の靴でも闊歩出来ますか

朝子
憲太郎
叔子
宏

アキラ
志華子
千里
のぼる
度

日出子
章久
洋子
遠野
久子
頂留子

洋々
はじめ
健二
信子
寛子
春恵
栄乃
依子
あけみ
元子
和甫
昭恵

ライバルを鏡にみたて技みがく
嘘一つついて静かに風が吹く

むらくも川柳会

毛利 幸報

満開を見上げて喜ぶ今日の幸
輝く子夢見る母の子沢山
消費税主婦を泣かせる台所
気持ちよく酔うて酒税気にならぬ
すすくと成長祈り子供の日
税金は笑顔で納め国の維持
すすくと背丈が伸びて親を越し
税金も払わぬくらし老いの留守
鶯の声に目ざめる春の彩
初節句私も一句したためる
琴線にふれる言葉が胸をつく
花散りて遠来の客おしむ顔

誰も彼も葉持参で同窓会
この春も初鳴き聞いて恙なし
一陣の風に散り行く花吹雪
同窓会旧姓呼びあう老い同士
ご無沙汰を詫びて命日香をたく
新緑の山を眺めて法事席
梅よりも桜が先に咲く大地

川柳塔鹿野みか月
土橋 螢報

臭いもの靴のチャック錆びている
サーカスの一步外せぬタイミング
末席の皆勤賞も褒めてやる
新世紀何も変らぬ一步だな

寿美恵
多哥由

鳥子
清吉
仲子
早苗
安男
定子
幸

明朗
久え
喜美
ふさえ
寿

まさ子
昭子
美喜子
ます美
恵美子
八重子
節江

ひとときの幸せに酔い蝶が舞う
ひとときを駅弁と走る旅最中
亡夫の事故ひとときたりも忘れない
ヒロインになってひととき昼ドラマ
母を見るひととき我が身映し見る
写経するひととき亡母に近くなる
若く化けるひととき嬉し朝鏡
さくらもひと散るひとときを考える
触れ合った情け発酵させる壺
詫びながら腹の虫には教えない
詫びてこそ心が通う仲になる
何時になる貴方に詫びる機会待つ
詫びる目がとても素直で叱れない
半世紀いくさのきずも詫び足らぬ
お詫びして訂正します軽い口
四斗樽かついで詫びに来んさった
素直になつてお詫びすることたんとある
梨の花白く明日は詫びに行く
深く詫び浅く詫びてと樹の根っこ
禁煙の夫が鉛を分けてくれ
禁煙も出来ず裏切り通している
禁煙の十日余りが辛かった
禁煙で山がとつても緑です
この夏で禁煙十五年 時効
禁煙は延命という仏さま

はびきの市民川柳会
徳山みつこ報

勘定が合わないままで五十年
勘定に合わぬ予算で首を絞め

茶子
みさ子
菊乃
節子

実満
和枝
きみ子
忠良
彩子
英夫
久枝

みどり
武子
くに子
和子
はるお
汲香
盛桜
諷人
きみえ
睦子
かつ乃
孔美子
石花菜
螢

満寿蔵
専平

勘定に入れてなかつた風の向き
春日和今日はほんやりり骨休み
親孝行ほんやりだつた子が一番
振られたか駅頭に立つひとり影
文案が玉虫色の妥協案

ほんやりと次を待つてる乗りおくれ
麻酔さめまずさはほんやり妻の顔
はんやりとしたい日もある棒グラフ
職退いてほんやり覗く金魚鉢
放心の背に孫の手は容赦なし
降りそような気配に急ぐ花の道

ライバルは追い抜く気配背な風
また無心そんな気配のする電話
後ろから美人がついてくる気配
日本の夜明けの気配感じます

親友が口実指南してくれる
電話なら勝手な口実並べられ
口実が語るに落ちてすぐにはれ
口実が重荷になつてゆくピエロ

禁酒禁煙口実だけはうまいもの
近くまで来たと只酒飲むつもり
言い訳の二三つはいつも持ち
口実もすぐにはれ出すお人好し

口実を読まれていると気付かない
踊いた口実石の所為にする
花吹雪口実などは考えぬ

戸締まりに用心いらぬ過疎の村

川柳高知
川竹
松風報

みつこ 昭平 久仁子 吐来 章司 志洋 ダン吉 絢子 一知 かつみ さとみ 洞庵 利武 敏 桂子 猿杵 敦子 美喜 たけし 一壺 りつえ 庸佑 泰子 重人

灰皿に水を吞まして閉会し
ご用心セクハラ過敏症が居る
晩酌は余生の葉欠かさない
底辺で生きている父の太い指
精一杯生きた歩幅に悔いはない
百年を見事に生きた深い敏
生きている術言導犬に教えられ
コツコツと長く続ける賞もあり
うぐすぐと啼いて窓から春がくる
若妻が明治の風に泣いた日も
お祝いの便り文字まで嬉しそう
同期生皆逝き里の春彼岸
日本の未来を担う通学路
生き死にを賭けた恋なら一つある
母さんに春の暦が忙しい
笑うのがこんなに辛い手術あと
戦友眠る南十字の下あたり

功 孝雄 正五郎 かず子 千鳥 快風 愛宏 和江 てるみ 幸 悦子 竹萌 圭風 三郎 佳風 美々 松風 知恵子 注湖 久子 義良 紫晃 幸子 房子 小鹿 蘭水 亮

ごはんですよ九官鳥が呼んでいる
水鳥の楽園湖が凧いでいる
思い出の箱を開ければ鳥になる
妻という手のり文鳥飼っている
鳥呼んで鳥送つてる小さいさち
ゆるやかな生命線はまだ緑
ほうれん草脳を緑にしてくれる
メルヘンの森の緑は話し好き
脳の乾きを癒す深みどろり
風みどり深い溜息吸われそう
メーデーの頃の緑が美しい
毎日のお米嬉しい長寿箸
天下太平米とお陽さまついてくる
米づくりせぬ約束の角隠し
この川をたどると母の古里よ
緩やかな川の流れに油断する
ふるりに神話を語る川がある
一匹のなまずが川を守りぬく
川下に居て人間が見えてくる
川面にも故人の一句浮いてくる

保子 静恵 すみこ 昭二 日出子 多賀子 与根一 桂子 早苗 螢 ちえこ 茂美 太泡 たけし 昌枝 秀子 雨学 凧丘 叮紅

さんだ 久保田千代報

ピアノ弾く音が聞える坂の町
父の名で来る宅急便は母の文字
幸せな家族演じて一つ屋根
青畳素足の音ははずかしく
夏の陽に裸足でかける海開き
何年振り肩流し合う旅の宿
ローン済み雨もりそんな家となり

紫香 哲男 正行 開子 久恵 サクラ

年重ね鳥の声でも目が覚める
金魚にも冬を生き抜く意地がある
踊り子の淡い恋あり伊豆の坂
時どきは初心に還る日は裸足
敷権利金取らんに空菓箱
焼鳥の匂いが角を曲らせる
意地の無い土俵力士に土が付く

横浜あおば川柳会

清水

潮華報

度忘れに日々ゼスチャアが上手くなり
たて替えたつもりを返す風がない
満腹に食後のくすり気がつかず
物忘れ多く互いに赦しあう
晩学へ青春の意地呼び起す
忘れてはいけないことはすぐ忘れ
また明日おぼろ月夜の長い影
叙勲待つ今年もお呼びかからない
遣伝子へお別れをする美容外科
へそくりは別れぬうちに使つとく
詰め込んだ知識まともに抜けていく
忘却は神がくださる治療薬
全開の窓が呼びだむ花粉症
思い出は何故か別れた花ばかり
十指では足りぬ幼児の計算機
不確かな記憶に焦れる小半刻
大臣のひと言大臣呼び戻す
インターホン呼ばれ出られぬ風呂の中
甘言と別れを告げる同じ口
呼ぶ声がおぼろに耳の寝入りばな

鹿太 萬的 澄子 藤朗 正和 歳子
和可 鈴美 サト子 三郎 ふうみ かず枝 句多留 徳三 良子 政勝 街湖 道子 純子 達也 笑子 今日子 亜希子 かつ子 嘉信 八重子

確かめて書いてふたりで忘れてる
忘れてもあれで通じる五十年
この指に誰も止らぬ四面楚歌
ありがとう言つてはんとこの別れする
お食事と呼ばれ実とは切り出され
名を呼ばれ無事生還の麻酔覚め
パイパイの手に約束の明日がある
記念日を忘れた罰が高くつき
見届けるまでは生きたい指を折る
長生きのために忘れることにする

翠洋会

穴吹

尚士報

一点雪雪辱期して塾通い
見送りの母遠ざかり点となる
紅一点わたしこんなにもてます
点取りに夢中になった小学校
一点でいいから勝てよタイガース
点と線もつれた糸をていゆき
ドナーカードいつか愛の火点したい
ぼつりぼつり占学習つてボランティア
こつそりと支えてあげる後ろから
參觀日こつそり入りそつと出る
更衣室こつそり仮面つけている
こつそりと言うから余計注意ひく
何事もこつそり出来ぬ人である
同情をされて傷口痛み出す
同情はするが自分で起きなさい
同情を透かせば見える下心
癌告知今まで他人ごとだった

絹子 敏子 省子 雅子 為佐子 裕峰 広和 あらた 満秋 潮華 久峰 正坊 恭昌 舞夢 伽羅 尚昭 尚士 周信 日の出 春 千梢 澄子 富子 さと美 楓楽 宣司

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

再開の一步助走路長すぎる
あらあなた夫が明日へ画きつつけ
老いてなお夢を行く日へ画きつつけ
胸かしてくお夢を男が泣いている
パソコンもメールも雲の上の事
水よりも濃い血が邪魔をして不仲
亡母さんへ花一輪の恩返し
あれもこれも風吹くままに七回忌
通り抜け屋台の煙気にかかる
反省会敗因棚に飲むばかり
儲けより客がよるこぶ仕事する
女大臣五人ばやしが姦しい
カルテには金欠病は書いてない

千歩 照子 真砂 蛙 叡子 真理子 志華子 絹子 会美 正雄 石舟 東雲 柳宏子 たもつ 弥生 宏 弥生 宏 昌子 翠公 加津子 太郎 幸生 柳弘 風

初対面あだ名どおりの温い人
食欲をそそのあだ名でよくもてる
新任の教師にあだ名つく五月

頂留子
柳伸
春蘭

あだ名しか思い出せない元恩師
渾名呼ばれ空百埋めた二十年
愛称で呼ばば遺影も答えそう

ダン吉

肩組んで進む名もなき人の群れ
しあわせにすると言った進行形
リストラのゼロから進む靴を買う

欣之
己代一
ますみ

進んでるらし嫁御は飯炊かぬ
ひたすらに歩幅を刻む蟻の列
一歩進んですぐに隣と見比べる

弘直
とみを
弘一

川柳塔きやらほく

政岡日枝子報

傷跡は見せまい心の奥におく
やるやらぬもめた揚句の角隠し

千秋

積み木の上の平和論などもういらぬ
老い支度身に余る物捨てて行く

田鶴
初枝

初夏の風ほんの波に香を運ぶ
嘘つきはさまの液に泳がされ

春麗

とりあえず磔を投げて風を見る
新しいうねりおこして自民風

ふみ
壽々子

ノスタルジーな視線嬉しい船だまり
わが道をただ一筋に尾を振らず

瑞枝
玲子

天へ行く小道で待っていてほしい
草原の牛烙印の牛ばかり
初夏の雨木々の緑が濃くなる
夜の汽車大事な物を連れて去に

富美子
千代
恵子
八重子

解体目をつむつて捨てて行く
脚本の通りにいかぬお祭りだ
日暮れ道鬼も淋しい背で歩く

昌子
日枝子
千春

川柳塔みちのく

小寺花露報

親を看る話の綾がほどけない
傷心の謎かけ急に左遷され
死角から神も奥の手出してくる

蛙痴郎
凡々子
謙一

臍線りが隠し切れない顔になり
ばつさりと未練断ち切る長い髪
樹氷から産れた羅漢泣きやすし

妙子
順風
慕情

小気味良く与作の斧が研する
青春の失意黒髪惜しまれる
出生の秘密は知らぬ蛙の稚魚

銀波
ふさゑ
花匠

ばつさりと悪に目覚めて鬼子母神
床の間の花に吸われていた秘密
秘密文書デスクの鍵が黒くなる

愁女
ツネ
黙人

写経百遍植物人間から醒める
男の涙に年々弱くなるわたし
ここだけの話は風に乗りたがる

和香子
花峯
一花

独身を通す理由は伏せて置く
夜に咲く訳は話さぬ月見草
藍染を着て故里をひたかくす

五葉庵
荔

西宮北口川柳会

亀岡哲子報

雨のパレード戦場へ続いたた
嵐山一雨降れば風情増す
逢えた日のデートに似合うこぬか雨
新品の靴が泣いてるにわか雨

正坊
武庫坊
江美

想い出の女を流した憎い雨
相合傘雨が止んでも気付かない
雨降る日妻には言えぬ曲がある
顔を見て酒の支度をしてくれる

無禄
尚士
孝一
富喜子

一病ぐらいでまだまだ旅支度などしない
靴ひもを替えると尾瀬の支度出来
控え目に妻の身支度急かして
目玉焼男ひとりのめし支度

求芽
奮水
周信
石舟

そつと来て晩の支度をしてくれる
ファッションを選んで春へ飛ぶ支度
身支度もそこそふらりひとり旅
陽の方へゆつたり伸ばす子等の枝

千代
義子
文

凧の音を忘れた枝薫る
眼を上げて見よと巨木の枝が鳴る
枝振りに見とれ不審と咎められ
尺取虫枝の先つちよで思案顔

能子
哲男
春蘭
松煙

道草は虫のお墓に桃の枝
くすの木の枝と歴史を競う寺
嫁はんのやる気に頼るやせ蛙
子や孫に頼りたくない竹を踏む

絹子
鹿太
靖巳

丸く老い持ちつたもたれつして夫婦
神にほとけに頼るしかない千羽鶴
頼られて腕より太い縄をなう
玉ねぎの芽がむくむくと反抗期

澄子
たず子
しげお
トミエ

藤の花過去をゆつくり巻きもどす
はまゆう川柳会
中後
清史報

いわゑ
太一

ウインクと思っただけで赤くなり
ウインクでころりとまいり五十年
ウインクがぱつちり決まりそつと立ち
満天の星にウインクされた夜

ウインクが通じてそつと場をはずす
勝ち将棋互角に止める器量人
互角だと思ひこんでた落し穴
互角だと思つてたのは自分だけ
互角なら小遣いもつと多いはず
互角だが最後はいつも敗けて勝つ

論戦は互角の勝負あと世論
正論もとことん吐けば疎まれる
逃げるからとことん追つてみたくなる
生きたるでとことん二度とない浮世
好きなこととことん言える老夫婦
解決は最高裁へ持ち込まれ

くじけずにとことんやるさ五・七・五
とことんの治療に泣いて二十年
USJとことん遊び疲れ果て

川柳塔おとと

原 みをさを報

五合目で偏平足の愚痴を聞く
春は曙五月五日は子供の日

腹が立つとゆつくり五ツ数えませす
案ずるな五本の指の中にいる
うれしさが五線譜の上とび跳ねる
竿だけが残り端午の節句すぎ
五大陸オリンピックに輪を広げ

生米子 美佐子 恵美子 慶一 苗木美 苗子 雄造 国彰 修也 泰作 登 光 利ほん 清史 てる坊 佳子 平和 雅視 公治 雄々 登 千秋 幸次郎 庸二 富貴子 小生

お嬢には五つ星つけ嫁がせる
連休はお客に追われやつとすむ
新米の教師白墨よく折れる
転校をした学校を訪ねたい
校庭の土の匂いは子の匂い
学校はふる里にあり胸にあり
学校の遅れ社会で取り戻す
珍しい友の長居の深いわけ
珍しい妻も酔つてるクラス会
珍しく聞いてしまった母の愚痴
夕食に妻の靴だけ揃わない
父さんが日曜なのに家にいる
両陛下に思いがけなくお会いする
麻酔とけやつと私に戻される
ここのとりやつと木の実もふくらんだ
やつと暇できたら五体痛みだし
これからがやつとこの目で見えてくる
年金はやつと暮せるだけでいい
やつと来た七十見える所まで
古里のチャイムにやつと身がほぐれ
じくじく歩いてやつと夫婦らし
青田風うちの子にいい話

お嬢には五つ星つけ嫁がせる
連休はお客に追われやつとすむ
新米の教師白墨よく折れる
転校をした学校を訪ねたい
校庭の土の匂いは子の匂い
学校はふる里にあり胸にあり
学校の遅れ社会で取り戻す
珍しい友の長居の深いわけ
珍しい妻も酔つてるクラス会
珍しく聞いてしまった母の愚痴
夕食に妻の靴だけ揃わない
父さんが日曜なのに家にいる
両陛下に思いがけなくお会いする
麻酔とけやつと私に戻される
ここのとりやつと木の実もふくらんだ
やつと暇できたら五体痛みだし
これからがやつとこの目で見えてくる
年金はやつと暮せるだけでいい
やつと来た七十見える所まで
古里のチャイムにやつと身がほぐれ
じくじく歩いてやつと夫婦らし
青田風うちの子にいい話

道子 仁子 舎人 真一 彰雄 一弘 以和万津 登美 黙光 紀子 邦昭 せつ子 伝住 由多香 風花 宏章 艶子 孝子 義弘 和子 清子 みをさを

川柳藤井寺

高田美代子報

ネクタイで夜桜褒めに通り抜け
葉桜になって落ち着くおそい縁
イベントが終つて桜はつとする
花も見ず歌つて呑んで寝てしもた
ヤングママ子育てのこと花の下

道子 仁子 舎人 真一 彰雄 一弘 以和万津 登美 黙光 紀子 邦昭 せつ子 伝住 由多香 風花 宏章 艶子 孝子 義弘 和子 清子 みをさを

場所取りが新入社員の内仕事
信心より桜目当ての寺参り
桜散り特攻隊がすぐるうかぶ
疑問符は桜咲いてるうちに解く
アルバムをすれば四角も笑い出す
折り紙の魔法が鶴と亀にする
丸窓も四角い窓も雪月花
ブライドは残してあげる別れ方
子供等は皆関東で所帯持ち
はなれたらあかん迷い子になりませ
旅立ちの娘に春風よ吹いてくれ
見所があるとみたのか手放さぬ
わたしから少し離れていく命
はなれても根っこはいつもそばにいる
ライバルにはなされてから抜け殻に
疑いのかからぬ距離で火傷する
ふるさとの山河はなれず風光る
仕方なく離れた街をこいしがる
電話口にはなれる音を聴く
指切りを離れていった軽い嘘
コギヤル等と少し離れて紅を選ぶ
明日の夢見たくて過去を切り離す
影法師にも一服させる花の下
初節句金の色紙に鎧描く

場所取りが新入社員の内仕事
信心より桜目当ての寺参り
桜散り特攻隊がすぐるうかぶ
疑問符は桜咲いてるうちに解く
アルバムをすれば四角も笑い出す
折り紙の魔法が鶴と亀にする
丸窓も四角い窓も雪月花
ブライドは残してあげる別れ方
子供等は皆関東で所帯持ち
はなれたらあかん迷い子になりませ
旅立ちの娘に春風よ吹いてくれ
見所があるとみたのか手放さぬ
わたしから少し離れていく命
はなれても根っこはいつもそばにいる
ライバルにはなされてから抜け殻に
疑いのかからぬ距離で火傷する
ふるさとの山河はなれず風光る
仕方なく離れた街をこいしがる
電話口にはなれる音を聴く
指切りを離れていった軽い嘘
コギヤル等と少し離れて紅を選ぶ
明日の夢見たくて過去を切り離す
影法師にも一服させる花の下
初節句金の色紙に鎧描く

道子 仁子 舎人 真一 彰雄 一弘 以和万津 登美 黙光 紀子 邦昭 せつ子 伝住 由多香 風花 宏章 艶子 孝子 義弘 和子 清子 みをさを

川柳クラブわたの花

吉村 一風報

お喋りなメジロに和む春の庭
絵手紙の三井寺の鐘きいてます

耕策 志洋 栄一 重人 かつみ 昌子 悦子 美代子 一筒 恒雄 利武 喜代子 昭子 扶美代 婦美枝 大八 網歌 春蘭 かね子 修六 一知 桂子 和樹 葉 雅枝

竹原川柳会創立45周年記念川柳大会

日時 8月26日(日) 9時開場

会場 たけはら美術館 文化創造ホール
(竹原市中央五丁目 竹原合同庁舎内)

会費 二千元(昼食・発表誌・池田コレクシヨン)

宿題と選者

「樹」 岡山市 木下 草風選

「泳ぐ」 今治市 和田 宏選

「竹」 広島市 定本 広文選

「鏡」 西宮市 小松原爽介選

「宇宙」 豊中市 橋高 薫風選

出句締切11時半 各題2句

欠席投句拝辞 席題なし

事前出句

「父」 東広島市 石原 伯峯選

ハガキに二句連記。8月10日締切

出句及び連絡先

〒725-0022 竹原市本町一丁目14-3

小島 蘭 幸 宛

電話・FAX共通0846(22)6626

主催 竹原川柳会

後援 竹原市教育委員会

縄電車出発点はボチの家
再出発妻が後押ししてくる
見栄を捨て再出発の職探し
茶柱を信じ赴任の靴をはく
ご出発永遠の別れに掌を合わす
ノミネート一寸その気にさせてくれ
ポスターの顔が笑っている候補
二枚舌使い候補者叫んでる
旅プラン候補地どれも捨てがたい
女性候補にとっと集まる浮動票
宇宙旅行根持った第一号
田植唄知らずに育つこしひかり
花の苗よじれるのも捨てず植え
植えかえをされた根つこの不眠症
砂漠化の植林森よ甦れ
旅人が苗木植えてる無人駅
神さまが植えた樹だろう森がある
低金利ばちばち響いて来たたくらし
ぼちぼちと酒毒に脳が侵される
おふくろの味にぼちぼち嫁の腕
もうぼちぼち遊び飽きてもいい頃だ
つかの間の停車へ走るかけうどん
茶の間にて世界見渡す有難さ
あの人はすこし山葵効かせとく
人生の達人もいる青テント
孫には回転寿司がよく似合う

ころんでもやっぱり走る一年生
ローズ川柳会 山崎 君子峰
ミサヲ

かすみ
庸佑
光子
佳風
仁清
三洋
三郎
三峰
一茜
日風
日出子
とし子
忠央
朝子
高栄
波留吉
恵子
修

弘風
たもつ
吉之助
一 笑
博泉
あやめ
柳弘
利昭

第65回 大阪川柳の会
日時 8月3日(金) 17時開場
会場 サンケイビル本館3F
題と選者 1△薄い・塩谷幸子△朗報・赤井花城△目・小池しげお△
達者・磯野いさむ 各題2句 席題なし 千円 18時締切

ランドセル身に付いて来て五月晴れ 藍
満月の夜にガタゴトと鳴るカバン 哲子
ただいまと壁に向かって言うてみる トミエ
リストラを告げずに持って出る靴 貴代子
人生を走り過ぎたる天の邪鬼 まさお
靴の疵リストラされたこと秘密 澄子
天辺の椅子を目ざしている靴 いわゑ
小蠅生れて老いの茶の間の片付かず 年代
夢追うて走ろうスピードにおくても 武庫坊
今日もまた受審器をとればツーツー 君子

わかあゆ川柳会 松本はるみ報
その昔手帳にへそくり入れたまま 好栄
パートの身敬語の相手は年下で 民子
無茶するな健康手帳に諭される ちよえ
果し状が来そうで手帳すてられぬ はるみ
こんな時に限って手帳持つてない かつ子
古手帳にあはれました傷のあと 聖子
手帳は一転二転知っている 恵美子
母子手帳どこへ遊びにいったやら 博利
書き忘れの罪を手帳になすりつけ 清泉
蓋いくど開けてもひつきょう具は貝 白汀

第52回 広島平和祈念川柳大会

とき 8月5日(日)開場10時
 ところ 広島市中央公民館4F大ホール
 宿題 (各題2句出句 締切11時50分)
 「若い」 弘兼秀子選
 「仲間」 小島蘭幸選
 「干渉」 藤川幻詩選
 「吹く」 小林てるじ選
 「動く」 角本華録選
 「瓦」 三輪聖孟選
 「都市」 八島白龍選
 「平和」 石原伯峯選

会費 (出席・投句) 1000円
 呈賞 総合20位迄
 「瓦」の特選に三輪聖孟杯(持回り)
 昼食 各自(当日1F食堂利用可)
 欠席投句 投句料1000円と適宜用紙に各題2句(住所・氏名・電話番号を記入)
 締切 7月30日
 投句先 〒730-0823 広島市中区江波東1-12-50 君川 達雄宛
 主催 広島川柳会 後援 広島県川柳協会

第5回 川柳展望全国大会

日時 8月5日(日)10時30分開場
 場所 マリエド・クール空港 Tel(06)6857-1200
 阪急「養池」から送迎バス有
 参加費 2,000円
 はげましのことば 森中恵美子
 お話「関東川柳界現況」 津田 暹
 題と選者 席題あり 萩野 圭子選
 「裏切り」和泉 香選・「棒」高瀬霜石選
 「置く」草地豊子選・「穴」小川しんじ選
 「傷」番野多賀子選
 自由吟=原井典子・新家完司・佐藤岳俊
 なかはられいこ・金築雨学・天根夢草
 講評=中田たつお
 各題2句、締切12時、自由吟は各選者に違う句出句
 質疑応答 「パネラー」鈴木公弘・永井玲子
 なかはられいこ・佐藤岳俊・金築雨学・新家完司
 大会終了後懇親パーティーを行います
 主催 川柳展望社
 事務局 〒563-0102 大阪府豊能郡豊能町
 ときわ台3-4-17 天根夢草方
 Tel(0727)38-1845・Fax(0727)38-6770

木曾川川柳大会

応募期間 6月1日～7月10日(消印有効)
 募集課題 特別課題(大賞候補作品)
 「流れ」大木俊秀選・「古墳」吉原辰寿選
 「花火」斎藤清幸選・「触れる」新海照弘選・
 「民話」杉山海苔風選・「いのち」松代天鬼選・
 「野生」河井正之選
 応募規定 便箋に各題2句(1枚目右に住所・氏名・電話)または応募用紙請求のこと
 応募料 1000円(発表誌呈) 小為替または郵便振替口座00820-0-41412
 鶴かご川柳社
 応募先 〒484-8799 犬山郵便局止め
 木曾川流域川柳連盟

川柳大会

とき 8月10日(金)13時～16時30分
 ところ 犬山国際観光センター(フロイデ)
 名鉄犬山駅下車東口5分・Tel0568-61-1000
 参加費 1000円(記念品呈)
 懇親会 4000円
 ○お問い合わせ 大会事務局0568-65-2023
 主催・木曾川流域川柳連盟
 後援・犬山市、各務原市、(社)全日本川柳協会、NHK学園

第8回「さんま川柳」全国誌上大会

課題 「さんま」(秋刀魚・サンマ)
 応募 はがき1枚に2句(1人2枚まで)
 住所、氏名(柳名)、電話番号明記
 (募集を知った媒体名を付記)
 宛先 〒988-8501 気仙沼市役所内
 「さんま川柳大会」係
 締切 7月31日(火)消印有効
 選者 一次選 川柳けせんぬま吟社選考委員会
 二次選 川柳宮城野社主幹
 ちば東北子氏
 発表 9月10日(月)入選者に直接通知
 「さんま川柳全国大会句集」の希望者は郵便小為替700円を添え申込むこと
 (応募句を同封するときはハガキ大用紙で)
 賞 ①入賞80句に生鮮サンマ1箱を宅送
 特選5句に盾、秀逸10句に賞状、佳作40句、吟社賞25句
 ②魚食推進賞10人(入賞者以外から抽選)
 協賛 気仙沼市
 後援 日川協、川柳宮城野社
 主催 川柳けせんぬま吟社

春季 時計台ビール川柳八選句発表

「新作」

川柳塔社
名誉主幹

橋高薫風 監修

夏季「そろそろ」13年7月末メ切
秋季「まつり」13年10月末メ切

新作のビールを喉が待っている
新作を出す包装に凝っている
試作品億万長者夢見てる
新作に社運を懸けて走り出す
新作へ皮算用は出来ている
新作へ命を燃やすのほり窯
いちじくの葉へ戻りそうニューモード
新作を身内がほめて一次パス
新作に春たけなわを染め上げる
新作の妻のメニューはまず褒める
新作の案山子を集め村起し
ロケットがどんどんヒトに近くなる
新作のどこか亜流のストーリー
新作がちよっと気になる浮気者
新作の水着まぶしいカレンダ
新しい味でついつい飲みすぎた
新作がリストラの首つなぎ止め
新作のラベルにほれて味にほれ
新機種に振り回されている古参
リフォームを着こなし母は闊歩する

準特選

芸術という新作を見て疲れ
新作のギャグに拍手は妻一人

特選

新作をいつも師匠の名で出され

宮城	唐津	金沢	旭川	宇都宮	駒ヶ根	西宮	泉宮	福岡	札幌	大宮	大分	桐生	さいたま	日野	藤沢	八尾	広島	墨田	東松山	八千代	小千谷	小栗	正和
榎山	仁部	西森	古川	大河原	小林	村上	工藤	三吉	藤野	松村	鍵矢	栗原	上鈴木	佐藤	後藤	入口	竹明	秋野	國嶋	滝川	小栗	正和	
昭章	四郎	茂夫	昌子	信昭	栄次郎	悦子	真樹	誠	忍	育子	久美	善子	春枝	美文	洋子	とみを	おみ	康夫	武	ひろし			

●応募要領

官製ハガキに1句
(何枚でも可)
郵便番号・住所・氏名
年齢・電話番号を記載
の上、時計台ビール宛
お送り下さい

●川柳応募者に限り2割引!!

1ケース ¥3,000を2,400円
応募はがきの表面でご注文下さい

〒060-0051
札幌市中央区南一条東7丁目15-16



時計台ビール株式会社

HP <http://www.tokeidaiber.co.jp/>
E-mail info@tokeidaiber.co.jp/



暑中お見舞申し上げます

竹原川柳会

〒725-0022 広島県竹原市本町1丁目14-3

小島蘭幸方

創立45周年記念川柳大会を8月26日(日)に
開催致します。ご支援よろしくお願ひします。

会 監 会

計 査 長

山 三 古 藤 古 石 岡 森 岩 時 小

内 宅 田 解 谷 原 本 井 本 広 島

房 不 太 静 節 淑 清 菁 笑 一 蘭

ほか
会員
一同

子 朽 虚 風 夫 子 水 居 子 路 幸

暑中お見舞い申し上げます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南3分) プレラにしのみや4F

事務局および投句先

〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子

(做)
川見絹子 亀岡哲子 門谷たず子 小倉藍 小熊江美 奥山美智子 奥田みつ子 石原靖巳 井上信子 井上松煙 浅野房子 秋元てる 阿萬萬的 正本水客 黒川紫香
富山ルイ子 都倉求芽 田辺鹿太 田中正坊 住谷石舟 坂上高栄 小林周信 小池しげお 黒田能子 久保田千代 久保まさお 木村貴代子 菊池トミエ 神原文 川島諷云児
吉田笑女 山本義子 山崎君子 松下比ろ志 牧渕富喜子 古川奮水 藤村メ女 春城武庫坊 春城年代 林はつ絵 長谷川春蘭 西田柳宏子 西口いわゑ 長浜澄子

暑中お見舞申し上げます

城北川柳会

会長 吐田 公一

岸	川	川	神	叶	鍛	太	大	浦	宇	上	石	池	井	安
野	端	久保	夏磯	岡	原	田	川	田	野	田	塚	田	上	達
あ	一	睦	典	史	千	と	道	綏	義	登	順	寿	白	は
や	歩	子	子	風	里	し	子	子	江	美	三	美	峰	じ
め														め
野	中	都	寺	津	高	高	鈴	鈴	洪	坂	小	小	栗	喜
村	田	倉	井	村	橋	杉	木	木	江	上	糸	泉	山	多
八	あ	求	東	志	一	千	政	ト	博	高	昭	ひ	チ	佐
重	い	芽	雲	華	枝	歩	子	ヨ	遊	栄	子	さ	サ	津
	子			子				子				乃	子	乃
吐	森	吉	丸	真	松	松	松	町	本	板	長	橋	坊	野
田	杉	岡	岡	鍋	本	岡	岡	田	間	東	谷	村	農	村
公	秀		静	藤	た	千	久	達	満	倫	春	容	柳	美
一	夫	修	枝	子	だ	恵	留	子	津	子	蘭	子	弘	代
					し	子	美		子					子

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

											主幹			
											牛尾			
											緑良			
											副主幹			
											川上			
											大輪			
											顧問			
											野村			
											太茂津			
											小倉			
											アサ			
											柿花			
											紀美女			
											桑原			
											道夫			
											小山			
											太一			
											坂口			
											公子			
											坂部			
											紀久子			
											澤田			
											和重			
											塩谷			
											佐代子			
中村君枝	中島正博	中後清史	中井栄美子	堂上泰子	富上光代	天満三千代	寺田裕美	垂井千寿子	玉井豊太	谷口信和	谷口和子	田中輝子	杉山精子	芝あつむ
ほか会員一同	和田良一	横垣忠翁	山田高夫	宮本三喜夫	宮園射月芳	宮口克子	松原寿子	松尾和香	堀端三男	堀富美子	細川稚代	福本英子	福田和子	橋爪佐一

例会 毎月第2日曜日 近鉄カルチャーセンター

事務局および投句先

〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良 方

TEL 073-446-2855

時計台の鐘の音を

心に響くおいしさにして

時計台ビール株式会社

〒
060-
0051

札幌市中央区南一条東七丁目15番16

暑中お見舞い申し上げます 川柳ふうもん吟社

会長 両川 洋々 夏目 健一

副会長 杉本 孝男 加島 修

植田 一京 猪川由美子

会計 倉益 一瑤 横田 春名

加藤 茶人 下田茂登子

萩原 美雪 岩原 喬水

山本 益子 中山 露山

永井三津子 河田のり代

伊勢田 毅 米岡 南亭

中 宗 明 阿部 初江

中村 金祥 両川 無限

足立 天翔 谷本 志げ緒

事務局 鳥取市二階町三―一〇二

〒六八〇―〇〇三三 植田一京方
例会 毎月第四日曜日 十三時
鳥取駅構内(シャミネ会議室)

暑中御伺

香川県大川郡白鳥町白鳥

川柳塔おつぱこ吟社

会長	木村 あきら	甚古 正雪
副会長	成重 放任	岩倉 文仙
会計	川崎 ひかり	向山 治延
同人	工藤 吟笑	山崎 はつ恵
	池内 かおり	松村 輝夫
	堤 くに子	赤沢 貞月
	神保 坊太郎	中塚 寿々女
	滝井 勝	原 まさる
会員	植田 チカエ	伊勢 八重子
	角尾 いさむ	田中 奴胤
	辻上 よしみ	

暑中お見舞い申し上げます

翠 洋 会

住谷 石舟	清水 絹子	柴田 英壬子	小林 周信	児玉 蛙	古今堂 蕉子	黒田 真砂	奥田 みつ子	岡本 久峰	太田 昭	榎本 舞夢	榎本 日の出	梅田 宣司	指宿 千枝子	井上 照子	居谷 真理子	石原 靖巳	穴吹 尚士	橘高 薫風
渡辺 富子	渡部 さと美	渡辺 さだを	米田 恭昌	山本 希久子	安永 春	古川 喜美子	藤井 正雄	長谷川 会美	西出 楓楽	中村 叡子	長浜 澄子	中澤 伽羅	天正 千梢	寺井 東雲	津村 志華子	谷口 義	田中 正坊	高杉 千歩

暑中お見舞申し上げます

いずも川柳会

会長 尼 れいじ

会 員 一 同

事務局 〒693-0052 出雲市松寄下町284

吉岡 きみえ 方

TEL 0853-22-1068

暑中お見舞い申し上げます

NHKK川柳教室

橋高 薫風	志田 千代	江見 見清
北畑 金治	小林 周信	大崎 侑子
藤井 正雄	野下 之男	野島 庄三郎
黒田 能子	井上 松煙	安達 忠央
指宿 千枝子	緒方 美津子	岩屋 美明
海老池 洋	井上 信子	福田 満州
古川 喜美子	北野 哲男	南原 正和
三品 征子	三木 愛子	山田 耕治
鴨谷 瑠美子	谷 鈴子	莊司 弘之
前 たもつ	古今堂 蕉子	
田中 節子	矢倉 五月	

2001年

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔 唐津支部

山	山	山	樋	仁	田	宗	坂	久	市	岩	井	相
門	門	口	口	部	口		本	保	丸	崎	上	葉
夕	幸	高	輝	四	虹	水	兵	正	晴		勝	あ
ミ	夫	明	夫	郎	汀	笑	八 郎	剣	翠	實	視	き

暑中お見舞申し上げます

横浜あおば川柳会

菊地	川島	金森	小野	巖田	伊藤	和泉	石原	石川	生坂	芦田	秋元	菱田
政勝	良子	徳三	句多留	かず枝	ふみ	あかり	三郎	ただお	サト子	鈴美	和可	満秋
布山	福田	福島	長島	土田	田中	平の	平	鈴江	近藤	後藤	日下部	北沢
嘉信	由美子	かづ子	亜希子	今日子	笑子	ぶ子	達也	純子	道子	早智	美柳士	街湖
清水	山廣	荒井	吉田	山本	山梨	山下	八田	保田	宮崎	三村	水木	松土
潮華	あらた	広和	裕峰	為佐子	雅子	省子	敏	絹子	二郎	八重子	征彦	十三子

暑中お見舞申し上げます

夏バテになりませぬように

2001年 盛 夏

私たち「川柳塔みか月」第22回記念大会は
今秋、10月21日(日)開催の夢フェスタ大会を
共催し、皆様のご支援お待ち申しております。

川柳塔鹿野みか月

事務局 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279 中原諷人 方
〒689-0405 電話 (0857) 84-2100

暑中お見舞申し上げます

長 柳 会

河内長野市 千代田公民館内

毎月 第2・第3金曜日

午後1時から

暑中お見舞い申し上げます
 ほたる川柳同好会

橋高薫風 井上直次 田辺正三郎 高嶋勝 宮田祿骨 湯浅馬洗 月原方郎 富永敞子 岡本吉太郎 前田昭子 古川喜美子 嵯峨根保子 藤原桂子 田中蛭柳 松本ただし 池田善守 栗田久子 板山まみ子 出口セツ子 唐住セツ子 江見清実 寺井柳童 ほか会員一同

定例会句会・毎月第2火曜日午後・豊中市蛭池公民館

暑中お見舞い
 申し上げます

はびきの市民川柳会

安芸田泰子 榎本吐来 河井庸佑 酒井一壺 清水利武 塩満利敏 徳山みつこ 西村りつえ 三好専平 永田章司 森田四郎 山本たけし 他一同

暑中お見舞い申し上げます

京都塔の会

会員一同

暑中お見舞い申し上げます

岩美川柳会

会員一同

〒689-0003 鳥取県岩美郡岩美町浦富1504
TEL 0857-72-1388

暑中お見舞申し上げます

三幸川柳教室一同

事務局 〒640-0112 和歌山市西ノ庄239-23

桜井千秀

暑中お見舞い

申し上げます

岸和田川柳会

岩佐ダン吉

田口穰一

島崎富志子

寺田甚一

田中文時

村垣鹿太郎

井伊東吉

仲谷弘子

不破仁緑

善野盛之

長谷川呂万

加藤基

堂免路子

宮野美津江

原苑子

藪野ケイ子

柿花昭二

徳庄美智子

高須賀金太

芳地狸村

原さよ子

堺 エ イ シ ス

矢 中 中 津 斎 源 榎 榎 和 村 西 梶 河
 野 澤 崎 守 藤 田 本 本 田 上 内 本 内
 伽 深 なぎ さく 八 舞 日 つ 玄 朋 哲 天
 梓 羅 雪 さくら 千代 夢 の づ 也 月 平 笑

堺 川 柳 会

暑中お見舞申し上げます

山 八 矢 宮 藤 樋 長 中 中 中 寺 高 志 小 神 河 河
 本 十 倉 本 田 口 谷 井 野 川 井 田 田 西 原 内 内
 半 洞 五 かり 泰 冬 忠 健 東 星 千 小 月 天
 銭 庵 月 ん 子 虹 彰 敬 吾 楓 雲 子 代 雪 文 子 笑

暑中お見舞い申し上げます

尼崎川柳協会加盟

尼崎
いくしま川柳会

例会 毎月第一金曜日午後一時

サンシビック尼崎三階
(阪神尼崎駅西南三分)

尼崎
尾浜川柳会

例会 毎月第二火曜日午後一時半

尼崎市尾浜二丁目五十八
尾浜公民館
(阪急武庫之荘北側③乗り場
市バス④尾浜二丁目下車)

両句会共各地句会案内に

掲載しています

暑中お見舞い申し上げます

鳥取県川柳作家連盟

会長 鈴木公弘

会員 一同

事務局 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364

安田方 春木圭一郎

TEL 0857-24-2834

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔なら

会員一同

清水	宮西	吉川	大内	坊農	米田	中原	宮口
絹子	弥生	寿美	朝子	柳弘	恭昌	比呂志	笛生

TEL 〇七二七-三八一八四五
FAX 〇七二七-三八一六七七〇

川柳展望社

〒563-0102

大阪府豊能町ときわ台

3丁目4の17

川柳展望

季刊

年間誌代 〆四、九六〇（千共）

暑中お見舞申し上げます

打吹川柳会

会 員 一 同

暑中御見舞

川柳塔まつえ吟社

同 人 一 同

〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅方
電話 0852-24-5450

2001年 盛夏

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔おおとり

会長 小林 由多香

連絡先 鳥取市相生町1-110

(例会は毎月第2土曜日午後1時より予定しています。)

暑中お見舞い申し上げます
くろぼこ川柳会

平成13年 盛夏

会長 鈴木公弘
会員一同

暑中お見舞い申し上げます

うみなり川柳会
会員一同

鳥取市相生町3丁目204
電話 (0857) 23-4672

暑中お見舞申し上げます
川柳ささやま

山本 森本 松原 細見 藤田 広瀬 西脇 西山 永井 徳平 谷田 酒井 黒崎 北川 岩本 家沢 遠山
他 本 本 原 見 田 瀬 脇 山 井 平 田 井 崎 川 本 沢 山
会 本 本 原 見 田 瀬 脇 山 井 平 田 井 崎 川 本 沢 山
員 本 本 原 見 田 瀬 脇 山 井 平 田 井 崎 川 本 沢 山
一 本 本 原 見 田 瀬 脇 山 井 平 田 井 崎 川 本 沢 山
同 本 本 原 見 田 瀬 脇 山 井 平 田 井 崎 川 本 沢 山
泰
子
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

八尾市民川柳会

7月から句会の場所と日時が変わります
毎月第2日曜日、午後1時から

場所 山本コミュニティセンター内3階
(近鉄山本駅からすぐです)

南大阪川柳会

会 員 一 同

暑中お見舞

申し上げます

川柳クラブ

わたの花

川崎 友甫	八倉知佐子
服部 春子	乾 美代子
平川 幸枝	篠原いつふみ
松葉 君江	井尻民子
田中トシエ	砂田八寿子
二瓶 道子	与田 明
初山 隆盛	坂本奈良司
生嶋ますみ	藤本 一道
吉村 一風	太田 恭一
村上ミツ子	山本美千子
神原まさと	江波正純
中島 春江	増田道子
山本 宏	馬場 宏

暑中お見舞い申し上げます 大阪川柳人クラブ

会 長 磯 野 いさむ
副会長 橋 高 薫 風
幹事長 川 島 諷云児
会 計 安 井 英 華

暑中お見舞申し上げます

富	奥	松	竹	藤	川	小	阿	西	黒	正
山	山	川	内	村	島	池	萬	田	川	本
ル	美	芳	花	メ	諷	し	萬	柳	紫	水
イ	智	子	代	女	云	げ	的	宏	香	客
子	子	子	子	子	児	お	的	子	香	客

川柳若葉の会

吉	山	宮	宮	宮	古	長	中	辻	椎	黒	橘
田	内	崎	崎	本	川	谷	井	川	江	田	高
あ	香	シ	弘	欣	喜	会	ア	ア	清	能	薫
ず	住	マ	直	史	美	美	キ	子	芳	子	風
き	住	子	直	子	子	美	キ	子	芳	子	風

暑中お見舞申し上げます

暑中お見舞申し上げます

川 柳 大 阪

会 員 一 同

大阪市交通局互助組合文化部・川柳部

暑中お見舞申し上げます

西宮ローズ川柳会

吉田笑女子	山本義子	山崎君	林城はっ絵	春城年	春城武庫坊	西口いわゑ	長浜澄子	那賀島雅子	久保まさお	木村貴代子	菊池トミエ	亀岡哲子	小倉藍	奥田みつ子	岩倉キク子	飯西ミサヲ	秋元てる	橋高薫風
-------	------	-----	-------	-----	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	------	-----	-------	-------	-------	------	------

もくせい川柳会

満仲きく子	松本ただし	榊本路児	星野登代子	春城武庫坊	辻川慶子	玉置英子	玉置重人	田中正坊	滝北博史	小林しげお	小池富子	栗原知香子	岸田悟郎	北山吉太郎	岡本明光	安藤寿美子	黒川紫香	橋高薫風
-------	-------	------	-------	-------	------	------	------	------	------	-------	------	-------	------	-------	------	-------	------	------

定例会句会 毎月第3月曜日 豊中市立中央公民館

産經新聞社
後援

大阪川柳の会

句会一毎偶数月上旬・サンケイビル本館3階 322号室
事務局 〒532-0025 大阪市新北野1-3-4-706 本田智彦 方
TEL (06) 6303-7297

安川	井島	英華	大阪川柳人クラブ	米澤	吉村	安井	本田	濱田	内藤	津田	砂木	坂本	後藤	河合	岡立	足立	磯野	代表
諷云児	諷云児	諷云児	諷云児	俊夫	雅文	英華	智彦	良知	光枝	一江	啓三	和樹	正弘	時三	良三	淑子	いさむ	

暑中お見舞申し上げます

高槻川柳サークル卯の花 一同

毎月第3木曜日句会開催

暑中お見舞い申し上げます

サークル 檸檬

吉田	山本	山本	西村	西出	西口	長浜	友碓	鶴田	田中	田中	嵯峨根	小林	片岡	奥田	石原	浅野	橘高
あずき	義子	希久子	哲夫	楓楽	いわゑ	澄子	雅子	遠野	正坊	薫	保子	一夫	智恵子	みつ子	靖巳	房子	薫風

暑中お見舞申し上げます

川柳塔みちのく

主幹 波多野五楽庵 副主幹 斉藤 菰

暑中お見舞申し上げます

東大阪市川柳同好会

会長 片岡湖風

暑中お見舞申し上げます

川柳ねやがわ

会員一同

会長 山本三郎

事務局 高田博泉

暑中お見舞い申し上げます

川 柳 塔 社

						常 任 理 事	副 理 事 長	副 主 幹	理 事 長	主 幹	名 譽 主 幹
寺 川 弘 一	高 田 美 代 子	木 本 朱 夏	河 内 月 子	奥 田 み つ 子	大 内 朝 子	石 原 靖 巳	西 出 楓 楽	宮 口 笛 生	板 尾 岳 人	河 内 天 笑	橘 高 薫 風
米 田 恭 昌	山 本 義 子	山 本 希 久 子	宮 西 弥 生	西 口 い わ ゑ	中 原 比 呂 志	長 浜 澄 子	前 た も つ				

川柳塔社常任理事会

柳界展望

新家 完司

▽人事往来△

★西田柳宏子氏(相談役)・川島諷云児氏(参与)に、大阪文化団体連合会(会長 斎藤守慶氏)から、大阪川柳人クラブでの活動に対し功労賞が贈られた。両氏は4月27日同クラブ幹事会席上で表彰を受けた。

■5月6日第12回時の川柳交歓川柳大会の選者として板尾岳人理事長が出席。同人数も参加した。

■5月10日橘高薫風名誉主幹は、平成13年度春の叙勲で木杯を受章のため、東京行。

★平成13年大阪造幣局校の通り抜け川柳入選句が次の通り決定した。本社同人の入選者は次のとおり。

〈天〉 榎本 舞夢

御懐妊祝うが如く紅手毬
〈秀逸〉妻谷重三・津守柳

伸 〈佳句〉村上玄也・矢

野粹・志田千代・指宿千枝
子・河内天笑・中島志洋・
田口穰一・中井アキ・福田
満州の各氏。

★第12回時の川柳交歓川柳大会は、5月6日兵庫県民会館で149名の出席により開催された。本社関係受賞者は次のとおり。

〈兵庫県芸術文化協会賞〉

古久保和子

〈神戸川柳協会賞〉

★木本朱夏さん(常任理事)和歌山市)は、ぐるーぷ『創』七月号に「相似と相違」と題して小文を発表した。

▽出版△

■三幸川柳教室(桜井千秀主幹・和歌山市)は、開講250回記念合同句集『絆』を出版。(B6判338頁)会員165名の各10句を収録。

■『平成柳多留 第七集』(他全日本川柳協会編・A5判240頁) 千円。申し込みは日川協まで。

▽御芳志御礼△

■親族の供養として金一封拝受(匿名)

▽訂正とお詫び△

■4月号 P96 上段16行目

徳田ひろ子 ↓ 徳田ひろこ

5月号 P5 上段12行目、
札状 ↓ 札状 下段5行目、
破算 ↓ 破産 P14 下段14行

目、技芸天 ↓ 伎芸天 P53
上段5行目、盲者 ↓ 亡者

P57 上段4行目、形身 ↓ 形

見 P60 中段6行目、酢で
く ↓ 酢では P61 下段4行

目、破礼句句 ↓ 破礼句
6月号 P61 上段19行目、
近森巧 ↓ 近森功

新同人紹介

早川 棲世
— 薫風・楓葉推薦

水谷 正子
— 薫風・岳人・由一推薦

矢野 梓
— 天笑・月子・泰子推薦

源田 八千代
— 薫風・天笑・月子推薦

津守 なぎさ
— 天笑・月子・柳伸推薦

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 ねやがわ	15日(日)正午から 光・不意・パニック・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	15日(日)午後1時半から 縄・素人・つなぐ・自由吟	岬町美崎苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	16日(月)午後1時から 災難・メダル・ことさら・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(木)正午から さすが・育つ・サングラス うっかり・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
城北 川柳会	21日(土)午後1時から 干す・シャツ・べったり 自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川柳会 梨花	21日(土)午後1時から 文・蔓・朝顔・ポーズ・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター(鳥取駅南)1F会議室 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 宮木方 坂田和歌子
岸和田 川柳会	21日(土)午後1時半から すそわけ・背伸び・騒音 駄菓子	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
はびきの 市民会 川柳会	22日(日)午後1時から 戸惑う・メダル・ぶらぶら 「不意」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳ふも 吟社	22日(日)午後1時から 短気・アウト・きっちり	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
川柳塔 みぞくち	23日(月)午後8時から 扇子・嫌い・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	25日(水)午後6時から プレゼント・困る・縁日・手品	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	27日(金)午前10時から 指・大胆・好き	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳同好会	28日(土)午後6時から 大地・握る・あなた・村	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
京都 塔の会	30日(月)午後1時から 山・……あがり・一気	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6629-6914）へご連絡ください。

7 月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 唐津支部	1日(日)午後1時半から シンプル・人妻・うるさい	唐津市 栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田天満町1-2-13 仁部四郎
川柳塔 なら	5日(木)午後1時から 調子・垢・泳ぐ	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼崎 いくしま	6日(金)午後1時から 洗濯・毒・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
富柳会	7日(土)午後1時から シャワー・同じ・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳会	7日(土)午後1時から 気・怠い・出る	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 みちのく	7日(土)午後4時から スピード・めろめろ・確かめる	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川柳塔 わかやま	8日(日)午後1時から 天麩羅・匿名・何・文字	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
八尾市民 川柳会	8日(日)午後1時から 夜・人間・気まずい・磨く	八尾コミュニティセンター3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
西宮北口 川柳会	9日(月)午後1時から 淑女・失敗・壁・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川柳 同好会	10日(火)午後1時から 帰る・野菜・こっそり	豊中市立釜池公民館 阪急・モノレール釜池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼崎 尾浜 川柳会	10日(火)午後1時半から 海・暑い・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑨番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
堺川柳会	12日(木)午後1時から 捨てる・映画・かるた	堺市総合福祉会館 3Fラウンジ 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 打吹	14日(土)午後1時から ベッド・昼・足掻く	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川柳塔 まつえ	14日(土)午後1時半から 銀行・天才・着る	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ

編集後記

月号に応募用紙を添付するので、応募資格のある方全員の参加を待っています。

☆7月7日の麻生路郎・葎乃句碑建立記念川柳大会が迫ってきた。路郎先生没後36年経った今も、脈々と川柳塔に息づいているその川柳魂が、句碑から伝わってくるであろうと、除幕が楽しみである。

☆薫風名譽主幹が木杯を受章された記事は、P53でご覧下さったと思う。9月に祝賀川柳大会が予定されている。同人・誌友の皆様には、おめでた続きの川柳塔を、より一層盛上げていただくようお願いします。

☆8月には二賞選考応募が行われる。選考方法が変わって今回で三回目になるが、間違いないようご注意ください。応募句はあくまで自選句(自分の句)なので誤解のないように。8月

月号に応募用紙を添付するので、応募資格のある方全員の参加を待っています。

☆さて、左党にはビールの美味しい季節となった。毎年、東京ドーム何杯分の消費と発表されると、その量に驚かされる。

☆毎年8月末大阪通天閣で、女性がビールを飲み干す美しさを競う「ビールの女王選定会」が開かれる。昨年その様子を伝えた新聞を見て、わが目を疑った。何と皆さん大ジョッキにストロ―を入れて飲んでいる!

☆ビールは男女を問わず豪快に、「ググイッ」と空けてこそかっこよく、美味しいと思うのだが。いまだに一度真似てみようという気さえ起きない。

☆ちなみに昨年は50人参加、二度の予選の後5人が決勝進出。優勝したのは25歳のO1だったそつだ。(ふ)

ひとこと

ルール

さて何を書いたものかと暫くは考える人となった。折角のチャンスだから日頃思っていた事を……とペンを取る。他府県での大会等で呼名のタイミングのずれと言うのは、一度読んで呼名、次にもう一度読まれて協取りに回る。殆んど柳社はこの形式で進められているが、二度読みの後呼名という所もあり、選者も作者もたついで

しまう場面にあう。また佳句か客か、五からか一からかと迷っている。天地人、秀、特といろいろある。各柳社のトップが一度懇談し、出来れば統一して頂ければ、会場に美しいリズムが流れるのではと思ったり、中八の句が秀句に発表されて、おやおやという事にならずに済む。基本を守り育むのも人間だが、川柳もそれぞれで。

(高田美代子)

○約束の日時を忘れる。計算を間違える。固有名詞がでてこなくてうろたえる。

○こんなことが日常茶飯となり、同年の人達と笑い合つ。や編集スタッフのお蔭でイタリヤ8日間の旅を実現することができた。行ける時に神経を遣い、パチカンの味を感じてしまふ。イタリヤの光と影の部分を見た旅でもある。かくして身心共にリフレッシュされ、また日常に戻った次第。(希)

○友達が膝の痛みを訴えて病院に行ったら「カレイのせいです」と言われキョト行っておけと言つたの声を思い出した。蝶かな、いやカレイライスを食べたせいかなと思つたり加齢を思いつく。や塔が見え隠れして、すっかり中世にタイムスリップ

○子育てが終り孫にも手が

○子育てが終り孫にも手が

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（9月号）」

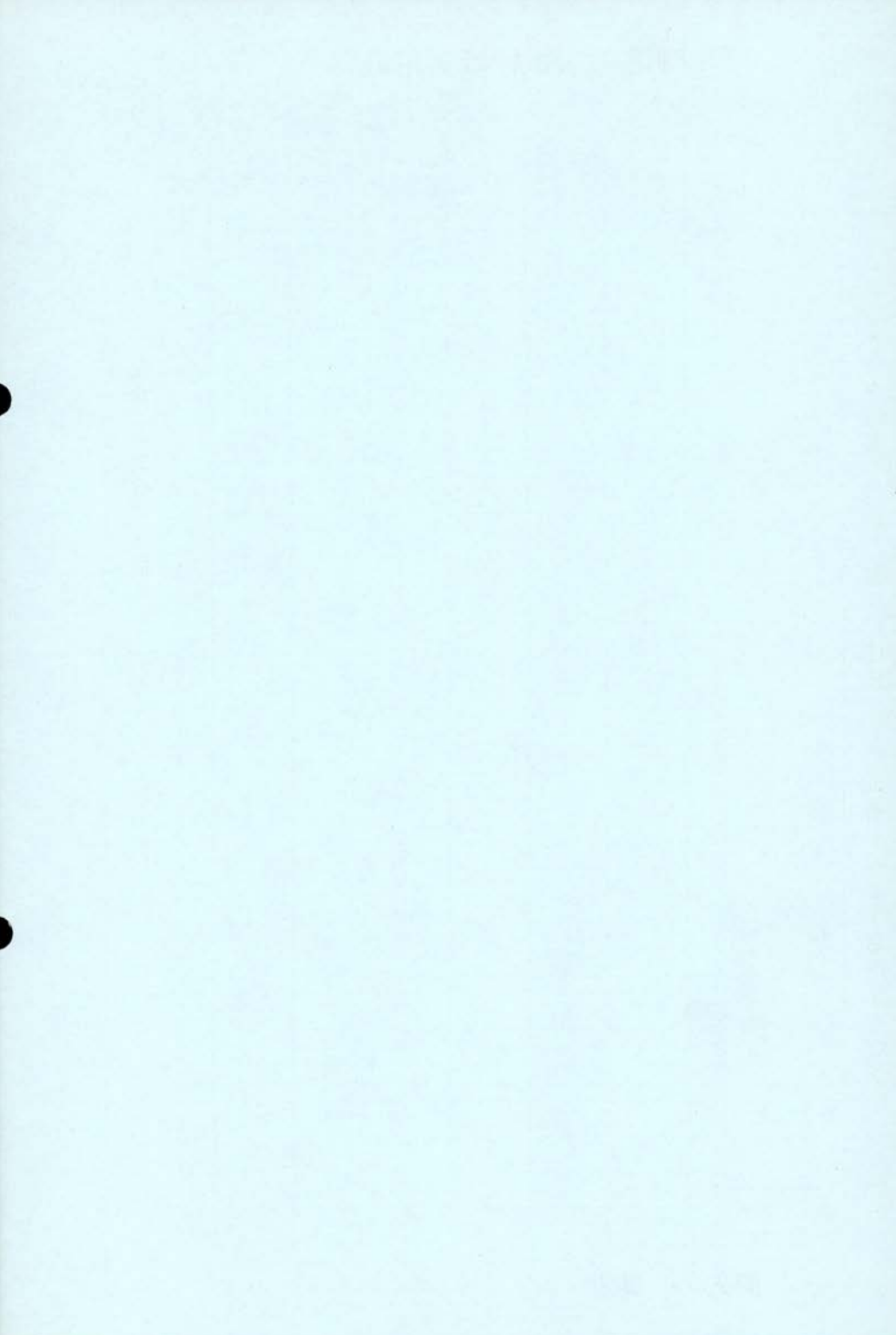
地名

姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

9月号発表 (7月15日締切)

川柳塔 (8句)	河内天笑選
水煙抄 (8句)	板尾岳人選
愛染帖 (3句)	波多野五楽庵選
茴香の花 (3句)	西出楓楽選
「シンプル」	板垣草丘選
「人妻」	中井アキ選
「うるさい」	渥美弧秀選

初歩教室 「引く」 (3句) 吐田公一担当

10月号 課題吟 「地 図」「石」
「ツァー」
初歩教室 「席」

路郎忌 本社7月句会

とき 7月2日 (月) 午後5時半
ところ アウイーナ大阪 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「むさむさ」

「使う」	津守柳伸選
「欲しい」	高田美代子選
「信」	田中正坊選
「ゆらぐ」	田中新一選
	橘高薫風選

席題 1題 当日発表 (各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

本社8月句会 8月3日 (金)

兼題 「チャンス」「ふと」「嘘」
「待つ」「過去」

夜市川柳募集

第2回 「買う」 播本充子選
ハガキに3句 7月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友 (誌代半年分以上前納の定期購読者) に限り、本誌最終ページへの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花欄・一路集 (課題吟) および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所 (県・市名) を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 六百元 (送料92円)

半年分 四千元 (送料共)

一年分 七千九百円 (同)

二〇〇一年(平成十三年)七月一日発行

編集兼 河内権治

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇-一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (06) 969-1494

振替 〇〇九八〇一五一一三三六八番



【イメージ・キーワード】
“Value for Human”
バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540-0024 大阪市中央区南新町1-4-7

(06) 6941-9631

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178